

特集◆私の職業

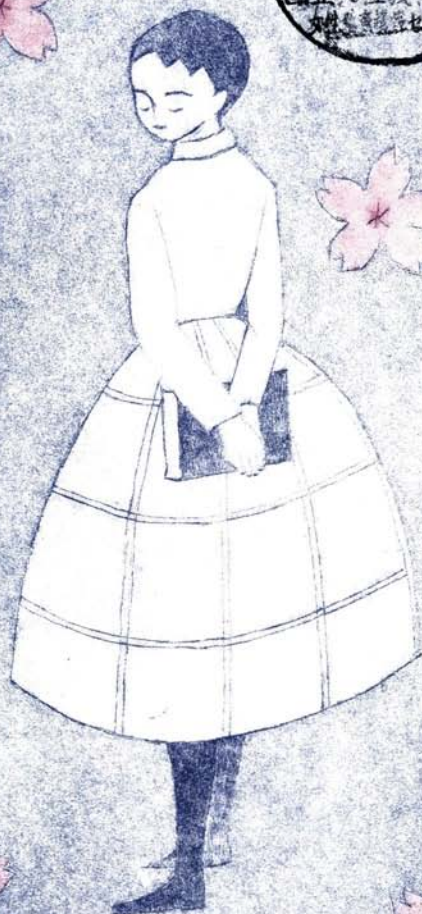
インタビュー●主婦が始めたレストラン

特別寄稿●カーチの鳴く村で

わいふ

投 稿 誌

読んで書いて、みんなでつくる



289

超初心者のための パソコン通信講座「クラブネット」

電話でしっかりサポートだから安心です。

只今
「わいふ」読者
受講料10%OFF
キャンペーン
実施中!



クラブネットなら目的に応じて選べる特にお得なセットコースを設定。受講料はお手頃な月々7,500円から。必要な方には最新のパソコンセットを大型電気店に負けない価格でご提供。パソコン機材も受講料も、分割払いができますから安心です。

「手順に従って進めるだけで

パソコンができるようになる！」

クラブネットでは、

コンピュータの専門用語を極力使わずに

パソコンが全く初めての方にも

分かり易いテキストを作り上げました。

「パソコンはどれも苦手」という人にこそ

チャレンジして欲しい。

それがクラブネットの通信講座です。

3、4カ月後にはきつとあなたも

パソコンを使いこなしてしまいます。

今こそ勇気を出して始めてみませんか？

クラブネットが最後までお手伝いします。

只今、「わいふ」読者一割引きキャンペーン中！

クラブネット通信講座を受講してできるようになること

●文章を書く ●案内状やお手紙、年賀状等を作る ●簡単な

表やグラフを作る ●インターネットを使って、情報を集め

たり買い物をする ●電子メールのやりとりで、友だちやサ

ークルとの交流をはかる など……くらくく学習で、「中級程

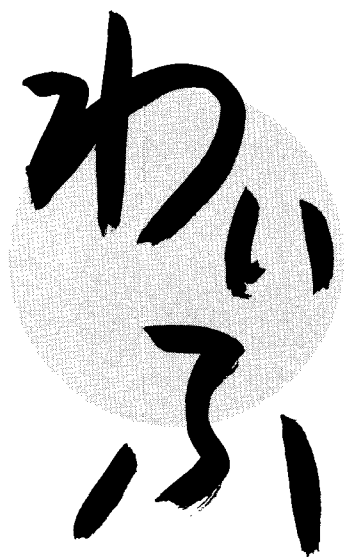
■お問い合わせ・資料請求は

Club Net

初心者のためのパソコン操作通信講座 クラブネット

〒104-0045 東京都中央区築地2-4-10
株式会社アイデックス
「クラブネット事業部・わいふ係」

TEL 03-3544-4500 FAX 03-5565-1066



「わいふ」を読む

「わいふ」に書く

あなたの人生が開ける

わいふ

読んで書いて
みんなでつくる

289号

目次

デザイン／宮塚真由美
題字／石渡希和子
表紙イラスト／箕輪絵衣子

イラスト／ 荒田ゆり子
イシノフミ 小沢恵子
カステラネンコ 栗田笑
弘法堂建二 小林正子
佐藤瑞江子 橋本美智子 渡辺美帆

4 わが家の歴史写真

母が働いていた日々

東京都八王子市 小宅昌枝さん

写真提供・文／小宅昌枝

特集 私の職業

ウェブプランナー・ライター 田村敦美

大学教授・夢を夢見てここまで来た 伊藤琴子

パートに出て ゴル

水泳指導員という仕事 新井純子

仕事と私 サマース清美

バレエ教師 十文字圭子

記憶の片隅に 大原みかん

92 コミック これが子供の生きる道 21

栗田 笑

96 フリートーク

大沢陽子・島 初美・中田慶子・匿名
原 昭宏・三田サキ・鈴木貴子

109 読んでよかった 伊藤琴子

最終回

嫌疑

野村浩子

119 笑える！

田中慶子

120 ズバリ一言

松本とみよ・井上暁子・木村澄子

126 子育てフォーラム ●NMSのページ●

石井しのぶ・久保埜慶子・杉田みほ

38

カーチの鳴く村で

城下るり子

47

一筆両断 21 西田淑子

48

エッセイスト・クワブラ

浅川涼子・寺田真佐・高松恭子・砂原富美子

永田道子・榎 雅子・柳澤幾美

福島みさを・中松ミナ子

63

読んでよかった 本間美恵

連載 6

64

リラの花 桜の花

浅野素女

76

インタビュ

主婦が始めたレストラン

すみれ家・田村匡世さん

インタビュアー・田中喜美子

87

ブック情報

88

あなたへスマッシュ

流稿さよ・犬伏裕子・後藤 晶・林 夏子

132

家族のスケッチ

林 直美・太田啓子・十河温子・匿名

139

情報コーナー

140

コミック 毎日が平日 海砂

142

私もひとこと

鈴木紀美枝・水野徳子・辻浦知津代

渡辺憲子・伊藤琴子・大原清子・山内志保

加藤智恵子・トト安田・高橋安子・太田啓子

鴨川典子・後藤 晶・林 直美・尾崎美奈子

田中順子・島村君子

スタッフから

募集します

編集だより

お友達にわいふを

147

わいふインフォメーション

149

投稿のきまり

152

150 148

91

バックナンバー

125

母が働いていた日々

東京都八王子市 小宅昌枝さん



祖父西田亀松と祖母ナミ



母カズミ 女学校時代



全員集合 母、父、祖母、祖父、妹、弟、私



母、祖父、祖母、母の姉の夫、母の姉



少女時代

写真を並べてみて、本当に知らなかったことが多いなあと妙に感心した。小さいころは絵本感覚でなんとなく眺めていたが、年頃になると、興味の方向がたちまち家族から離れてしまい、アルバムを開くことはなくなって久しい。

しかも、祖父母のことや母親の昔のことを知っている人はほとんど亡くなっているの、この機会におぼろげな記憶を辿ってみる。

両親はいわゆる共稼ぎで、父親も母親も大阪市内の学校で先生をしていた。

子供は私の下に一歳半くらいずつ歳の離れた妹と弟がいるが、母親は三年だったか、五年だったか休職して、あとは同居している自分の両親に預けて仕事を再開したそう。

小さいころの母親の記憶としては、ノートや本が山積みになった部屋でめがねをかけて何か読んでいたり書いていたりしていたことだ。この光景を見慣れていたおかげで、友達の家に行っ

裏に第一景、第三景なんて書いてある本格的な劇？。右端が母

学生時代の記念写真。
ポーズが決まってる

時代を感じるファッション(?)



友だちとの写真が結構あったので、着物姿の人が入ってるのを一枚チヨイス。まん中が母。

昭和41年



昭和30年代
ミッチー（美智子様）のヘアバンド？



仕事仲間とよく旅行に行っていた



て応接間に立派な図鑑や本なんかがい
れいに整然と並んでいるのを見ると、
「飾ってるだけやがな」と思い上がっ
たことを感じたりしていた。

忙しい時は仕事を家に持ち込んでい
て、私もテスト用紙の整理などを手伝
ったことがある。

参観日には「うちのお母ちゃんがい
ちばんましや」と思っていた。まわり
は農家が多かったので、若いお母さん
達も服装が地味でなんだか老けて見え
たのだ。

このころ、よく共稼ぎの家の子は寂
しい思いをすると言われたが、私に
はそんな記憶があまりない。祖父母が
いたので、当てはまらないかもしれない
が、おじいちゃん、おばあちゃん子
というより、むしろ母親との記憶がけ
っこう多いのだ。

仕事から夏休み等で時間がとれたか
らかもしれないが、一緒にあちこち出
かけたこと以外に、子供をおもしろが
らせるのが好きだった母親の性格にも
原因がありそうだ。

機会があればおもしろいことを言いたがり、当時よく見ていたテレビの「七色仮面」を、真剣に見ている私達の後ろで、「あ、パイナップルや」と言っ
てからかったり、しりとりをしていても「おしり」とか「しっぱ」とか、小さい子がおもしろがるようなことを言いたがった。

母親の両親は明治生まれ、祖父も先生だった。祖母は、まめで気も強い明治女（私の『明治女』のイメージだが）。祖父が祖母に怒られているところは見たことあるが、その逆は見たことがない。

母はそんな家庭の二人姉妹の末っ子だ。しかも姉とは一回り歳が離れている。こうして、昔の写真を並べてみると、その苦労知らずであっけらかんとした性格がわかるような気がする。

そのせいなのか、どうなのか近所付き合いが苦手で、地域の人とはあまり深い付き合いをしていなかった。

平成五年に父が亡くなり、葬式や後のかたづけがや々と済んで、やれやれ



職場の仲間と旅行
昭和31年

と思っていたところで、体調を崩し、それから亡くなるまでは半年くらいで、病状の進行も速く、なんだかあつという間だった気がする。私は東京に住んでいるので両親ともほとんど見舞いにも行けず、このことは未だに後悔している。

阪神大震災も少しの差で知ることもなく、トラブルや悩みも人並にあつたと思うが、そこそこ幸せな人生だったのではないだろうか
と思っている。

（写真提供・文／小宅昌枝）



昭和31年9月、1年5組の子供たちと

社会思想社 <http://www.shakaishisou.co.jp/>

(価格は税別)

東京都文京区本郷3-25 ☎03-3813-8101

書店品切の時は代金引替急便380円

大反響！

年金で豊かに暮らせる町に



四六判・1600円

主婦の投稿誌わいふ編集部編

その町とは——交通機関が通っている、安くて豊富な食料が手に入る、病院が複数ある、老人ホームがある、温暖な土地である、農園や園芸ができる、家賃が東京の50%以下、その上温泉が近い……。この条件に合った30の自治体を選び、老後を年金だけで豊かに暮らせる町を資料・解説付で紹介。氣にいった町があれば、すぐにも移住計画がたてられ定年後の人生設計を考えるガイドブック。

新版日本流行歌史 (上中下)

矢沢寛他編 日本初の流行歌歴史事典 ◆各五五〇〇円

日本を知る事典

大島建彦他編 習慣風俗等伝統文化事典 ◆八七三八円

歴史の研究 (全3巻)

A・J・トインビー 著者の代表的著作 ◆各二四〇〇円

定訳菊と刀——日本文化の型

R・ベネディクト 日本論の古典的名著 ◆一五〇〇円

老後は、年金が一・五倍に使える町に移住しよう！
安心の町30カ所を解説付で紹介。

あなたの子育て 診断します

母親の個性を生かした「子育て」を

◆子育てを診断するなんて、嫌な感じ！
なんて思わないでください。そうではなく、あなたの性格に合わせて一番やりやすい、いい子育てができるガイドブックなのです。

◆五種類のアンケートと、その答えからあなたのタイプがわかるチャートがついています。●権威型●保護型●受容型●放任型●流され型の五つです。

もちろんどれがいい、どれが悪いという問題ではありません。自分のタイプを知った上で、自分に一番ふさわしい、そしてやりやすい子育てのしかたが見つかる本なのです。ぜひお試しください。

◆それぞれのタイプがよくわかる、ごく愉快な子育ての実戦記がついてます。

田中喜美子＋NMS研究会 著

定価一三六五円(税込み) 小学館刊

特集

私の職業



ウェブプランナー・ライター

京都市右京区

田村敦美 (39歳)

転職がある人、と知っていないながら夫と結婚して十四年になります。その間、五、六年おきに赴任地が変わり、現在は京都に住んで三年目。子どもも三人、元気に中学生と小学生になりました。

夫の転職が決まるたび、私は勤めていたところを変える羽目になり、何度となく悔しい思いをしました。「転職族の人は当てにならないから」と露骨に言われることも。京都に来たときも、私はすでに三十五歳を越えていましたから、年齢的にすぐ就職、ということには難しい状態でした。

女性の集まりで偶然出会った友人が立ち上げた、小さなホームページ制作事務所を手伝い始めたのはそんなころ

です。仕事がないなら自分で仕事を作ってしまうという軽いノリでした。ホームページを作ったり、初心者向けのパソコン教室を企画したり、インターネット上でお店の運営、販売促進企画をしたり、といったことが主な仕事です。

ホームページは、画像データと言われる写真やイラストなどと、テキストデータと言われる文章（文字）で構成されています。ホームページを作るには、画像やHTMLの知識と、文章やコピーを書く能力が必要ですが、私は主に後半の、モノ書きの部分を担当しています。

また、ホームページと言うのは、商

用であれ情報用であれ、そのままでは誰にも見つけてもらえません。たくさんの人に見つけてもらうためには、（これをアクセス数を増やす、という言い方で言います）様々な企画・戦略が必要になります。

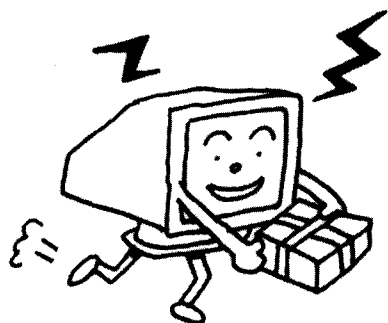
情報はすぐ古くなりますので、かなりの速度での更新作業も必要になります。このため、ホームページは作ってしまったえば終わり、といった性格のものではなく、むしろそれ以後のほうが仕事が多いと言えます。

また、インターネットでバーチャルにお店をもたれる方も増えていきます。実店舗に比べて比較的安価で立ち上げが可能な上、小規模でやっている限り、設備投資もそんなにいらないし、初心者でも比較的ノウハウが会得しやすいため、女性の参入も増えてきました。私の仕事は、どうやったらこのインターネット上のお店でお客様に商品を買っていただくか、販売促進のための企画を立てることです。

メールマガジンという名前をお聞き

になったことがおありでしょうか。電子メールで届くちょっとした読み物です。興味のあるマガジンを登録しておくと、自動的に多くの場合無料で配信されます。私は実は、このメールマガジンを三つ主宰しています。メールマガジンをライター・編集者といったところでしょうか。

インターネットショップで大切なものは、電子メールでのやり取りです。そ



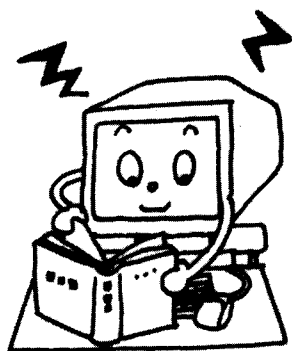
のメールの窓口になるのが、メールマスターと呼ばれる人達ですが、私も三つのショップのメールマスターを兼務させていただいております。メールを使って、パソコンのモニタの向こうにいらっしゃるお客様に接客している、といったほうがわかりやすいでしょうか。

仕事の内容を次々挙げてしまいました。が、どれも仕事をさせていただいて



いるうちに、自然と増えていったことばかり。私のようなパソコン初心者にもできるくらいですから、今後は多くの女性の方の参入が可能な分野だと思います。

仕事は自分で作り出すもの。そうすることによって、可能性は無限に広がっていくと思いますし、インターネットという媒体も、大きく広がっていくのではないのでしょうか。



大学教授・夢を夢見てここまで来た

アメリカ リトルロック市

伊藤琴子

私が初めてコンバスにあるオハイオ州立大学で、社会学概説のクラスを受け持ったのは一九八二年九月、二十四歳の時である。当時、私は社会学部の博士課程に在籍する大学院生だった。私の仕事はT A、ティーチングアシスタントといって、一日四十八分の講義一コマと、一時間のオフィスアワーズの労働に対し、大学側が授業料を全面免除した上で、毎月お給料をくれるというものだった。

オハイオ州立大学は全米でも一、二の広い敷地を持ち、キャンパスには四百五十以上の建物がある。クラスの移動するのに歩いたり、キャンパス内でバスに乗ったりするのに時間がかか

るので、授業は四十八分間という半端な単位になっていると聞いた。

オフィスアワーズとは教授やT Aが、各々勝手に「営業時間」を決め、その時間中はオフィス（日本の大学では研究室と呼んでいる）にいて、学生の質問に答えたり、小論文のアドバイスをしたり、試験作りや採点、または講義の準備をする時間である。月曜から金曜まで毎日一時間のオフィスアワーズを持つ人もいれば、週二回二時間ずつ、と、時間はまちまちである。

当時、社会学部院生T Aたちのオフィスは大部屋だった。キュービクル(cubicle)という仕切りがあり一人一人机と椅子と、一畳ちょっと広さの場

所が与えられていた。多少のプライバシーはあったものの、ほとんどつつぬけの状態で、私たちはオフィスアワーズの大半をおしゃべりしたり、本を読んだり、たまに学生の世話をしたりした。

私はオハイオ州立大学大学院博士課程在籍中の五年の間に、社会学概説、社会学理論、現代世界の社会等を教えたが、このT Aのポジションは誰でもが得られるわけではなかった。まず第一に成績がよくないといけない。これは、「私は頭のいい人間です」と、口で言うのは易いがG P A (grade point average)とよばれる成績点に、点と云うかたちにしてそれを示すのは難しい。成績がすべてAをとったとするとG P Aは四・〇、Bだと三・〇となり、普通T Aは最低三・三ないと選ばれない。勿論点の多いほうがより有利になる。日本の大学と違いアメリカの大学はトコロテン方式でない。よい成績を上げるには、それなりの頭脳は勿論のこと、人間の頭などそう違わないのだから

ら、究極のところ大切なのは努力、忍耐、といったところだろう。

毎日健康に気をつけるのも必要条件である。体をこわして授業を休むということになる遅れをとるし、またT Aとしてお給料をいただいているから休むのはプロ意識に欠けるとも見なされる。

毎日予習復習を欠かさない、という生活が続いたせいとか、今でもちゃんと「勉強」をしないと寝つきが悪かったりするの。習性って恐ろしいよね。自分の問題が解けない夢を未だに見るし……。

大学院では膨大な量の本を読まなくてはならない。博士課程ではジェネラル試験という総合的にテストされる試験があり、これをパスしないと博士論文に進めない。この試験の前の夏休み、土日や休日は、寮の個室（トイレ、シャワー、洗面台付、ま、ちよつとしたホテルの感じ）にひっそりおこもりをし、一日八時間以上本を読んでいたこともある。ジェネラルは三科目あり私

は組織論、理論、そして社会心理学の三つを選択した。一科目四時間ずつぶっ通しで問題を解くのであるが、一番最後の科目を終えた日、痔でもないのにお尻からいっぱい血が出てトイレでまっ青になった。精神的にも肉体的にも疲れていたのだろう。自分では頑張ったという感じはあったけれど、体をこわすほどやったとは思えなかった。健康はすぐ回復した。

「好きこそもの上手なれ」とはよく言ったもので、私は自分のやりたいことを必死に追求していたので、勉強するということ自体苦労ではなかったしむしろ楽しいのだ。

勉強というものは好きで自分から進んでするものだと思う。義務教育は別として、中学校を出たら、自分の好きなものを追求できる、そういう理想的な教育の場があればよいと思うが、夢だろうね、今の社会じゃ……。別に世の中すべての人が大学にいかなくてもよいし、勉強以外にも音楽、舞踊、美術、クラフト、と自分のやりたいこと、

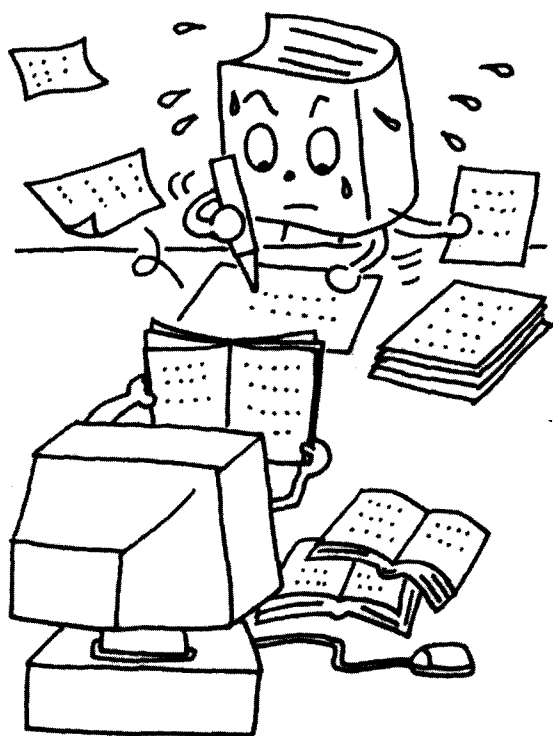
それが見つかればそのほうの能力を磨けばいいと私は思うが、脱工業社会は学歴社会でもある。

T Aのポジションを得るには三人の教授からの推薦状もいる。アメリカ人は率直に人をほめるのがとてもうまい国民性をもっている。日本人がほめると、たまに明らかにウソとかおべんちやらとわかる人がいたりするけれど（勿論アメリカ人にもそういうのはいる）、全体的にアメリカ人は他人のもっているよいところを指摘するのがうまい。誰でも何か一つ取りえがあると彼らは考えているみたいだ。だから推薦状となると、それこそこちらが恥ずかしくなるくらい賛辞が述べられたりする。

すばらしい推薦状を書いてもらうには日常の人間関係が大きく左右する。別に八方美人にならなくてもよいが、人に嫌われたり、変な噂がたつたりすると大変なことになったりする。うまくやっていくには、人の悪口を言わないことと、ゴシップを避けること、そ

して敵を作らないこと、これらが大切だが、どこの文化社会でも同じことだと思う。

私は博士論文のトピックを、アメリカ中西部における日系企業の文化的適応にし、地元の企業のかたがたの助け



を得てデータを集め、無事論文のディフェンスをし博士号を取ることが出来た。そして卒業と同時に、コロンバスから車で一時間のところにあるスプリングフィールドのウィッテンバーグ大学で、一年の客員教授として働くこと

になった。

この仕事は棚からボタ餅式にやってきた。以前オハイオ州立大学で教授をしていた某先生が私のことを見込んで、このポジションに推薦して下さったのだった。ここだけの話だけれど、一応「公募」ということになっていた。私の仲間のTAの数人も応募した。他の州からも応募があったらしいが、私が選ばれた。どこまでもコネの強さよ。ラッキー！

ウィッテンバーグ大学の一年はまたたく間に過ぎていった。一九八七年の九月に採用され、任期は翌年の六月までである。私は三月ごろに次の仕事を探すべく職探しを始めた。アメリカ社会学会（ASA）は、「ブルティン」といって、全米、カナダ、ヨーロッパ、アジア等の社会学の教授の求職を載せる出版物を出しており、私は自分の専門分野の先生を求めている大学に履歴書、推薦状を送り応募をし始めた。が、しばらくの間は先行きが本当に暗かった。「お先まっ暗」とはこーゆうこと

をいうんだと身にしみたもね。

まず最初に出した十校はすべてボツ。応募しても応募してもくる返事はつまるところ「あなたは要らない」というものだった。こういう状態になるとメールボックスを開けるのもつらくなる。そして、その内にお断りの手紙にもパターンがあるという事に気がつく。手紙の全文を読まなくても一行読んだだけで内容がわかったりする。そして、吉報は手紙でなく電話でくるということを知る。そりゃそうだよね、喉から手が出るほど欲しい人なら求人しているほうは、電話急げと、その人をほおっておかないもん。他に取られないから。

電話のそばで待つつらさ……。

私は日本の高度成長期に少女時代を送った。あのころは日本の経済も社会もいつも右肩上がり、人々は西欧に追いつけ追い越せと頑張り（昭和一ケタ生まれの私の父なんかいい例。真面目に働くことが生きがいなんだもん。お陰で家は「母子家庭」と母が嘆

いていた）、子どもながらに日本がともいいきよしている肌で感じることものできる時代だった。テレビをつけると巨人の星、サインはV、アタックナンバーワン、柔道一直線、熱き血のイレブン等、スポ根とよばれるスポーッ根性物語が一世を風靡していた。何があっても頑張り通す。チームワークを守って何がなんでも優勝を目指す。失敗したつていい、それから学ぶことが大切なんだ。そして自分の力尽きるまで努力、忍耐。汗と血と涙で栄光が勝ちとれるんだ。なあって、今の子に言ったら「クサイよ」なんて言われそうだが、私の成長期においてこれらの番組の果たした役割はすごく大きいし、私と同年齢の人とは、中年となつた今でも番組の話をすると盛り上がるし、なんといつても主題歌を三十年たった今でも歌えるところが、三つ子の魂というか、すごいよね。

スポ根ものは私にとって、ちよつとやそつとでは折れないで強く人生を生きるエネルギーをくれた。毎週テレビ

にかじりついて「根性をもて！」という概念の洗礼を受けていたので、ほんとは少しのことじゃへこたれない。

が、一九八八年が明けての数か月は仕事が見つからない。ただそれだけで、私はしよげていた。要らないという手紙もそのかさが増すにつれて私の涙を誘った。今まで本当に真面目に頑張つてやってきて、博士号も取つたし、客員教授にもなった。なのに何故私はこの社会で必要とされていないのか？この広い世界中で、どこか私を必要としていてくれるところがあつてもいいんじゃないか。ねえ、おしえてお爺さん、おつと、これはアルプスの少女ハイジの歌だった。

自分が非常に落ち込んでいる時、人の幸せを見るのはつらい。なんでよーと、ひがみたくもなるし、あたしがつ悪いカルマを作つたと言うのよ、と、開き直りたくもなる。お酒を飲まない私は健康にもいいからやけ酒でなく「やけ水」をたくさん飲んで、するとおしっこをしたくなってトイレに行

き、悲しみも一緒に流すという暗いことをしていた。

そして、「仕事がなかなか見つからなくて」と言う私に優しくしてくださる人たちに甘えた。ある日、退職した医者の方と共にインドに旅立つというアメリカ人の女性が、私を昼食に招いてくださった。キリスト教徒の彼女は「あなたのために神にお祈りをしてあげる」と言ってくださった。その気持ちが有難かった。神はわたしたちが扱うことのできない問題を与えない。わたしたちが努力して解決していくようそれは愛の鞭。だから絶対にどんな苦行、困難でも必ず抜け出ることができ。苦勞をしている時にこそ、その人の人間としての器、生きる実力がテストされている。えーっ。そんなこと言われてもわしやマゾじゃないぜ。もうええ加減この苦しみから救われたい。もう迷えるブタ、おっと、迷える小羊でいるのはいやだ。この先、何十通という拒否の手紙をもらったらこの苦行は終わるのか。友人のアメリカ人は、

「百通くらいかな」と、軽く言った。「ま、百通応募して駄目なら駄目なんだよ。でも、それまではやってみよう」と、激励してくれた。涙出た。

私は昼食を終え散歩がてら歩いて家に帰った。その帰り道どこからともなくサウンド・オブ・ミュージックのある歌が私の口元にやってきた。ジュリー・アンドリュースが大佐かなんとかとデュエットした歌で、*Nothing comes from nothing* というもの。つまり、収穫したければ種をまかないと生えてこない。結果を得るにはそれなりにその原因、努力を怠つてはいけない、ま、大雑把に言えばそんなようなことである。そうか、私ももっと多くの大学に応募してみよう。ただすねたり、ひねくれたりして待っているだけではいけないんだ。幸せは歩いてこない、だから歩いて行くんだね、と、水前寺清子も三百六十五歩のマーチで歌っていたではないか。

私はその足で、家の隣にある大学に行き十二校の大学に出す応募のバック

(履歴書、成績証明書、卒業証明書、学生の私の講義の内容評価等)を作り、その日のうちに郵便局に行つて出した。あとは寝て待った。

そして、その十二校すべてより面接に来てくれとの電話があつたのである。待てば海路の日和ありではないか。やったあ！ 十二校のうち数校は一年契約だったので断つて、これぞと思う三校の面接に行くことにした。飛行機代、ホテル代、食事代と、すべて大学側がもってくれて、仕事がないと騒いで悩んでいるところから考えるとほとんど大名旅行だった。

私はアーカンソー大学リトルロック校に赴任が決まり、衣類やら本を郵便局に小包を作つてはもつて行つた。オハイオをいよいよ発つという日、私は社会学部に行き教授や秘書にお礼を言つた。新しい門出が私を迎えようとしている時に、慣れ親しんだ土地を去るのはつらい、そんないろいろな思いの混じった気持ちで、私はアーカンソーまで一泊二日の車での一人旅をしたの

である。全行程千二百キロを越える距離だった。メンフィスを出てミシシッピ川にかかっている橋のまん中に「ようこそアーカンソーへ」と書かれた看板を見た時にはよくぞここまで来たと感激をした。

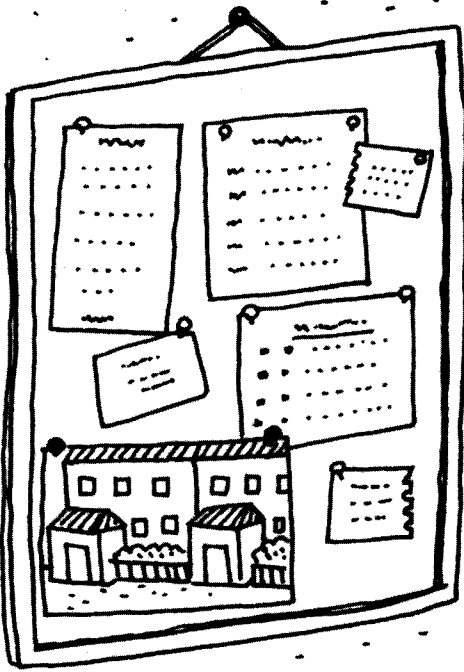
新しい大学での職業生活は以前とそう変わらなかった。ただ一年を四つの学期に区切るクォーター制から、二つ

に区切るセメスター制になり、教える科目が増え、また学期の長さも十週間から十五週間になった。講義の時間構成と単位数はほぼ同じである。月・水・金と週三回のクラスは講義時間が五十分。火・木と週二回のクラスは七十五分となっており、それに毎日一時間ずつのオフィスアワーズがつく。普通、月・水・金は十時から昼の一時ま

で仕事はおしまい。

私は大学のオフィスでいる時間は無駄な時間に思えるので、仕事は全部家に持って帰り、くつろぎながらする。コンピュータもプリンターもファックスも家においてあるので便利である。火・木は最初の講義が十時五十分であり、もう一つのは一時四十分なので、三時半には家に帰れる。試験は学期中三回くらいで採点は楽である。

私はこの大学に赴任して六年目に、中古ではあるがプール付のコンドミニアムを購入した。タウンハウス（ま、日本でいう長屋って感じ）に一人ずつ十四軒あり、住人は若い老いたのいろいろいるが、リゾートホテルのようなところである。夏に訪ねる時は水着を持っていらしてね。日本じゃ五人家族が住める広さだけど、物価の安いアーカンソーのこと、十五年、年六・五パーセントの利率で、な、なんと四百八十万円で買った。女性一人でも軽く家を買えるというすばらしいところだ。仕事でストレスがたまりやすいの



で、住む環境を整えるということとはとても大切であると思う。自分の所有というのが嬉しい。

日本の大学と違って、うちの大学は入試の採点とかしなくていいし、また四年生の就職指導をすることもない。長々としびれをさらすような会議もないし、一言でいえばさっぱりしている。日本で教授をしている友人たちは「いつも雑用が多く、くだらないことに時間をとられ過ぎる」とボヤいているが、それにも増して最近の日本の大学生は、学力が低下していて教えるほうも大変なんだそうだ。

私の大学は州立なので、州の住民で税金を払っている人は、割と安く大学に通うことができる。オープン・アドミッションといって、高校を卒業した人なら誰でも入学することができる。が、卒業は難しい。外国人や外の州から来た人は、授業料は高くつく。が、日本の大学に比べればバーゲン価格といったところか。

学生達のほとんどはフルタイムかパ

ートタイムの仕事を持っていて、高校を出てからしばらく働いた後、大学に入ったというのがたくさんいる。平均年齢は二十七、八歳である。六十歳以上になると学費がただになるというのが高齢者の学生もいる。

日本の文化と社会のコースを教える時に、日本での「元号」という概念を教えるため「自分の誕生した年を昭和で言ってみましょう」そう言う私に、ローズさんは手を上げて質問した。「昭和以前の元号はなんと言うのですか」と。彼女は大正生まれだったのである。

卒業式は五月と十二月の二回に行なわれるのであるが、親子三代で同時に卒業をした家族がいた。おばあちゃん、お母さん、そして娘の三代である。歳をとったら隠居生活、勉強なんか大嫌いだつた、というのでなく、六十になつたから学費はただ、頭に刺激をいいうことで大学に来る学生たちを見てみると、人間歳とつたからボケるのだから。常に中間テストだ、小論文だと、

ボケてるひまがなければ頭はいつもフル回転するんだなアと、感じざるを得ない。そして、年の若い私が高齢者の彼らから、教えられることも数多くあるのだ。

アーカンソーはまわりをテネシー州、ミシシッピ州、ルイジアナ州、テキサス州、オクラホマ州、ミズーリ州に囲まれ、いわゆるアメリカでも南部にある。オハイオのきれいな標準英語に慣れていた私にとって、サザン・ドロールといわれる母音を引き延ばしている発音や、南部特有の言いまわしは外国語のように響いた。教え始めたころは、アーカンソー以外の州の出身者に「通訳」を頼んだりした。

南部の人は、一般的に北部や東部の人に比べてゆつくり話す。赴任した年に、学生たちが「先生はすごく早口でしゃべられるから、ノートがとれんぞなもし」、などと言うので、他の土地じゃこれが標準のスピードだと言ってやった。「もうちつとゆつくりならんもんかのう」、と言うので、速度をか

なりおとしたらよくわかると思う。でもね、こんなにのろくしゃべっていたら、カバーしたいこともカバーできないじゃないか。と、できない人を責めるのでなく、どうしたらよいかを考え、講義の内容をまとめたプリントを配ることにした。これで学生たちはノートが楽にとれるようになり一件落着。ドクターイトウの講義ノートは、学生たちが喜んで買ってくれて好評である。

南部はザ・バイブル・ベルトといつて宗教、つまりキリスト教のさかんなところである。私が教え始めた学期に学内に噂が流れた。私が共産主義者であるというものだった。私など資本主義のおとし子、マテリアル・ガールをやっているのに何故？ 授業でカール・マルクスの理論を教えた時に、宗教はアヘンだ、と、言ったのだが、それはマルちゃんと言ったことで私が言ったのではない。なのには、次の日には、ドクターイトウはアーカンソーにマルクス主義を教えに来た、キリスト教に反対するものである、なんて言うのよ。

開いた口がふさがらなかった。そして、主婦もお給料を払われるべきである、そういう講義をした後には、私はフェミニズムを提唱するレズビアンのお姐さん、とか、男パッシャーとか言われた。

こうして書いていると、ここに来ていろいろ起きたことが走馬灯のように蘇ってくる。確かに赴任した当時は慣れるまでいろいろ大変だったし、勝手もわからなかった。でもね、社会学を教えるという商売をして二十年、私はベテランなのだ。ここ数年はテレビカメラ二台を使い、オクラホマとの州境にあるウェストアーク大学にも私の講義が週三回放映、というか生放送されていて、ウエストアークの学生たちも単位が取れるようになった。昔は、いろいろな学会に出て難しいことが多かったが、最近では論文を批判したり、教授たちにアドバイスをしたりとか、自分なりに本当、石の上にも三年というか、同じことを努力していればいつかその道の達人になれるもんだと感心

してしまふ。学界誌に論文を発表するのも、ボツ率九〇パーセントという難関を突破して数本発表したし、ま、ボツを気にしては発表はできない。常に努力、努力の世界ではある。

私の仕事の一番の魅力は成長していく学生たちを見る楽しみだと思う。志を立てた以上、みんな頑張ってくれいと、私は応援している。四年かかって、五年かかって、六年かかって、よい。卒業という目的に向かって、自分の夢を叶えるために講義に出てくる学生たちを私は時には励まし、叱り、そしていつも深い愛情と理解をもって接している（つもり）。

教授も人気商売であるから、学生たちが楽しく、期待して来る講義をする必要がある。学生が喜ぶ授業、日本の大学の先生も考える必要がでてきたのではないだろうか。私の仕事には定年がない。これぞ終身雇用ではあるが、やめたい時がくるまで勤めあげようと思う。

パートに出て

横浜市都筑区

ゴル

あんなに嫌っていたパートに出た。パソコンのやりすぎでへまをし、家にいられなくなってしまうのだ。

チャットだけならよかったのだ。電話番号を知られた途端に「昼間は一人なんだろう?」とかかってくる電話がうっとうしい。きっぱり止めればいいものを、それもなんだかもったいない。なんとか不自然にならない理由で、家を空けなければならぬ。それには、働くのが一番だ。不純な動機である。

自宅と、子供の通う幼稚園と、仕事場はどれも歩いて五分とかからない距離にある。さらに、週四日、時間は九時から二時まで、子供の休みに合わせて休めること、という条件を満たす。

そんなわがままを言う主婦を雇ってくれる所なんてないわよ、と、主婦仲間からも笑われた。実際パートに出てからも、先輩のパートさんに「しょっちゅう休むのね」と嫌味を言われている。職業意識が低いというか、仕事というものをなめているというか。たとえ子供が熱を出そうが仕事を優先させるくらいの責任感があって、初めてプ口といえるのではないかと自分自身ずっと思っていた。今でも、思う。

だから、こんな働き方は、意に沿わない。やっついて自分でもふがいしない。主婦の暇つぶしだと言われて、反論できない。しかし、家にいるわけにもいかない。

仕事は、プラスチック製品の検査。職種さえ選ばなければ、求人結構あるものだ。見るべき製品は、小さなものは爪の先にはさまりそうなものから、大きなものは、豆腐一丁分くらい大きさまであり、傷や汚れがないか、百パーセント目視検査する。手先が器用で、手早く、正確なことが求められる。

かつて私は精密機器の営業職で、「どうしてこんな傷が見えないのよ」とか「なんで検査にこんなに時間がかかるのよ」とか、社内の品質管理部門の強者を相手に、けんかしたり、おどしたり、なだめたり、おだてたり、ということをしていたのだ。それが今では、尻をたたかれる側の、それも、パートだ。世の中巡り巡って、人にしたことは我が身に返ってくるものなのね、としみじみ感じている。

あのころは、はつきり言って、パートという働き方をバカにしていた。パートでしか働けない事情というものがあることも、今なら身をもって理解で

きる。遅きに失した感もあるが、私はしよせん、こういう人間だ。

単調な作業ゆえ、始めて一時間もしない内に、大して中身もない脳味噌の中がかゆくなってくる。頭では何を考えてもいいので、空想にひたれるのはうれしい。正社員のような責任もない。今時プラスチック製品なんて、環境運動に逆行するような気もするし、私が見ている程度の傷など、たとえあろうがなかろうが、製品の見栄えにも、むしろ性能にも何ら影響があるとは思えない。つまり、してもしなくてもいい

ようなことをしていること自体、気が楽な反面、やりがいのない。

が、いったん職場に行ってしまうと、これが結構、刺激的なのだ。仕事が目に見えて片づいていき、成果がうずたかく積み上がっていくところは、単純におもしろい。それよりも何よりも、いろんな人がいて、嫌味を言われてもそのやりとりさえが新鮮で、血湧き、肉躍ってしまうのだ。こんなことぐらいで、喜んでしまう自分は、今までよほどつまらない生活をしていたのだと、そのことのほうが、かえって哀れ

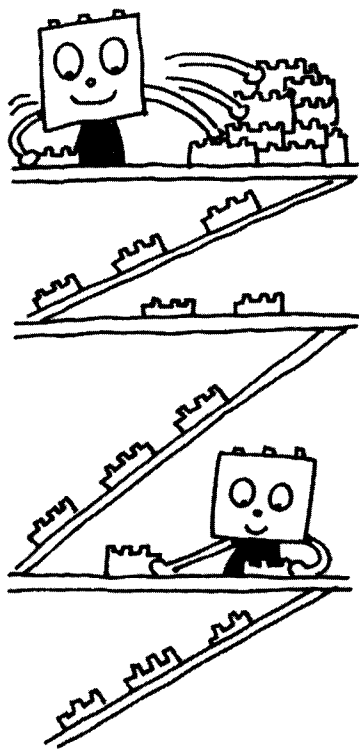
に思える。

今までの生活……。似たような稼ぎの亭主を持った、似たような家族構成の主婦との、似たような毎日。あげくのはてに、私ときたらネットのバーチャルな世界で、淋しさを紛らわしていた。

それがいきなり、世の中には、こんな奴もいたんだ！と小学校時代のごった煮状態を思い出させてくれるような、個性豊かな人たちが織りなす人間模様がここにはある。パソコンでチャットなんかしているより、よほどリアルで感情移入できる。

「家庭的な雰囲気」が売りの募集広告のとおり、ここは社長のつてで集まってきた人が多く、よく言えば引き抜き、悪く言えばどこにも引き取り手のないような、一癖も二癖もある面々がそろっている。

十二時五分前になると、卓上コンロでうどんを煮る人。一言も発することなく、パートのおばさんに混じって黙々と検査をする若い男性。バンガラ



デシユから出稼ぎに来ている不思議な人たち。雑多な人々の、よしない事情を抱えての吹きだまりになっている。

パートさん同士の遠慮のないやりとりもきついが、あからさまな分、陰湿さはない（と思える私も偉い）。お茶の入れ方がどうだ、エアコンの風向きがこうだと言ったぐいの話は、OL時代に一通り済ませてきた。もつとも何を言われてもあのころほどこたえないのは、私もおばさんになったということか。

「あんな亭主でも、ここに来るとましに見えるわ」と、私と一緒に働きだした、同じ幼稚園仲間のお母さんが言った。彼女がいるから、私も、パート同士のちくちくとしたやりとりを、それなりにやり過ぎせるのだ。感謝している。

今の仕事は、本当に楽。私にとつては、特に犠牲にするものもない。変なプライドさえ捨てればいいのだ。考えてみれば、仕事なんて、そんなに何かを犠牲にしてまでやるようなものなの

だろうか。そうまでして働くことが、偉いんだろうか。逆に言えば、何かを犠牲にしてまでやるほどの価値のある仕事か、そうそうあるのだろうか。何かを犠牲にすることで、大した価値もない仕事に、さも、価値があるような勘違いができるだけではないのか。

こんな仕事だって、仕事は仕事だ。私は少し居直っている。こんな働き方のどこが悪い。そういう条件で雇ってもらったんだ。みんなしたかつたらすればいいんだ。

妻を飾りものか何かのように家に置いておきたがる亭主も悪い。そうすることでは我が身の経済力を誇示するつもりか。

かつて、男に伍して働いたであろう、できる女達も、働きたがらない。プロの仕事の大変さが身にしみて分かってる彼女たちは、女が男のように己を滅して会社の歯車になりきれないことを知っている。あれだけの才能があったら、私なんかとつくに家を飛び出しているだろうに。

だいたい私のまわりには、働きたがっている専業主婦があまりいない。子育て真っ最中の人が多いせいもあるのだろうが、とりあえず現状に満足している、という感じを受ける。私から見ると、心からそう思えること自体が一つの才能だ。『幸せを感じる能力』はこういうことをいうのか、と思ったりもする。

週二十時間に満たないパートタイムーには、保障がない。

「時給七百円台で、一日四時間、週四日しか働かない、しかもしょっちゅう休むような働き方に甘んじている、そういうあんたのような女性が女性自身の地位を下げているのよ。女が女の足をひっぱっているんだわ。（だから正社員になれ）」と、がつんと言ってくる母。そんなことは百も承知だ。けれど、「とにかく外に出ること、それすらしなかつたら、何も始まらないのよ」と、開き直る娘。当初の動機はちやっかり棚の上だ。

社員と仕事内容が同じでも、単位時

間あたりの労賃も、格段に違う。やはりお金のための仕事と割り切って働くなら、正社員でなければ、自分の時間を差し出すだけの意味がない。少なくとも今のパートの待遇が改善されない限りは。

できる人が、出せる労力を、できるときに差し出す。同じ労働なら、労賃は正社員の単位時間あたりと同等とす

水泳指導員という仕事

埼玉県大宮市

新井純子

はじめに

転勤族の夫とともに、あちこちを動き回り、かつ自分に「これだ」というものがなかったので、私はその住んだ

る。こんなワークシェアリングの考えを支持する人は多いはず。ライフサイクルとともに働き方を柔軟に変えられることが理想だ。

今は、正社員として（別の職場で）働けるようになるまでの準備期間ということ、もう少しここで、人間観察をさせてもらおうという腹づもりなのだが、さて、どうなることやら。

土地、暮らし方でいろいろな仕事をした。短時間、サムタイムス、夫の扶養内で働こうと思ったわけではないが、結果としていつもそんな働き方しかできなかった。

反面、その働き方は自分の生活を充

実させるには、よい働き方でもあった。子どもたちの通う学校にも協力できたし、地域活動も余裕を持って参加した。何より自分のために「遊ぶ」時間を持つことができた。遊ぶにはエネルギーが必要だ。仕事だけが生き甲斐ということとはなかった。

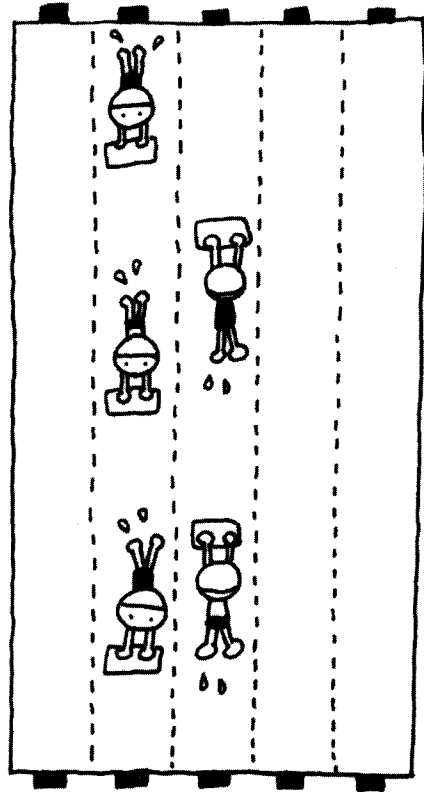
だからといって仕事で手を抜いていたわけではない。リフレッシュされた私には、集中力、やる気が満ちていて仕事に生かされていた。

賛否両論はあるだろうが、それが私の今までの働き方だった。

水泳指導員という仕事・給料

現在、私は一日二時間、週五日プールで子どもたちに水泳を教えている。時間給一三五〇円、プラス専任でクラスを持つと三五〇円の手当が付く。

当初、時給は千円だった。それが三年が過ぎた現在、ある一定時間毎に五十円ずつアップされ、合計三五〇円が昇給されている。さらに十時間のう



ち八時間を専任でクラスを持つているので、時給一七〇〇円がほとんどだ。

さて、時給はなかなか高額だが、残念なことに一日八時間の仕事はできないので、給料は高額にはならない。それでも、他のプールで指導員の経験を持つ人が、「この手当はいい」という。実際に他のプールの求人広告には一般のパートと何ら変わらない、つま

り特殊な状況（水の中にはいる）が考慮されていない金額が提示されていて驚く。

当時そのプールが出した求人広告には年齢三十五歳ぐらい、とあった。その時すでに三十九歳になっていた私だったが、「ぐらい」に勇気を持ち、ダメ元で、押し掛けていった。時給が いいこと。時間的に余裕があること

（バプアニューギニアから日本に戻って、まだ四か月ほどで、多くの雑用に振り回されていたから）。家から近い場所であったことなど、諸条件がそろっていた。

水泳指導員という仕事・体が資本

私は夕方、一時間のクラス（正味入水時間五十分弱）をふたつ、二時間を入水している。正規で働いている若いコーチたちも一日三時間程度の入水だ（もちろん状況により例外はよくある）。それだけ、水に浸かっているということが大変だ、ということだ。女性のコーチたちは若いし（ひとりりをのぞき二十歳から二十四歳、私が入った時はその年齢はさらに若い）、ある年齢になるとプールには入らず事務方に回ったり、辞めていく人もいる。肉体労働で、体の冷える過酷な仕事だ。

当初、私はプールに入ることを甘く見ていて、よく体調を崩していた。一か月に一度の割合で耳鼻科に通うほど

鼻詰まりに悩まされた。他に、お腹がばんばんに張ることがあった。ガスが溜まっているような感じ、あるいは生理痛、軽い陣痛のような鈍い痛み。おならをしたいような、でもガスは出てくるようなこともない。水温三十度以上はあるのだが、寒い。自分が泳いでいるのとは違って、特に冬場は辛かった。

働き続けるために、体を大切に気をつけることにした。時給も悪くない。時間的にも拘束時間が少ない。休みの融通も利く。世は不景気で、このバイトより魅力的なバイトは見つからない。

まず、入水前にサウナに入り十五分ほど体を温めるということをした。サウナは好きではなかったが、慣れるにしたがい苦痛でなくなった。軽く体操、マッサージもしてみた。代謝もよくなったようで、これはとてもよかった。仕事の後に体を温めることよりもずっと効果があるような気がする。その年は風邪を引くこともなく、鼻の調子も

嘘のようによくなくなった。お腹の張り、痛みも全く出ない。

体調が悪くて仕事を休むことがなくなった。他のコーチに迷惑をかけることも少なくなり、仕事に対して前向きに取り組めるようになった。

水泳指導員という仕事・人間関係はシンプル

人間関係の煩わしさは、どんな職場でもあることだが、この職場は少ない。なぜなら、時間内で仕事を終えれば、他の仕事仲間と話をする時間は皆無に等しいからだ。皆それぞれ、持ち場でコーチングをしている訳だから当たり前のことだ。いちいち感情的なことを言っている暇などない。

挨拶程度の言葉がけ、事務レベルの話で終わる。それを寂しい、と受け取る人がいるかも知れないが、考えなければならぬこと、煩わしいことが山のようにある暮らしには、ありがたい状況だ。

また、私自身職業人として慣れてきた、ということもある。自分の指導力不足を誰かれかまわず垂れ流すような話は、プロとして恥ずかしいし、何の解決にもならない。

信頼できる同僚に相談したり、指導の工夫をする。あるいはそれらのことも、今の自分の力と認めて、解決するようにしている。

「状況は変わる」ということも体験した。私は今まで二〜三年で住む場所が変わっていたので、どうしても自分が状況を変える、という方向でしか物事を捉えていなかった。当初、感じの悪いコーチがいて、「彼女苦手」と思っていたら、半年で辞めていなくなっ

た。仕事に就いてすぐには、指導などできない、させてもらえない。いつも専任コーチのヘルプをすることから始まった。昔の職人のように彼らから指導のやり方を盗んでいた。指導の研修時間を割いてもらっているわけでもないで、そんな方法しか学ぶチャンスは

なかった。

さらに、私自身が水泳のコーチングを受け、技術を向上させる、という方法もとっている。そうやって時間を積み重ね、指導にあたっている。

年齢は関係がない。水に何時間入り、何時間教えたか。その経験のみがキャリアに繋がっていく。後は私のコーチングの評判しかない。

水泳指導員という仕事・どんなことしているの

私は三歳児から小学校一年生ぐらいまでの水泳初心者、初歩の子どもたちのコーチを受け持っている。

水慣れに始まり、蹴伸びという、水にひとりで浮くまでのことを指導する。五十人ぐらいをひとり、あるいは補助のコーチが付いて、「水は楽しいよ」のレベルでつき合っている。

私は大学を卒業して三年ほど教職に就いた。しかし、私には教育ということが、ちっとも理解できていなかった。

子どもたちといることにプレッシャーを感じ、すぐに挫折をした。二度と人に何かを教える仕事はしない、と意を固めていた。

結婚して子どもを二人育ているときも、子どもはもうこりごりだ、と思った。子どもと関わりのない仕事をしようと考えていた。

不思議なことに、再び子どもがうじゃうじゃいるところで仕事をしている。二時間と時間が決められていること、子どもたちからいろんなことを教えられるのを、「おもしろい」と思えるようになったからかも知れない。

私の指導がなくても、何でもさっさとクリアしていく子ども。散々手を煩わせる子。性格もタイプもまちまちで関わっていて楽しい。そして、どの子も例外なく成長を遂げ、私の所から先へ進む。

自分の子育て中なら、いらいらしたであろうことも、落ち着いて待っていただける。おむつが取れない子がいないように、遅い、早いに違いはあるが、

子どもたちは泳げるようになる。大人のそれに比べたら激変だ。

だからどの親にも私は言える。

「大丈夫ですよ、もう少し待ってあげて下さい。辞めたらそこまでですよ。どんなふうに変わるか楽しみですよ」と。

彼らからエネルギーをもらっている。暮らしにリズムができる。肩こりが和らぐ。そんな副産物もあって嬉しい。

水泳指導員という仕事・同僚たち

正職員のコーチの他に、私のような子育てを体験した母親コーチ、学生アルバイトコーチと、年齢、性別、幅と広がりがあるかもしれない世界だ。中国からの留学生もいた時があって（彼女は水泳の国際選手だった）、国際色もある。

恋愛、就職、大学のゼミの話で盛り上がり、若者の声を聞いて元気に「今」を生きることが出来る。

彼らの水着姿は美しく、輝いている。「年だから」と言い訳せず、せいぜい体を甘やかさないように、と刺激を受けている。

最後に

ただの小遣い稼ぎのパートという考え方から、パート労働は立派な働く体系のひとつになった。パート労働で家の大黒柱をしている人たちもいる。ワークシェアリングなどという意識の変化も見えてきた。パートという働き方に保障をつけ、賃金をきちんと支払おう、という動きもある。

働く時間は短くても内容は同じ。働くことにも、家庭人、生活者としての責任を持つ。地域での活動、ボランティアに参加する。家族で、夫婦で、友人と、楽しむ時間を持ちたい。

それは、専業主婦、学生、リタイアした人だけの特権ではないはずだ。これからはどんな世代の人たちも、人間らしい、真の豊かさを求めた暮らしが

できれば、ステキな社会になるのではないかと思う。

「女の人生選び」 竹信三恵子著・「働き方を変えて、暮し方を変えよう」

大沢真知子、石井久子、永瀬伸子共著の二冊は、そんな社会が来ることを暗示しているようだ。

私のことをいえば、週十時間の労働は仕事をしなさ過ぎる?! また、体が資本の仕事（何でもそうだけど）は、

今後いつまで続けられるか解らない。

まだ仕事探して迷っているなどと言えば、あきられるかも知れないが、仕方がない。

人生半分が過ぎた。今年は自由な時間を集中させて、ある行動を起こすことに使うつもりだ。残りの人生を死ぬまで現役で働き、暮らしていけるような自分と社会にするために。

仕事と私

オクラホマ州タルサ市

サマース清美

朝四時過ぎに目覚ましが鳴る。のろのろと起き出し、コーヒーマーカースイッチを入れる。五時に出勤。まずプロセッサー（自動包埋装置）が夜の間正しく作動していたか、確認する。

私の職業はヒストロジック・テクニシャン（組織検査技師）。手術で摘出したリ、検査のために採取した組織から、顕微鏡標本を作るのが仕事。日本では臨床検査技師の仕事の一部にな

る。

私の職場は病院ではなく、小さな組織検査の会社である。

州東部の中小の病院やクリニックから集めて来た検体が夕方届く。病理医が、肉眼所見をテープに吹き込みながら、標本にする部分を切り出し、カセットと呼ぶ小さなプラスチックの直方体のかごに入れる。小さな皮膚や生検などは、その前にレンズペーパーに包んだり、ナイロンメッシュの袋に入れる。

カセットをステンレスのかごに入れ、プロセッサーにかける。プロセッサーの中で組織は、ホルマリンで固定、アルコールで脱水、キシレンで透徹、パラフィンで浸透される。

それからが私達の仕事になる。

取り出したカセットを番号順に並べノートに記入し、包埋という作業に入る。

型に少しパラフィンを入れ、カセットから取り出した組織を切る面を下にして置く。

例えば皮膚なら、表皮から真皮の層が切った時に出るように置く。パラフィンを満たし、カセットの番号を書いた部分を上にしっかりと乗せ、冷やし固める。

型から取り出した物をパラフィンブロックと呼ぶ。こうするのは、組織に適当な固さを与え、光学顕微鏡で見られるような薄さに切るためだ。

六時半にもう一人が来て薄切を使い、ミクロトームという機械を使い、三〜四ミクロンの厚さに切るのだ。私も包埋を終えるか、他の人に任せて切り始める。

日本ではナイフを手前に引いて来る滑走型、アメリカではナイフを固定し、ハンドルを回すとブロックが上下して切れる回転型のミクロトームが主に使われている。

組織によって切りやすさが違う。子宮は全体が筋肉で、ブロックにすると固く切りにくい。なるべく筋繊維の方向に切るように、包埋する時に気をつけて置く。

ある時娘達へのEメールの中に「今日は腎臓があった。腎臓は大きくてもきれいな切片がとれるから好き」と書いたなら、「ママが腎臓を好きなんて知らなかった。急にそんなことを書くから大笑いした」という返事があった。

とれた切片をお湯に浮かべしわを伸ばし、スライドガラスに乗せる。乾燥させ、一般染色をし、カバーガラスをかけると出来上がり。

染色具合を顕微鏡でチェックして、八時半ごろには最初のスライドホルダーが病理医に届けられる。

一般染色は、ヘマトキシリンで核を青く、エオジンで細胞質をピンクに染めるもので、ほとんどはこれで診断が下される。

でも毎日いくつかは、もっと深く切つてとか、特別染色の注文が来る。

特別染色は、微生物を染めたり、各種の結合組織を染めたり、ある物質を染めたりと、多種多様だが、度々注文があるのは十種類くらいだろうか。

今では一般染色もカバーガラスをか

けるのも、機械がやっている。

私は古い人間なので、これがあまり好きでない。カバーをしながら職人のように、自分の仕事（薄切、染色）を確認する、楽しみのようなものがない。なくなってしまった。

少し前になるが二八一号に、ホクロを切除し組織検査に出すはずが、なく

なって大騒ぎしたという話が出ていた。見つかって一件落着くのだが、実はまだまだ安心できないのだ。

二ミリぐらいの小さな組織でも、包まずにそのままカセットに入れるドクターがいる。

フタにでもはりついていたのか、開けた拍子に飛び出すことがある。

近くに着地すればいいが、床に飛んだりすれば、這うようにして探すことになる。

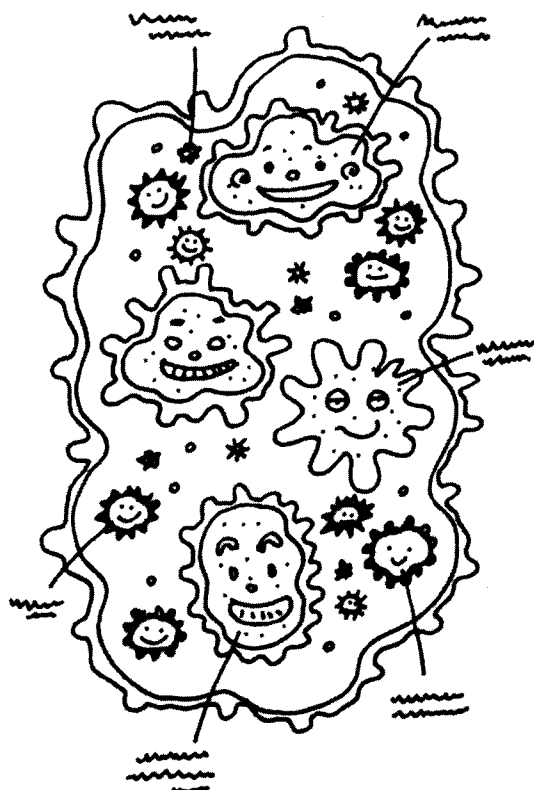
数年前、腎生検のスライドが届いてないという連絡が病理医からあり、カセットの紛失に気付いた。切り出し室の流しからゴミ箱の中までみんなで探したが見つからなかった。

翌々日になって、探し続けていたドクターが、なんと鉛筆立ての中から見つけ出した。

「私のせいだ！」と頭の中が真っ白になった。当時はカセットが百コ入る長方形のかごを、トレーの上にパツと引っくり返して出していた。きつとはじにあった一つが飛んで、前にあった鉛筆立ての中に落ちたのだ。

私は不注意を謝ったが、執念で見つけたドクターは、上機嫌で笑って済ませてくれた。

「検体はただの物ではない。患者さんの存在を忘れないように」と言った学生の時の先生の言葉を、折りにつけ思い出す。



一九七一年、県立衛生短期大学衛生技術科を出て、臨床検査技師になった。病院の検査科は、病理組織、血液、生化学、血清、細菌、生理などに分かれている。

配属されたのが、病理組織だった。

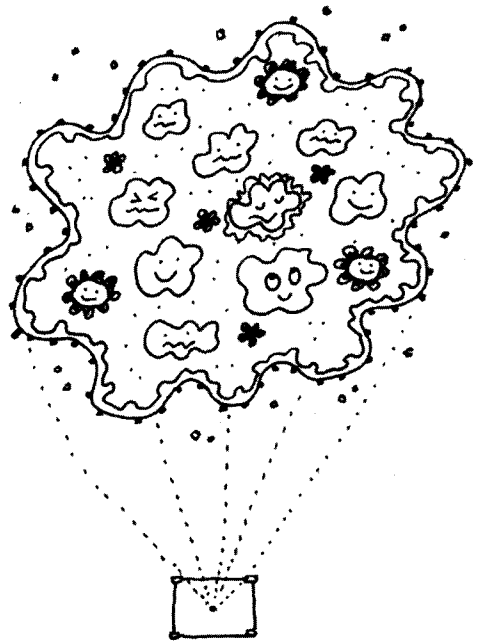
ミクロトームが使えないことには仕事にならないので、はじめは毎日解剖例のブロックを切らされた。

定年まで働くつもりで市立病院に就職し、公務員になったのだが、留学生だった夫と結婚し、夫の卒業と共に退職して、アメリカに渡った。翌年（七五年）、夫はキャンザス大学の大学院に進学した。

私は英語の集中講座を受けてみようと思っていたのだが、たまたま病院のヒストロジで人を募集していたので、思い切って応募し採用された。朝五時半からの勤務だった。

アメリカには国家試験はなく、臨床病理学会（ASCP）などが、資格を出していた。

検査の種類により資格も色々あり、



大学を出ている人が多かった。

ところがヒストロジック・テクニシャンは、高卒後、病院などで一年以上のトレーニングを受けるだけで受験できた。

知識よりも手先の仕事というわけだろうか？ 化学の知識の乏しい人がいたりして、やはりある程度の専門教育は必要だと思った。

とにかく私も、この資格試験を受けてみることにした。

まず実技試験があった。指定されたブロックとスライドを作り送るのだ。

課題の一つに、長径九ミリ以上のリンパ腺があった。ドクターが切り出した後の組織から探すのだから、あまり大きなのは残っていない。乳癌の手術などがあると、残った組織を裏返しに置き、ゴム手袋をした両手の指でブヨブヨの脂肪の中から指に触れるものを探した。

あれ以来、豊かな胸の人を見ると、

黄色い脂肪が目にはチラついてしまう。

筆記試験にはキャンザス・シテイまで行った。五者択一問題で、時間は三時間あった。

日本語なら時間を持て余したところだが、英語となると話は違う。一つでも分からない単語があると何度も読み返し、問題の意味を正しく読み取ろうとした。

一通りやり終えるのに二時間半かかった。合格してうれしかったのは、昇給したことだ。

このローレンスメモリアル病院で二年近く働き、夫の修士課程終了後、日本に戻った。

元の職場の人の紹介で、歯科大学で歯と顎骨の標本を作る仕事を手伝った後、新しく出来た保健センターでアルバイトを始めた。

ここでは、心電図や血液検査をした。学校の後輩もいて楽しかったが、妊娠のため、二年半ほどで退職した。

八十年、結婚七年目に生まれた双子の娘達は、とてもとても可愛いくて、

今は楽しかったことばかり思い出すが、子育てに追われていた当時は、「外に出たい、仕事がしたい」と思っていた。

子供が二年生になった時、近くの病院で週三日のアルバイトを始めた。仕事内容は補助的なことばかりで、正職員とは大きな違いがあった。

それから一年ぐらいて、学生時代の友だちから電話があり、医学部皮膚科の研究室の仕事を手伝つてと言う。ミクロチームが使える人が必要だとのこと、こっちは十五年も使っていないと断ると、「大丈夫、忘れてないから」と言う。

結局、週一回電車を三つ乗り継いで、行くことになった。この仕事のほうが、もう一つのほうよりずっと面白かった。

九一年、子供が四年生を終えた後、色々な事情と子供の将来を考え、アメリカに帰って来た。

夫によい仕事が見つかればどこにでも引っ越すつもりで、とりあえず夫の

母の住むこの町へ来た。当てにしていた会社は解雇者を出し始めた状態だったので、ここに落ち着いて二人で仕事を探すことになった。

一度応募した大きな病院では、量が多い検査室での経験がないという理由で採用されなかった。他の仕事も少ししたが、九三年になって、たった三行半の小さな求人広告を見て応募し採用されたのが、今の職場だ。

オーナーだった病理医が一年半前に引退し、今は少し大きな会社の傘下に入っている。

八年近くの間には、嫌なことも色々あったし、朝の早いのに未だに慣れず、いつでも疲れている感じが、それでもやっぱり、仕事があつてよかったと思う。

娘達は高校を超優秀な成績で卒業し、州外の大学へそれぞれ羽ばたいて行ってしまった。

もし仕事が無かったら、彼女達を送り出すのは、もつとむずかしかったと思う。経済的にも、精神的にも。

バレエ教師

横浜市磯子区

十文字圭子

(38歳)

何だか気恥ずかしい。でも、そう書けることが実は少し晴れがましく、そして嬉しい。

バレエとの出会いやこれまでのいきさつは、「わいふ」にもたびたび書かせて頂いたが、ここで簡単に振り返ってみた。

始めたのは三歳ごろだったらしい。学校の体育館のような所での発表会の写真が、唯一の記憶だ。東京の調布市に転居して、団地の中の集会所でやっていた「こまどり舞踊会」でモダン・バレエを続けて習った。レオタードに裸足、体操のようなアクロバットのな振りや浴衣を着て舞台の最後を締めくくっていたりしたので、いわゆるク

ラシツクのそれとは違っていたと思う。

しかし、私が常に憶れていたのは「トウ・シユーズ」を履いて白いチュチュを着た「バレリーナ」だった。三年生で再び転居したのを期に、今度は自分の意志で「クラシツク・バレエ」を習いたいと、親にねだった。

幸運なことに私が初めて本格的に付いた先生は、今では名古屋で大きなバレエ団を自ら率いている実力派だった。夫婦で東京にも進出しようと拠点作りの最中で、生徒は少なかったが有り余る熱意があった。

週に二度、バスで二十分の距離を熱心に通った。帰りは母が迎えに来てくれたが、憧れのバレリーナの側にいる

ことが嬉しくて、なかなか帰らなかったように思う。レッスンは厳しかったが、そのころ放映されていたバレエ版スポ根もの、「赤い靴」(モイラ・シアラー主演の映画とは違う。それを見たのはずっと後だった)の影響もあって、辛いとも思わなかった。

それが四年生の一学期に今で言う「いじめ」に会い、解決した後は両親の心配もあって私立中学のお受験競争に一気に傾斜してゆき、バレエもピアノもそのために止めざるを得ない状況になってしまった。

ピアノはこれ幸いだったが、バレエは本心、止めたくはなかった。しかし当時の優等生は、「子どもは勉強が本分」という断固たる親の態度に、反抗する術を持っていなかった。失敗し、高校までも翻弄された受験の嵐の中で、中三の卒業前、学校に行けなくなった。その時に、担任でもない体育担当の女教師に呼ばれて、

「あなたは高校に行つて、何がやりたいの? 今、一番やりたいことは何?」

そう問われたときに、目から鱗が落ちるような思いと共にわき上がった。たのが、「バレエ」という言葉だった。

それからまだ大学受験で一たん中止するが、これから先の学校に入るために勉強しなくてもいいんだ、と思った私は、それこそずっと以前に他の人が部活に熱中するような勢いで、バレエにのめり込んだ。

もちろん、女の子の体が大きく変化する時期に何もなかった訳だから、自分でもプロになれるとも、なろうとも思っていなかった。ただ好きで、レッスンすることが好きで、稽古場で音楽を聞いているだけで幸せで、そしてたまの舞台のライトは天にも登るような夢心地にさせてくれた。

ようやく大学に入った途端に、今まで机にかじり付いていた娘が、アルバイトに精を出し、世の女子大生が世間を賑わしていた派手なファッションや、そのころ流行りだしていた「合コン」には見向きもせず、稽古と公演に明け暮れるのを見て、両親は半ば呆

れていたと思う。

それは会社に入ってからも続いた。確かに入学当初は高校の教師（国語の）を目指していたのだが、時間的にバレエを続けることが難しいと分かると、



自分でも驚くほどあっさりと諦められた。勿論、バブルの少し前で四大卒の就職は決して楽ではなく、最後は何処でもいいか、という安易な考えに流されたということもあるが。

バレエとの蜜月が十年余り続いた二十八歳で結婚した。気がついてみると、共に汗を流した仲間も一人止め、二人止め、私が最年長になっていた。ちょうど、通っていた教室の十周年記念で「くるみ割り人形」の全幕に出演し、ここで一区切りついた気持ちだった。

結婚し、ここ横浜に移った後も、稽古は続けていた。でもそれは今までのようなある種の緊張感があるものではなく、肩の力が抜けてそれはそれで楽しく、いつまで経ってもバレエは私を魅了し続けることに、お世話になった先生の言葉が思い出された。「バレエに一人魅入られると、なかなか足抜け出来ないのよね」

一年半後、娘が生まれ、初めての育児にあたふたイライラし、ノイローゼにもなりかねないような状況を救ってくれたのも、バレエだった。週に一回、夫に子どもを預けての二時間のレッスンは、本当によい気分転換だった。

三年後、息子が生まれ、上の子が幼稚園に上がると、まだ歩けないうちか

ら一時預かりの保育園にお願いし、レッスンを続けた。

そして一昨年、下のが幼稚園に上がると、待ってましたとばかりに、添削のアルバイト代で稽古を週二回に増やした。時間があれば、オープンのクラスにも出掛けたりして、この数年、頑張った自分へのご褒美(?) と思ひ、楽しんでいた。その時、一人の仲間が声を掛けてくれたのだ。

通っていたスタジオは、昼間のクラスなので、基本的に一般の主婦がほとんどなのだが、そこは元プロのダンサーや教室を自分で持っている人が数人居た。同じように、結婚し家庭を持ちながらも、子どもから少し手が離れると、やはりむずむずと虫が騒ぎだす。そんな人達の集まりだった。

彼女はやはりバレエ団でしばらく踊っていたが、プロの厳しさに直面しダンサーではなく、教師になろうと早くから思っていたという。

若くして結婚し、子どもがまだ小さいころから、ごく少人数の小さな教室

から始め、今では八十名を越す生徒を抱えていた。年齢、実力別にいくつかのクラスを全部、自分で教えるにはそろそろ限界に近く、手伝ってくれないか、というお誘いを受けたのだ。

漠然とはあるが、教えてみたいとは思っていた。ただ、実力のなさは自分でよく分かっていたので、自ら言い出す勇気もなく、このまま自分のレッスンを続け、バレエと関わっていければそれで満足だとも思っていたのである。

バレエの教師には特別な免許はない。ロシアやヨーロッパではいざ知らず、日本においては国立のバレエ団も存在しない。先頃新国立劇場が出来たのを期に、一応、それらしき恰好にはなっているが、実際のところ、ほとんどはオーディションで採用され、一部のソリストを除き、保証もない。勿論、給与なども一定しておらず、公演のチケットを個人で負担しなくてもよい、という程度の優遇しかない。

聞くとところによると、一公演につい

て、シューズが一足とタイツが一本支給されるといってお粗末さである。確かに、日々のレッスンは無料で受けられ、わずかばかりのお金も頂けるらしいが、それで生活が出来るほどではなく、その上、公演期間は拘束されて自由な活動は出来ない。フリーで活躍したい人以外は、大抵、どこかのスタジオ、またはバレエ団の所属であるのだ。

国立バレエ学校をという声もあるようだが、それにしても私立のバレエ団、スタジオが多過ぎて、日本にこのスタイルが根づいてから時間が経ち過ぎた現状を考えると、難しいらしい。

話が横道にそれたが、要は、誰でも教師にはなれるのだ。経験と熱意があれば。

踊ることは出来ても、教えるということとはまた別の問題だ。特に、小さな子どもにバレエを教えるというのは、簡単なように見えて、なかなか難しい。普通の人間からはかけ離れた不自然なまでの姿勢が、ごく自然に出来るように、長い時間をかけて訓練していく。

とても地道な作業をしつつ、その上に踊る楽しさを伝えていかななくてはならない。

幼い子ども達、しかも十数人を一度に相手にし、引っ張っていく力が私にあるだろうか。それだけの技量があるだろうか。自分で自分に問いかけて、さすがに初日の前日は、よく眠れなかったことを覚えている。

「名監督が必ずしも名選手だったとは限らない」。その言葉を呪文のように唱え、自分をふるい立たせて頑張った。そして約十か月。上ずっていた声も落ち着き、生徒たちとの関係もスムーズになった。稽古の内容も臨機応変に対応する、少しの余裕は出来た。

最初はあまりいい顔をしなかった夫も、土曜の午後に私がいきいきした顔で出掛けていくのを、何とか許してくれたようだ。さらに年明けから六月の発表会の準備に入り、通勤は週に二回に増えた。なるべく、まだ小二と年中の子ども達に寂しい思いをさせないようにするために苦労しているが、正直

に「お母さんはこのお仕事がとても好きで、どうしても続けたい」ということを繰り返して伝え、分かってもらうように努めている。

かつて一度は目指した「教師」に、しかも愛して止まない「バレエ」をもつてなれた。誘ってくれた友人に感謝し、さらにまだまだお小遣い程度の収入にも我慢して、認めてくれつつある夫と、幼い子ども達にもありがとうの

気持ちで一杯だ。

職業と呼ぶには余りに少ない週に数時間だが、今の状況を考えるとちょうどいい。それでも自分の稽古には一層、熱が入るものだ。日々の努力を続け、かつてお世話になった多くの先生方と同じ熱意で、真摯な態度と地道な訓練の大切さ、それでこそそのバレエの素晴らしさを、多くの子ども達に伝えたいと思っている。

記憶の片隅に

新潟県長岡市

大原みかん (42歳)

「息子にピアノを教えたいのだけどお宅の子も一緒にどう?」

十二年前。私はそう言って、友達を誘った。「金曜日の七時から教えてあげる。下の息子たちはドラえもんを見

てるから」

という安易なきっかけで家庭教師業が始まり、現在ピアノ生徒十六人(うち大人二人)。家庭教師の生徒二人。仕事時間は夕方から九時まで。ただし、

中学の定期テストの前はこれにあらず。月謝、ピアノは三年生以下月二〇〇〇円。四年生以上月三〇〇〇円。家庭教師は一教科一時間月三〇〇〇円。英語と数学のみ。

元小学校教師。ピアノ講師の免許もなく、家庭第一。こんなになんていいのかな、いつも後ろめたく思っているながらも、ずっと、どちらも「お金をいただいているのだから」と気負ってきた。初めの頃は気負いすぎていたかもしれない。

ある日、三年生の女の子がうちに来た。四年間、ヤ〇〇音楽教室で習ってきたけれど、どうしても先生が好きになれない、とのこと。どれくらい弾けるかなと初めてのレッスン。ただびっくりした。音符はまったく読めず、片手ずつでは弾けるが、両手になるとまったく動かない。いつからかその子は自分が書いた四コマ漫画を持ってうちにくるのが日課になった。レッスンよりも漫画の話をする時間のほうが長くなった。ピアノはあまり進歩せず、六

年生でやめた。中学校で吹奏楽部に入り、トロンボーンを吹いていると聞いたとき何故かすごく嬉しかった。

「うちに来ていても弾けない子は弾けないよ」とカ〇〇音楽教室講師の知り合いがさりとて言った。その日からだろうか。肩の力が抜け、勉強もピアノも一人ずつにあわせて目標を決めた。教則本もいろいろにした。

私の仕事はピアノが弾けるようにするだけじゃない。音楽の世界への第一歩になり、それが生きていく上でささやかな支えになれば、それでいい、そう思うようになった。

レッスンだけでそれなりに弾ける子もいる。別に音大に進むわけじゃないからそれで十分と親も子も満足ならば、それ以上を求めない。それよりもいろいろな曲と出会わせてあげたいと思う。

「今の子供は手ぶらでレッスンに来る」と有名な先生は怒っていたが、何をしにきているのかなあ、と思うこと日常茶飯事。でも、特に男の子は、自

分が弾くと決めたら見違えるように練習してカッコよく弾く。ゲームやアニメ、お気に入りのバンドの曲が大好きだ。何度感動させられたか。「こんなに弾けるのだから、普段も練習したら、すっごく上手になるのになあ」と何人に言ったことか。

ピアノは年に一度、参加費一〇〇〇円で普段着発表会をしている。ただ単純にお母さんたちに練習している曲を聞いてもらいたい。親子でいろいろな音楽に触れて欲しい。という私の夢から始まったこと。初めは我が家でやっていたのだが、「グランドピアノを弾かせてやりたい」と私の夢が拡大し、公的施設を借り、今年で十二回目。チエロやバイオリン、三味線演奏を知り合いに頼んだこともあった。今では自分が弾きたいものを弾く絶好のチャンスと位置づけているのだが……。

「そんなくだらないこと出なくていい。ってお母さんが言ってた」。その二年生の女の子は出たくてたまらなかつた。発表会が近づいても練習しよう

としない娘を見ていられず、やめさせた親もいた。全ての人と分かり合えるわけがないのである。

半年以上月謝を払わず、親の詫び一言なく来なくなった子もいた。掘ったばかりの筈をいただいたがあれが月謝の代わりだったのだろうかと今でも謎である。道で出会うと顔を背けられるが、この仕事で唯一しこりの残る出来事である。何か私のやり方が気に入らなかったのだろう。このしこりが手術で取れることは……まずないだろう。

家庭教師は、数人を一緒にみていたこともあったが、やはり一人ずつでないといとことんできないし、子供たちの本音が出ない。

受験勉強にはテクニクが必要だが、それだけ教えても、できる子とできない子がいる。最近、やっと私の目指す「わからないことがわかるようになる」ようにできる時間の余裕が出てきた。

実は、「自分でやる」と言い続けた息子は中三の夏休みから急に大手塾に

通いだした。私もいろいろ勉強になった。結局は親子の選択なのである。だから途中で代わりたそうな子がいたら、親に勧めることもある。

「うちは出世払いだから、よろしくね」

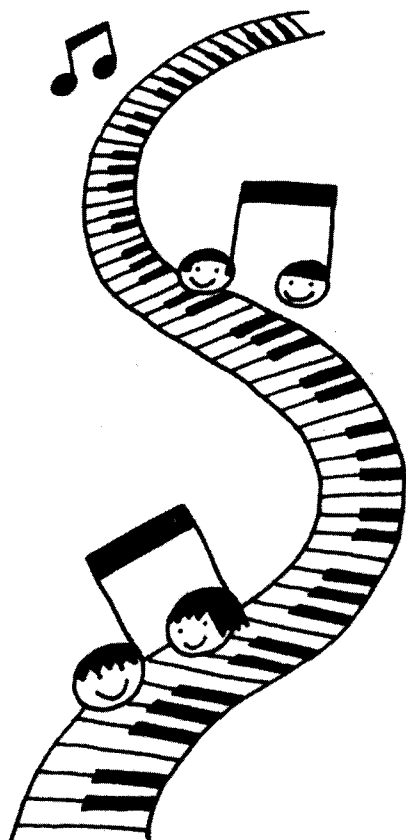
なんて冗談を言っているが、私の力なんて微々たるもの。ピアノも勉強も最後はその子がどれだけ自分でやるにかかっている。弾きたい、わかりたい、という気持ちさえあれば、精一杯応援してやりたいと思っている。

「母さん、教える子がいなくなったらどうするの」と高一の長男が心配してくれる。

看板も出していないし、いなくなれば消えるだけ。雨の日も、雪の日も通い続けてくれるみんなの記憶の片隅に残れたら、私はそれで大満足。

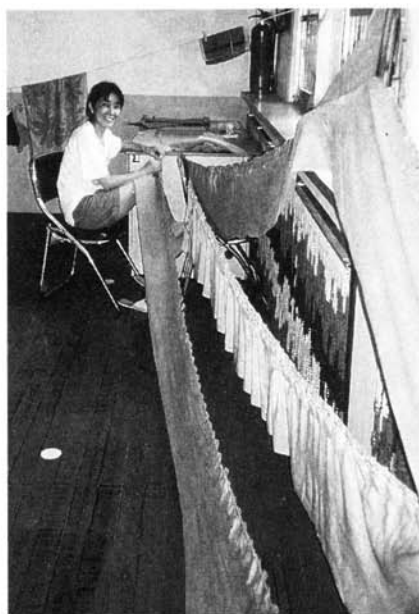
さあ、今日はどんな元気の素がやってくるだろう。

(え・小沢恵子)



カーチの 鳴く村で

東京都新宿区 城下るり子



カーチはからすの一種かと思ってい
たら、どうやらかささぎのことらしい。
白と黒の姿はなかなか優美だが、鳴き
声はお世辞にも優美とは言い難い。カ
ーチという名前は、その鳴き声から来
ているとも聞く。韓国の山間部の村々
では、ごく普通に見られる鳥だ。

村までの道

八月一日、私はカーチの鳴く村に向
かった。国際的規模の野外美術展に参
加するために。

飛行機の都合で、キンポ空港到着は

夜の九時半、無事にゲートを出たのが
十時十分。大きなスーツケースとバッ
クサック、さらにハンドバッグという
重装備だった。早速友人の韓国人アー
ティスト李さんに電話する。
「今空港を出たところ」 勿論日本語
で。

李さんは日本に留学していたことが
ある。小柄で童顔、ジーパン姿で若く
見えるが、四十代後半の大学教授。
「ソウル駅に着いたらまた電話して。
元気でね」

電話を借りたので、そのカウンター

幹旋のタクシーに乗る。猛スピードで
夜の高速道路を走り、片言の日本語と
たどたどしい英語で話しかけてくる。
ソウル駅まで。テジョンに行くの。切
符？ 持っていないわ。切符売り場？
知らない。親切な運転手さん、わざわ
ざ車を止め、私の重たいスーツケース
を持って、案内してくれた。

しばらく列に並び、いざ私の番にな
ると、ないと言われてしまう。ほんと
に全然ないの？ 一枚もないの？ 押
し問答をしたが全く取り合ってくれ
ず、すごすごと窓口を去る。

どうしよう。ともかく電話だ。小銭を作らなきゃ。売店でポッキーに似たものを買う。お釣りを握りしめ、公衆電話に向かう。コインが入らない。百ウォンしか使えないのに、私が握りしめていたのは、五百ウォン玉だった。近くの人に両替をしてもらう。ありがたい。それくらい韓語は覚えていたはずなのに……。

「どうしよう」李さんに助けを求め。李さんのんびりと答えて曰く。「ないことないよ。その辺のおばさんと代わって」その辺のおばさんと李さんとの、私の知らない言語の会話。「そのおばさんに頼んだから」おばさんは身ぶりと共に私を引っ張る。連れて行かれたのは、さっきとは別の窓口で、料金はとても安かった。

おばさんは何か不思議な表情で、「スコシイソイデスコシイソイデ」と言った。不安になった私はやみくもに急いだ。と、突然、おばさんが袖を引っ張って、ちがうちがうという身ぶり。私を駅のベンチに座らせ、深呼吸しな

さいと言う。スコシイソイデの必要がなくなっちゃったのだ。十一時発のセマウル（新幹線のようなもの）は発車してしまった。十一時半まで待つことになる。

ベンチの隣りにいたおじさんが、話しかけてくる。我がスポークスマンのおばさんまたまた活躍。おじさんは、同じ列車で終点のプサンまで行く。おばさんは安心して去って行く。ありがたい、おばさん。韓国人は本当に親切だ。おじさんは何度も私に、自分が連れて行くから大丈夫と、身ぶりで言った。

おじさんはなんと家族連れで、大きな三人の娘と奥さんが、口々に私に質問する。今度はおじさんがスポークスマン。おじさんは私を案内してから、自分の車両に戻って行った。

昼の間はビュツフエになっているらしい車両に、幅の狭いベンチがある。機敏なおじさんのお陰で、座ることができた。床に座る人、壁に凭れる人、みるみる車内はいっぱいになった。

テジョンはソウルから二時間ほど行った地方都市。うつらうつらしている。次はテジョンですというアナウンス。一時四十三分になっていた。

スーツケースを持ってくれた男の人にお礼を言って、改札を出る。李さんを見つけた時は、本当にうれしかった。「大変だった?」「うーん。でも座って来たから」李さんは私を見てにやにやしている。「電話でおばさんが、るり子さんのこと、お嬢さんって言ってたよ。」「……」ジーンズに麦わら帽子、バックサックを背負っている姿は、スポーツ年齢通りには見えないかも。

私達の最終目的地はコンジユウ（公州）。百済の古い都だ。百済王朝が扶余（プヨ）に都を移すまでの六十四年間、都として栄えた。

コンジユウへひた走る車の中で、またまた驚くべき新事実を聞かされる。とても素晴らしい宿泊施設ヤトウ・セクターがアーティスト達を待っている、という謳い文句だったのに、村人との行き違いで使えなくなってしまう

たのだそう。

「ヤトウ・センターはその名の通り、ヤトウのメンバーと村人が協力して作った建物だから、使えないのはとても残念なことです」「……」「今まであちこちしたけど、やっと決まりました」早くに到着した人達は、ジブシーのように彷徨っていたらしい。漸く落ち着き先に決まった地元の小学校は、李さん自身も行ったことがなく、ぐるぐる深夜のドライブを重ねて、遂に到着。三時半を回っていた。

再会

小学校の二階にある教室が寝室。廊下は木の床で、歩く度きしきしきしむ。あそこに寝なさいと指差された先には何もなく、薄闇の中、空いている白いスペースを見つけて身を横たえる。

次の朝。いきなり隣りに寝ていた大きな金髪碧眼の美女に怒鳴られる。「ノウ。そこはミセス・コウのベッドだ」びっくり仰天。

「でも私ここで寝たのよ。すごく遅



くからだけ」と、なまじ私が反論したのだから、状況はややくしくなった。「でも昨夜は居なかった。私が寝た時は居なかった」「だからとても遅くに、夜中の三時半か四時にここに着いたの」「それならあなたは昨夜と言わなきゃ。今夜と言わなきゃ」「でももうここで寝たの。ほんの二時間ほどだけ」「それじゃあミセス・コウは？ 彼女はどしたの？」「知らない。事務局の人がここで寝なさいと言ったから」「ともかくここはミセス・コウのベッドで、あなたのじゃない」それだけ乱暴に言うのと、大女は再びシーツを被って眠ってしまった。

後でわかったことだが、そこは本当にミセス・コウのベッドで、その夜たまたま彼女は自分の家に帰っていて居なかった。そして恐ろしい剣幕で話したのはグニツラといって、旧知の仲だった。四年前と二年前、スウェーデンで会っている。

ごめんねあの時どなったりして。気付かなかったわ、全然。私もるり子だ

と思わなかった、寝ぼけてたし。笑っておしまい。

グニツラは真つ直ぐなよい人なのだ。いつでも皆が言い淀んでいる言いにくいことを、すばつと言ってくれる。廊下でドイツから来たバーベルと感動の再会。

「るり子のためにベッドをとっておいたのよ」今度こそ私のベッド。同室者は、アンケ（ドイツ）、アガサ（シンガポール）、ジニー（オーストラリア）、京子さんと私達。隣りのグニツラの部屋には、トゥルデイ（イギリス）、ミセス・コウ（韓国）。

生活

八月二日。寝不足の私にハードな一日が始まる。まずトイレ。ここは田舎で、完全などっすん便所だった。蠅がブンブンしていて、自分の身の回りから蠅を追い払いつつ、事を済ます。びろうな話で恐縮だが、私はすっかり便秘になってしまった。これは私一人の悩みではなく、ほとんどのアーティス

トが程度の差こそあれ、経験したようだ。

朝ご飯は自分で勝手に食べる。パンをトーストして、ベーコン、チーズ、卵焼きなどをのせ、インスタントコーヒ、紅茶、韓国茶でいただく。疲れていた私は、ジャムで食べる。さて歯みがきしようとして、驚いた。水道が何か所しかない。「それでも改善されたのだ、シャワールームが二つになったから」と言われて、エッ、そうなの？と驚いていると、もっと驚いたことには……。

皆がシャワールームと呼んでいるものは、校庭にある水飲み場を利用して作ったもので、何と水しか出ない。いくら夏だからといって、水のシャワーはきつい。山の水はとても冷たくて、シャワールームからはいつも小さな悲鳴が聞こえる。私自身、全身を完全にシャワーに委ねられるようになるまで、三日かかった。初日は両手両足、次の日シャンプーをして、三日目汗だくの自分に我慢出来ず、遂に全身水を

浴びた。やはり小さくキャツと叫んだ気がする。そしてちよつとだけ誇らしくもあった。

何日か後のシャワールーム。台風の日。天井部分のブルーシートから雨が降り込んでくる。雨水のほうにシャワーの水より暖かいと、京子さんが言った。本当だった。そうこうするうち、私達はシャワールームの前に行列して順番を待つようになった。人間には適応力がある。慣れると、結構いろんなことが普通に出来るようになる。

食事

朝食後、何台かの車に分乗して、展覧会場の下見に出かける。サンスパークといって、古城の城壁内が公園になっている。城そのものはない。レンガ敷きの道を登って山頂に至る。道の両側に大きな木立ちが鬱蒼と続き、街灯のたたずまいもなかなか渋い。ふむふむよしよし。ロケーションばかりじゃない！ 心の中でにんまりする。それにしても暑い。

インスタレーション作家にとつて、設置場所はとても大事だ。よい場所を確保出来れば、作品は半分成功したようなものだ。日本国内であれば、私は必ず下見に行く。しかし今回は海外でしかも初めての場所なので、安全を取った。

木から木へ、布を張り渡す。この計画なら木さえ生えていれば大丈夫。場所を選び、地図に名前を記入して、午前中の仕事は終わり。坂道を下って、公園の近くにあるレストランに向かう。

レストランアリアンは、私達の生命線だ。ここで昼食と夕食を取る。バイキングスタイルで、バラエティに富んでいる。スープ、味噌汁に始まり、サラダ、煮物、焼き物、揚げ物、のり巻、白飯、お赤飯、スイカ、デザート、ソフトクリーム、と一応揃っている。

国際的な野外展の条件は大体似たり寄ったりで、宿泊・食事付、材料費の補助、ただし交通費自弁というのが多い。希に航空運賃まで持ってくれるこ

ともあるが、韓国は近いし、この食事はよいほうだ。と、初日に判断したのだが……。

午後は学校に帰る車に便乗して、昼寝をする。こんこんと眠って夕方。再び車で移動。再びアリアンでの食事。メニューはほとんど変わっていない。私には美味しく思えるのだが、早くから来ているアーティスト達は一樣に、アリアンティストには飽きたと言っている。私に先立つこと一週間、キムチティストに付き合っていたわけだから。

ヨーロッパ勢は胃腸をやられた者も多かった。『ご飯つぶが胃に突き刺さる』と、アガサは嘆いていた。彼女はご飯を食べないようにして、なんとか乗り切った。ご飯といえば、ある時、丸いコロッケを食べて驚いた。中身は昨日ののり巻きだった。

アガサ以上に胃腸をやられてしまったのは、ドイツ人のアンケ。何度も韓国に来たことがあり、慣れているはずなのに、上げ下げを繰り返して衰弱した。かなり疲れているのに、ソウルの

友人を尋ねて歓待を受け、断れなかったと言った。アンケは外国人アーティストの事実上の束ねで、いつも皆を手際よくまとめていた。ある晩、というよりももう明け方、いつも早起きのジニーと私は、アンケの寝言を聞いた。思わずジニーと顔を見合わせて、『今の聞いた？』『うんうん聞いた』二人異口同音に、『イングリッシュー！』ドイツ人なのにな。

バーベル

八月三日。朝はいつも霧が立ち込めていて清々しい。カーチが鳴いている。何処から猫が一匹やって来て、また何処かへ行ってしまふ。日本と似たような景色。でも何かが違う。二、三十年前の日本の田舎のような。懐かしい、景色。

学校に残って制作をする。やはり残っていたバーベルが、突然しゃくり上げてとんで来る。腰が痛い、私はもう仕事が出来ないかも知れない、どうしたらいいかわからない。腰が痛い、背

2000° 봄
금강국제자연미술전
 미술전 2000. 3. 11 ~ 3. 31
 Gyeonggang International Nature Art Festival
 Gyeonggang International Nature Art Festival
 Gyeonggang International Nature Art Festival

“새 문을 열며”
 OPENING UP TOWARDS A NEW ERA

주최: 충청남도 문화사업진흥원 (Korea Culture Foundation)
 후원: 한국문화재단, 충청남도, 군주시
 협찬: 충청남도, 충청남도문화재단, 충청남도, 군주시

	AKATSUKI NORIKO (Akatsuki Noriko) 작가 일본 일본의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.
	770072 KIMURA KATSUKI (Kimura Katsuki) 작가 일본 일본의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.
	SAKISANE USHIO (Sakisane Ushio) 작가 일본 일본의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.
	HELLIN ANKE (Hellen Anke) 작가 독일 독일의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.
	HENGE/ANGER K.A.D. (Henge/Ange K.A.D.) 작가 독일 독일의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.
	HOBE BARBEL (Hobe Barbel) 작가 독일 독일의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.
	PROESTER KUNEL (Proester Kunel) 작가 독일 독일의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.
	ADATH HUTTON (Adath Hutton) 작가 영국 영국의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.
	GEMAD COX (Gemad Cox) 작가 영국 영국의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.

	PAL PETER (Pal Peter) 작가 독일 독일의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.
	BIRTHE JOSEF (Birthe Josef) 작가 독일 독일의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.
	LEBRE BOKAN (Lebre Bokan) 작가 독일 독일의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.
	GENILLA LEANDER (Genilla Leander) 작가 독일 독일의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.
	TRUDY ENTWISTLE (Trudy Entwistle) 작가 영국 영국의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.
	JONES VIRGINIA (Jones Virginia) 작가 영국 영국의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.
	YOSHINA SHIGERU (Yoshina Shigeru) 작가 일본 일본의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.
	SHIROGITA RUMIKO (Shirogita Rumiko) 작가 일본 일본의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.
	HAY-UN (Hay-un) 작가 한국 한국의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.
	SUK-SAN (Suk-san) 작가 한국 한국의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.
	JONG MYUNG (Jong Myung) 작가 한국 한국의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.
	WANG JUNG (Wang Jung) 작가 한국 한국의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.
	CHONG-YEON (Chong Yeon) 작가 한국 한국의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.
	SEOK-CHEOL (Seok Cheol) 작가 한국 한국의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.
	WOON-YEONG (Woon Yeong) 작가 한국 한국의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.
	EON-KYUNG (Eon Kyung) 작가 한국 한국의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.
	SOO-HYUN (Soo Hyun) 작가 한국 한국의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.

	KIM KANG-WOO (Kim Kang-woo) 작가 한국 한국의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.
	CHOI PYONG-ON (Choi Pyong-on) 작가 한국 한국의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.
	LEE SANG-WOO (Lee Sang-woo) 작가 한국 한국의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.
	MOON SUCK-OO (Moon Suck-oo) 작가 한국 한국의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.
	CHOI SUNG-YOUNG (Choi Sung-young) 작가 한국 한국의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.
	HO SANG (Ho Sang) 작가 한국 한국의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.
	YOUNG LEE HUNG (Young Lee Hung) 작가 한국 한국의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.
	HA SANG-SOO (Ha Sang-soo) 작가 한국 한국의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.
	CHUNG HA-UNG (Chung Ha-ung) 작가 한국 한국의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.
	DONG-WHAN (Dong-whan) 작가 한국 한국의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.
	CHUN-CHUNG (Chun-chung) 작가 한국 한국의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.
	KANG HEE-JOON (Kang Hee-joon) 작가 한국 한국의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.
	SEUNG-YOUNG (Seung-young) 작가 한국 한국의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.
	HYUN-HEE (Hyun-hee) 작가 한국 한국의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.
	YEO-CHANG (Yeo-chang) 작가 한국 한국의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.
	EUNG-WOO (Eung-woo) 작가 한국 한국의 현대 미술계에서 활동하는 작가로, 자연과 인간의 관계를 주제로 한 작품을 많이 제작한다.

からますます声が小さくなる。聞こえないあい、こっち向いてしゃべって、るり子全然聞こえない、もっと大きな声で。皆が言うので、ますます私は上がつてしまい、いつもなら説明出来ることまで、しどろもどろになってしまった。

後でバーベルが、ずいぶんおとなしいスライドショーだったね、とからかった。誰にも弱点はあるのよ、あなたはもうよく知ってるでしょ。私達は四年前、スウェーデンの野外展で生活を共にしたルームメイトだった。そのころの私は今よりもっと引つ込み思案で、バーベルにお尻を叩かれておそるおそる頑張っていた。あのころに比べれば、これでも度胸がついたのだ。語学力はちっともつかないけれど。

その晩は遅くまでおしゃべりをした。この展覧会の代表をしているリ・ウンウー、ユン君、アガサ、京子さん、他にも大勢居た。フェミニズムの話、家族の話、歴史の話。言葉が思うように伝わらず、皆少しづつ自分勝手に誤解して解った気になっている。楽しい

夜だった。

二時か二時半ごろ、そろそろお開きにしようとしたが、別のグループがまだ遊んでいる。ボランティアの女子大生を交えて、他愛ないゲームに興じている。コンと言って誰かを指差す、差された人はジュウと言ってまた誰かを差す、差された人はチュツと言って誰かを差す。差された人の両側の人がさつと手を上げる。私達はちよつとその様子を見ていた。突然階上からグニツラが叫んだ「もう夜も更けたから静かにして」。ゲームをしていた連中は声を殺してゲームを続けた。私達はそれをおに寝に行つた。

インタビュー

八月七日。展覧会場でKBSテレビのインタビューを受ける。はい、向こうから歩いて来て下さい。こんな時に限って、サンダルを履いているばかな私。緊張してぎこちなく歩く。インタビューの美女が、満面の笑みをたたえて近づいて来る。彼女の職業的笑顔

が、私にも伝染する。日焼けした素顔に、人工的な微笑が貼りつく。はい、あなたの作品について説明して下さい。ここを指差して、顔をこちらに向けて、英語で説明して。はい、もっと大きな声で。

私の作品はミルキーカレンダーといつて、日本の着物地を自分で草木染めして、そこに牛乳びんの蓋を縫い付け、賞味期限の日付けを使ってカレンダーにしています。このカレンダーは日常生活の象徴であり、同時に資源再利用（リサイクル）の象徴でもあります。布地は古いもので、ものを大切にする昔の日本女性のお陰で成り立っている作品なのです。

緊張しているせいかなかなかうまく説明出来ない。何回やり直しをさせられても、英語はたどたどしく、強制された動作はぎこちなく、声は小さい。とうとう最後に、日本語で説明して、と言われてしまった。ああショック。被っていた麦わら帽子のつばをぐいと持ち上げられた時も、得体の知れない

屈辱を感じた。何処の国のマスコミも同じだなあ。自分の失態も含めて、素早く忘れてしまうことにする。

オーブニングデイ

いよいよ八月十一日。オーブニングの日はすなわちお別れの日でもある。この日が終わると、アーティスト達は帰り始める。

長い午後。韓国の伝統舞踊を見たり、コンジュウ市のお役人さんのスピーチを聞いたりして、セレモニーも無事終わる。黄昏、五年に一度のコンジュウ市のお祭りに参加する。

そして夜は、宴会。学校に戻り、風通しのいい玄関に車座になって、盛り上がる。日本人や韓国人は宴会の席上でよく歌うが、ジニーやアガサ、トゥルディは、そういう習慣がないのか、指名されて困っていた。

カーチの鳴く村最後の夜が更けていく。こうしていると、あれこれ頭で考えているよりも、実際に飛び込んでしまったほうが、溶け込み易いというの



がよく解る。世界は一つなどときれいごとを言う気はさらさらないが、様々に入り組んだ社会状況、生活環境をゆっくりとくぐってみると、そこには共通の感情を見つけることができる。親近感を覚え、やさしい気持ちになれる。欠点もたくさんある生身の人間が、それぞれに文化的背景を背負い、社会的政治的問題を抱えながら、互いに向き合い、少しでも理解しようと努力する。はじめの一步はこんな風でいいのじゃないだろうか。

韓国は私にやさしく、私もまた、先入観なしに、素直な気持ちで韓国を見て来た。韓国だけでなく、他の国のアーティストとも交流できて面白かった。これも皆、合宿生活のお陰だと思う。だから国際野外展はやめられない。たとえどつすんトイレであろうと、水シャワーであろうと。

出 発

翌日。お世話になった小学校の掃除をし、村を後にする。この二週間、韓国で出会った人々は、皆親切でやさしかった。通りすがりの人も、アーティスト達も。それは私が旅人だったからだろうか。旅人という名の、弱者だったからだろうか。

旅人はいつも、大きな荷物を抱え、言葉も解らず道も知らず、不安な気持ちでうろろしている。誰を信じ何を真に受けたらよいかわからずにいる。そんな時の親切は身に染みる。感謝の気持ちも自然と芽生える。

日常に流されている生活から離れて、暫く一人になってみると、自分のことも少しずつ見えてくる。

何と我儘な肉体、何と貧弱な精神。薄々感じていた自分の中にある不安と、素直に向き合うこともできる。

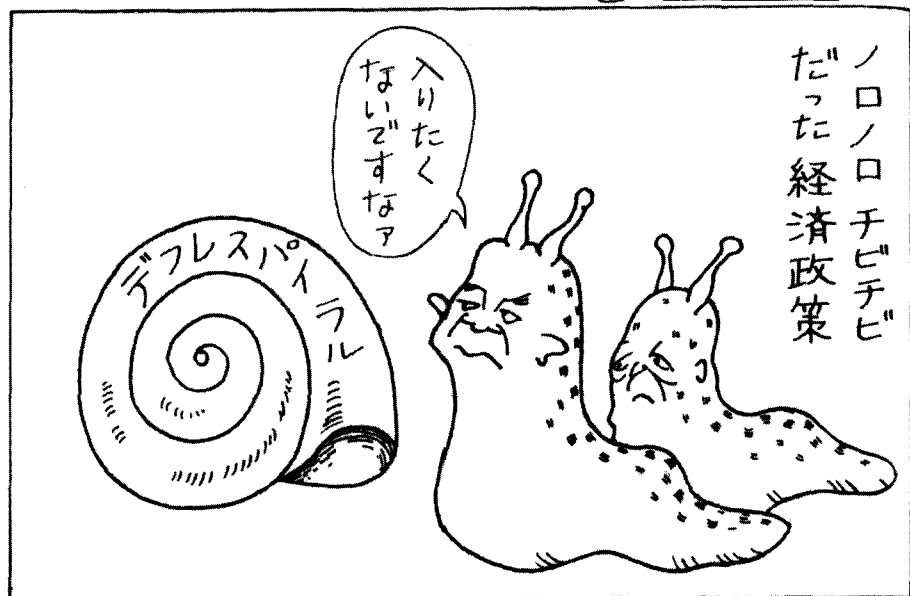
だから人は旅に出る。困難を承知で。そして私も。

(写真提供・筆者)

世はデフレ

(21)

一筆
両断





エッセイスト・クラブ

育てる

東京都八王子市 浅川涼子

目覚まし時計が六時を告げている。起きるのが辛い。気力をふりしぼって着替え、台所に立ち、水道の蛇口をひねる。ガスの火をつける。朝の一通りの家事をこなして、夫を送り出す。送りだしたとたん、意地で支えていた体が力を失っていく。倦怠感が押しよせてきて、何をするのもいやになってくる。

なにしろ、低血圧、低体温の体だ。これだけ体を動かしても、血圧は九十の四十三、体温は三十五度にもならない。依然として体は目覚めていない。これが私の日常だ。

だからといって、再びベッドに身を委ねて、眠りをむさぼるわけにいかないのも私の日常だ。まずは椅子から我が身を立ちあがらせなくてはならない。

そんなとき、私が一番にすることは、アジアンタム

の三つの鉢に水をやること。玄関に二鉢、食堂の出窓に一鉢、たつぷりと水を注ぐ。やわらかな薄緑色の葉が重なりあっている。根元から小さなぜんまいのような新しい芽がいくつも覗いている。それが開きだして、まるで早春の芽生えにも似た若々しい葉があちこちに育っている。小さなこんもりとした緑の茂みの中で繰り返される生への営み。

水を注ぎながら、それらを見ていると、やっと私も目覚めて活動を開始できるようになる。さあ、と自分に掛け声をかけられるようになる。まさに植物の効用そのものだ。

植物に関心を持ち始めてから、まだ二年ほどだ。子どものときから動物は大好きで、犬を見たり、猫にさわったりするだけで心がなごんでくる。しかし、花や草木は好きだけれど、自分で育てて愛でることになどうしても心が向かなかった。動物のように温かな体温を持ち、こちらの気持ちに直に反応することもないの

に、なぜ夢中になれるのか、いま一つ理解できなかった。

それにある時期、「育てる」ことがまるでできなくなった。自分が懸命にしてきたつもりの子育てが、根こそぎ否定されたときだ。娘のつまりずき、母親に向けられた憎悪、私のそれまでの生き方の、全面撤退だった。

私の気持ちが一番ダメージを受けていたときなど、切り花の水をかえることすらできなかった。私がさわるとすぐに枯れてしまうようなイメージに、とらわれていた。

十年もの長い年月をかけて、娘の心が快復していくにつれて、私の心も平安を取もどしていった。

そして、ある日、元気をなくしていたアジアンタムを別の植木鉢に移しかえて、育ててみようと思いが動いた。

毎日、水をやり、成長を見守っていると、手をかければ、かけるほど、気持ちに伝えてくれるのに気がついてきた。そうになると、楽しくなるし、愛しさも湧いてきて、声をかけたりする。そうか、育てるということは、こういうことか、などと納得してしまった。

昨年は、ゼラニウム、ミニバラをきれいに咲かせた。ハーブも育ててみた。

また、夫が植木鉢に押しこめていたすずらん、山吹、皐月などを庭に植えかえてみた。狭いところでちぢこ

まっていたそれらは、ほっとしたように枝を伸ばし、茎を伸ばしている。

夫は植物が好きだと自認しているが、育て方がまことに性格を表しているなあ、と感心してしまう。はびこるのがいやだそうで、鉢に植えて成長を抑えてしまう。範囲を決めて、制約してしまうのは夫が家族にしているのとまったく同じだ。

もうすぐ、三月になる。そろそろ掘り出しておいたカンナ将球根を植えよう。アネモネももうすぐ芽生えるだろう。そして、商店のおまけでもらった美女なでしこの種を蒔こう。

私の花を愛でて、育てる楽しみは、芽生えのときを迎えている。



雑感（生きるって悪くない）

寺田真佐

夕方、犬と散歩しながら、暮れてゆく濃紺の空を見上げる。丸い月ときらめきだした星々。「きれいだなあ」と思う。

春（四月）が来ると私は六十二歳。還暦も過ぎたというのに、いまだに月や星が大好きで見とれてしまう。姿かたちはしっかりと老いてゆくが、気持ちは一向に年取らない。なんだかいよいよ若やぐようで、日々、ささやかな出来事の一つ一つに、心ときめかずにはいられない。

こうして、犬のタロと見る夕空。庭に咲く紅梅、ふくらむ沈丁花のつぼみ。二階から聞こえてくる娘たちの笑い声。「今夜は少し遅いよ」との夫からの電話。失いたくない大切な日常である。

先日、続けざまに観た「オールアバウト・マイマザー」と「恋のから騒ぎ」は、泣かせ笑わせてくれるいずれもよい映画だった。プリジストン美術館の「ルノアール展」も楽しみだし、池波正太郎氏の「鬼平犯科

帳」を、もう一度全巻読み返したいとも思う。一生かかっても尽くしきれない芸術やエンターテインメントの世界が広がっている。

そして、週に一度カウンセリングルームで人に出逢い、話を聴き、語り合いながら、ともに悩みの解決を目指して努力するという、苦しいけれどやり甲斐のある、仕事もある。

ささやかなよろこびは、数え上げたらきりが無い。

若いころは、生きることがしんどかった。十歳で父を亡くした後、四人の娘を抱えて苦勞する母のため、私はひたすら「よい子」を励んでいたような気がする。健気に「母想いの娘」をがんばりすぎたせいだろう。いつの間にか、自分自身がどこかにいつてしまつて、空っぽの感じがした。何をしても楽しくなかった。「母を悲しませるわけにはいかないから死ねないけれど、四十歳くらいまで生きたら私はもう十分。長生きして人はいらない、よく頑張るな」と、本気で思っていた。それがどうだろう。この年になっても、まだまだ死にたくないのである。辛いこと苦しいこともそれなりにあるけれど、楽しいこともいっぱいあつて、差引き、「生きるって悪くないな」と思えるのである。

結婚し、二人の娘を産み育て、カウンセリングを勉強し、十年前には母を見送り、ただ、せっせと生き続

けているうちに、いつの間にか心の空しさが薄れていき、少しずつ少しずつ、気持ちが出来になってきたようなのだ……。

少年たちの事件、子どもへの虐待、災害、汚職、リストラなど、心痛むことの多い世相の中で、「こんなさやかな幸せにどつぷりと安住していいのかな」となにか後ろめたいような気もするけれど、今は、どうしようもなく、日々生きる味わいのとりこになりながら、日を送っている

——ま、いいか。生きるって、とてもいい味がするんだもの。今は、今を味わおう。もしかしたらこのやすらぎは、出番を待っている厳しい老いの前の、束の間の休息なのかもしれないのだから。

綿入れ

奈良県生駒郡 高松恭子

綿入れのちゃんちゃんこを作った。針仕事は好きだが、よりにもよって喘息持ちの私が綿入れを作るなんて想像もしなかった。

あれはこどものころだった。

「埃がするから向こうへ行ってなさい」と、母に言われながらも、打ち直した綿を入れ、真新しい生地で母が布団を作り直す様子をよく眺めたものである。陽が差し込んだ部屋で綿埃が舞うなか、タオルで姉さんかぶりをした母は、手際よく布団を仕上げていった。あのころ、大人になったらやりたいと思うことはいっぱいあった。しかし、布団を作るのだけはご免だとも思っていた。母はよく言ったものだ。

「布団なんて作らなくていいわよ。いくらでもいいのが売ってるから……」そう言いながら母はなぜ作っていたのだろう。

結婚してから何度か布団を買った。軽くて安いものを買うたびに、綿入れをしていた母を思い出した。あの埃を吸いながら、面倒な作業をしなくていいだけでも、いい時代になったものだと思った。

不要になった布団は、粗大ゴミの日に捨てた。押し入れの中でさばっていた布団がゴミ置き場に横たわると、みすばらしく哀れだった。母なら綿を打ち直して作り直しただろうか。処分してせいせいしたものもの、なぜか後ろめたい気分が拭えなかった。

そのころ私は、もう一組の布団の処分に頭を悩ませていた。それは夫が故郷の金沢を出たときに母親が持たせてくれたものだった。上等の綿が入っているらしいがとにかく重くて使いにくい。邪魔だが親の銭別代

わりともいふべきものをゴミにするのも忍びなかった。

「古い布団の綿を打ち直し、仕立て直します」という広告を見つけたのはそんなときだった。固さ、寸法、柄は好みで選べるという。値段は新品より高かったので迷った。が、捨てたときの後ろめたい気分を買い上げてもらうつもりで頼むことにした。業者は、いい綿がぎつしり詰まっているので二枚できると言った。

三週間後、見違えるように蘇った布団が届いた。生地も縫製もしっかりしていて好みの固さに仕上がっていた。

ああ、捨てなくてよかった！

久々に出会った心地よく体に添う布団に寝ながら、どんな人があの大変な綿入れをしてくれたのだろうかと思いをめぐらせた。

あれだけはしたくないと今でも思う。しかしできればいいなあとも思う。ちゃんちゃんこを縫ってみる気になったのは、そんな気持ちからだった。

きっかけは友人からプレゼントされた手作りのちゃんちゃんこが何とも言えず暖かったからである。あれだけは嫌だと思う綿入れだが、一生に一度くらいはしてもいいか……という気になったのだ。タンズで眠っているウールの着物を一枚つぶして子供用を作った。縫うのは簡単だが、やはり綿入れには参った。しかしこの暖かさはどうだ。じわじわと手に伝わってくる暖



かさは、埃の出ない化繊綿ではとても得られないだろう。

そう思ったとき私は、買えばいいのだと言いながら、布団を作り直していた母の気持ちに少しわかるような気がした。ものを大切にして得られる心の充実感は、なにものにも替えがたかったのではないだろうか。

「布団など作らなくていい」と、言った母が私に望んでいたのは、こんなちまちまとした生き方ではなかったのかもしれない。しかし私は綿入れを通じてとても大切なことを学んだと思っている。

小さな家族

熊本県八代郡

砂原富美子

「雪は、どこへ行ったの？」

小六の次男が家のまわりをさがしても、雪の姿がないので心配顔で私にたずねた。

「もう三日になるね、本当にどこに行ってしまったのかなあ、お腹すかしてるよね。一緒にさがしに行こう」

次男と二人で雪の行きそうな場所をさがしてみた。裏庭の物置小屋、雪が好きな鶏小屋のそばの柿の木の根元、新聞紙の入ったダンボール箱、どこにも雪の白い毛らしいものが何本かくつついていて北風にゆれていた。

「朝は氷がはってたし、きつと寒がつてるよ」

次男は白い息を吐きながら、体をかがめて雪がいるかもしれない可能性のある場所を見つけようと必死だ。

いつも家の近くにいた雪だけに、遠くに行くことは考えられない。ごはんの時間には、雪が産んだジュニアと一緒に仲良く食べていたのに、今はジュニアの姿しかない。猫の言葉が解るのなら、雪の居場所を聞くこともできたかもしれないが、すっかり成長したジュニアにとっては、もう母親の乳も必要ではないらしい。

ジュニアは時々外泊もするし、傷を負って帰ってくることもある。オス猫はケンカすると聞いてはいたが、ついこの前まで子猫だったのに、自分の体の二倍もある近所のオス猫と戦っているのを知り驚いた。

ジュニアも雪も毛が真白でそっくりだ。近所の人は区別がつかないと言う。ジュニアはオス猫なので、家の近くに他のオス猫がくるとニャーニャーさわがしくなる。

多量の白い毛がぬけ落ちていると、またケガしたのかと心配になる。そういえば、三日前もかなりの白い毛がぬけ落ちていた。ジュニアの毛ではなく、もしかしたら雪の毛だったのかもしれない。雪に何か異変がおこったのだろうか？

それとも交通事故にあったのだろうか？ 私は次男と道路のあるところまで行ってみた。信号もない、田舎の畑の間を通る道路は時々車が走り去っていく。それともかなりのスピードで。人身事故はまったくないが、それでも年に一回か、二回は、犬や猫がはねられたことがある。そんな時は、気づいた人や近くの住人が埋葬しているようだ。

私も以前、はねられてすぐの半分にちぎれた子犬の死体を見たことがある。近くの人と一緒に河のほとりの花の咲く場所に埋葬した。

雪がもし、交通事故にあったのなら、近所の人が知



らせてくれる。でもはねた人が病院に連れていったらどうだろう。私は近くの動物病院に電話を試みた。雪の手術をしてくれた病院にも、他の病院にも白い猫の情報はなかった。

そして二週間が過ぎた。雪の姿は消えたままだ。次男もあきらめたように元気がない。

雪が残してくれたものは、かけがえない日々として次男の心や、私の心に残るだろう。

ジュニアの姿が雪と重なる。小さな雪を拾ってきた時、次男はともうれしそうだった。初めて育てた小さな家族の存在が、次男に思いやりや、優しさ、そして何より命の尊さを教えてくれた。雪の出産を通して、生命のすばらしさ、そして生きる力を実感した。私も

子育てで学ぶこともあった。だから雪が、もしもこのまま姿を消しても、決して忘れないでいようねと次男と約束をした。

次男がおこづかいで雪に買ってくれたサッカー少年の人形がある。「ワタル君」は雪のお気に入りだ。ワタル君がかったボールを雪が追いつき、それを前足でけり返す。その様子がとてもかわいくて、家族全員で笑った。喜んでくれた。もうあの光景を見ることはできないのだろうか。突然いなくなった雪ちゃん。でもどこかで生きていることを願っています。

たくさんの思い出をありがとうございます。

鏡に写った母の顔

永田道子

今から三十年以上前のことだったろうか、母は出かけるため我が家の鏡台で化粧をしていた。その鏡の中に写った母の顔を見て思わず私は「紀代さんは母さんの娘でしよう？」と言ってしまった。

なぜかという以前、いとこの紀代さんが「戸籍謄本をとったら自分が養女になっていたのでおどろいた」との話聞いていたので、鏡に写った母の顔が紀代さ

んにそっくりだったから、「もし、かして、母の子」と思ったのだ。

母はひと呼吸おいてから「実は兄の家に子供がいなかったので私が生んだ紀代は養女に貰われていったんだよ」と言った。私は呆然として「父親は誰なの?」とは聞けなかった。

それまで私は母が「父と結婚して三人の子供を生んで」とごくあたり前の家庭と思っていたのだが父と結婚する前に恋人がいたのだろうか?

伯父に会ったときそのことを聞いたなら「紀代の父親はもうこの世にはいないよ」とだけ答えた。

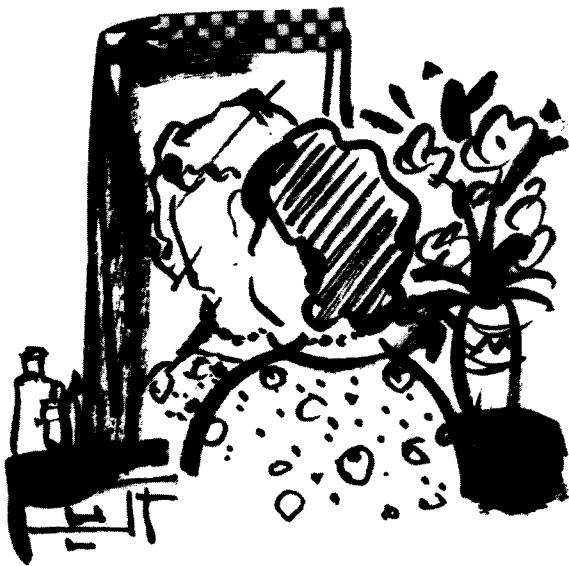
母の兄の家では紀代さんを養女にしたあと、四人の子供が生まれ現在はそれぞれ結婚したが、余りつき合っていないようだ。

紀代さんは今、七十歳を過ぎ息子夫婦とは別居し一人暮らしをしており、一か月に二度ぐらい我が家に電話をかけてくる。

先日「とつてもうれしいことがあったの、みっちゃん聞いてよー」で始まり、話に花が咲いて、いつも一時間以上の長々電話になるのだ。

私はあのときの鏡に写った母の顔を見なかったら今も紀代さんをい、い、いとして接していただろうか?と考えるときがある。

紀代さんの父親は誰だったのか。母が亡き今は聞くすべもないが、現在、私には弟が一人いるのみで姉は紀代さん一人である(姉は若くして亡くなったので)。だから紀代さんの父親は誰でもいい。何でもおたがいに語り合える姉を、母が生んでおいてくれたことに今は感謝するのみである。



新鮮すぎた鯖

千葉県船橋市

榎 雅子（38歳）

魚は新鮮なものを食べたい。日曜日は魚市場が休みなので店頭で売られていても、買わないようにしている。

いつも利用する商店街の魚屋は、新鮮で品揃えも豊富で一尾丸ごと置いてある魚も多い。秋の終わりごろ、その魚屋で何にしようかと物色していると、発泡スチロールの白い箱が積み重ねられた。

「今、銚子からとどいた秋鯖だよ。脂が乗っておいしいよ」

長靴に鉢巻きの店員さんが、手をならしながら威勢よく声をあげる。

すぐさま人だかりができ、私も負けずに一番大きなうなのをビニール袋を被せた手でつかんだ。三十センチ以上ある、たっぷり肥えた目玉もぴかぴかの鯖だ。きつと今日の明け方は太平洋で泳いでいたはずだ。

メ鯖にした。「秋鯖はおいしいね」と家族でべろりとたいらげた。

日付が変わった午前三時ごろ、きりきりとした腹痛が目覚めた。側で寝ている夫を起こそうか迷いなが

らみぞおちあたりの激痛と格闘しているうちにまた眠りについていた。

朝起きるとなんとなく痛みがあったが、普通に食欲はあり朝食を食べたら治まった。鯖にあたったと思うたが、同じ物を食べた家族はなんともないし、食中毒特有の吐き気や下痢もなく熱もない。

皆を送り出したあと、夜中の痛みはなんだったんだろうかと思いつながら、いつもの家事をこなしていると激痛が襲った。息が詰まってしゃがみ込むほどだがしばらくすると治まる。そんなことを繰り返しながら、洗濯も済ませ自転車で買い物にも行った。健康が自慢な私は、明日にはなおるだろうと病院に行かずに痛みとつき合いながら一日を過ごした。

次の日の明け方また声も出せない激痛に襲われた。これはおかしいと子供達を小学校に送り出した後、検査ができるように何も食べずに、夫に付き添ってもらって近くで一番大きい総合病院に行った。受診の手続きをしてもらった後、電話で報告するからと夫には会社に行ってもらった。

総合病院ではあたりまえのことだが、ずいぶん待たされた。痛みをがまんしきれず先に診てほしいと頼もうと思ったが、痛みは周期的なので言いそびれ、二時間近く経ったころやつと呼ばれた。

若い医者は痛み以外に症状がないので首をかしげた。

診察室に入った時ちようど痛みが治まっていたため、

「では、胃カメラの予約をして、明後日にでも検査を受けてください。血液検査もしましょうか」と検査のスケジュール表を見ながらのんきなことを言う。

「すごく痛いんです。どうしても今すぐ胃カメラしてください。何も食わずに来ましたから」と訴えるうちに激痛がやってきた。医者もお腹を押さえてうずくまる私を見て、胃カメラの検査がすぐに受けられるよう手配してくれた。

胃カメラを操作する医者は、胃の中が映し出されたモニターを見ながら、

「おかしいな。出血もないきれいな胃ですよ」と言う。

「何もないな」と眩きながらくまなく診ているようだが、機器のモーター音だけが響き心細くなる。

「おっ、何だこれは。虫がいるぞ!」

「虫」と聞いて私も驚いたが、検査室にいた看護婦さん達もモニターを見に集まってきた。

医者は胃カメラの先についている小さなピンセットで虫をつまみ出し、その瞬間に私は患者ではなくなつた。

小さなガラスピンでホルマリン付けになつた「虫」を見せてもらった。白く、風糸の太さで二センチぐらい。こんなに小さいのにあんなに痛かつたのかと意外だった。

「これは、アニキサシスという魚にいる寄生虫で、鮮な刺身を食べた人の胃壁にかぶりついて、激痛がおきるんです。活きづくりの刺身でも食べましたか」

「おととい、新しい鯖をメ鯖にして食べました」

「えっ、丸一日我慢していたの。この前この虫にやられた男の人は明け方に救急車で来たよ。女の人は痛みに強いね」と医者は感心する。

「メ鯖なら酔に浸けるんでしょう。それなら虫は死ぬはずなのにね」とも言った。

私の胃壁に、頭をもぐりこませている「虫」の写真も何枚か見せてくれた。私は午前の検査の最後の患者



だったし、いつもなら「癌」や「潰瘍」など病巣を見つけたのに比べ、ユーモラスな「虫」の出現に検査室はなんとなく楽しい会話が続いた。

会社にいる夫に電話で事の次第を説明すると、驚きながらも大笑いしていた。

家に着いてから、胃カメラで撮ったあの写真を一枚もらってくればよかったと思った。子供に見せたらどんな反応をするか想像して一人で笑ったりした。頭の隅で、何の病気だろうか癌かもしれない、入院したら子供達はどうしよう。と悪い方向への思いもあったので「虫」で落ちが付いてほっとしていたのだ。

その後、図書館で「虫」つまりアニキサシスについて調べてみた。

「鯨、イルカなど海洋ほ乳類に寄生する回虫の幼虫で、糞に混じった卵が海中に散らばり、魚貝に寄生する。酸に強い」なるほどメ鯖にしても平気ということか、胃酸の中で生きていることを考えれば納得できる。

銚子（千葉県）の近くにも、鯨かイルカがいることを身をもって知って嬉しくなった。その反面「胃ではなく腸についた場合は切開手術がされる」と知りぞつとし、子供達でなくてよかったとつくづく思った。

魚は新鮮なものを食べたいが、今回は新鮮ゆえに災難を受けた。あの日以来我が家の食卓に鯖が登ることはない。

父の亡くなった夜

名古屋市守山区 柳澤幾美（43歳）

その夜はなかなか寝付けなかった。やっと眠りについたその瞬間、枕元の携帯電話が鳴った。ついに、と直感した。「危ないらしいねん。あと三時間くらいはだいたいじょうぶかもわからんってお医者さんが言ってるらしいけど、どうする？」と電話の向こうで姉が言った。父の看病当番になっていた兄から連絡があったという。「行く。すぐ行く」と私は言って電話を切った。時計を見ると、午前一時三十分だった。

それまで携帯電話を持ったことがなかった。必然性を感じなかったからだ。それでも、このときのために、そのためだけに持った。まだ数週間前のことだった。

急いで身支度をし、夫の運転する車で名古屋から父の入院している三重県名張市の病院に向かった。実家のある市である。二人とも無言だった。

夜中の高速道路はすいていた。かなりのスピードを出した小さな軽自動車は、エンジン音がカーステレオの音よりも大きくなった。とにかく一刻も早く着いてほしい。そう願いながらも、「もう、間に合わないかも」と口をついて出た。

約二時間三十分後、真夜中の病院に着いた。建物のすぐ前にある駐車場から四階の父の病室を見上げた。これまで何度となくさまざまな思いで見上げた病室の窓である。そこだけ蛍光灯が灯っていた。あの中では何が起こっているのか。足早に病室に向かった。

エレベーターを降りると、病室の前のまっくらな廊下に姉が立っていた。急いで近寄ると、「私も間に合わへんかってん」と、目をまっかにした姉が言った。母の姿はもうすでになかった。「三時十三分やった」と横に兄が来てほそつとつぶやいた。

「うそー」と言いながら、病室に入った。こうこうと



明かりの灯った病室のベッドの上に、焦げ茶色の紬の着物を着た父が静かに横たわっていた。病室には他に誰もいなかった。

もうすでに息をしていない父の顔に近づいた。何という穏やかな顔をしているのだろう。涙がぼろぼろこぼれた。その安らかな顔は、凄まじい苦しみがすべて終わったことを告げていた。笑みをうかべているようにさえ思えた。元気なころのあの優しい顔とまるで同じだった。こんな父の顔は、しばらく忘れていたものだった。最近は苦しみに歪んだ顔しか見ていなかった。今の父の顔はまさに「仏さま」だった。

「人は亡くなったときにその人のほんとうの性格が顔に現れるんやって」と姉の夫がつぶやいた。

まだ暖かい父の頬をなでながら、「おとうちゃん、おとうちゃん!」と呼んでみた。答えるはずもなかった。私の声はもう聞こえないのか。声をあげて、思いっきり泣いた。ふとんをめくると、胸の上にきっちり組まれた両手があった。六十年間近く和菓子を作り続けた父の、太くて短い指。その先には丸っこい爪が鎮座していた。

二〇〇〇年十月十二日午前三時十三分。二十一世紀を見ることなく父はこの世を去った。享年七十六歳。肝臓ガンで余命一か月と診断されてから約一月半後のことだった。

袴をたたむ

東京都青梅市 福島みさを

秋の晴れた日、孫娘の千紗が隠居所にしまつてあつた舅の衣類のたとうをごっそり運んで来た。湿けているので風をいれようと縁側に日陰干しした。五つ紋の羽二重の紋付き羽織二枚と縞の紋付きは着ているが、一枚は一度も手を通していない立派なもので、裏は緞子の絵羽である。昔軍隊に入営する時、紋付き羽織と袴を親が支度したものだ、夫が入隊した昭和十五年ごろは国民服を使用するようになり、羽織の紐も白い房が立つて結んである新品のまま保存してあつた。

結婚式は戦時中だつた。物のない時代で新調ができず、舅が昭和初期に注文で仕立てたモーニングを、その洋服屋が夫の体に合わせて仕立て直してくれたので、紋付き袴は着ずじまいであつたようだ。

陰干しした着物と羽織はすぐに畳んでしまうことが出来たが、袴の紐の畳みであるのが崩れてしまい、納まりがつかない。袴は冬の仙台平、夏の縞と普段用のセルがあつた。私は簡単に畳めるつもりでいた、ところが袴を前に座った途端、度忘れというか勘が狂つたというか、思い出せない。そんなことはない出来るは



ずだと、いくら考えても思い出せない。

四年前、孫の麻理が卒業式にはいたレンタルの袴を返す時、ちゃんと畳めたのに。私は女学校では行灯あんどんの男袴と女袴は縫つた。専門学校には着物と袴で通学し、銀行に勤めた時も袴で通つた。最初はカシミヤの海老茶の袴だったが、暫くして群青色のセルで自分で仕立てて、はいていたのだから、紐を編むように畳むくら

い、いと易いことだった。

思いあぐね、この春麻理に訪問着と袋帯をプレゼントした、その時の呉服屋のベテランに、恥を忍んで尋ねて見た。

「私も畳めません、レンタルはそのまま返してしまうので」と何とも頼りない限り。図書館に行つて調べて見ようとも考えた。取りあえずしまったものの、このままでは私のこけんに関わる。

ある日美容院に行き、「安達さん着付けをなさるからご存じかしら」と聞いて見た。

「私も畳めません」と前と同じ返事だった。

十一月に入つてパーマをかけに行つた。

「袴の畳み方の出ている本が見つかりました。お帰りにするまでにコピーして置きます」

「まあ！ 覚えていて下さったの」

私は大げさだけれど天にも昇る心地がした。

まさかちよつと話しただけに、覚えていてコピーまでして下さるとは。私はどんなプレゼントを頂いたより嬉しいと、心から感謝のお礼を言つた。

今日暖かい日差しの座敷に袴を広げ、コピーと首っぴきで挑戦した。手順と写真を見ながら、向こうへ向けたり、手前に回したり、むずかしかったがやつと出来上がった。心の中ではまだまだと思いつつ、今度という今度やはり歳は争えぬと思つた。

国民年金受給手続き

大阪府豊中市 中松ミナ子

一月のある日、私は現住所のある和歌山の町役場へ国民年金受給手続きに出かけた。

国民年金の保険料納入完了の通知を受けてから、早や五年の月日が経過していたのだ。

その間、あちこちの銀行から、年金振り込みは「ぜひ当行へ」との勧誘パンフレットが届いていたのも現代世相が、どん底不景気のせいだと思う。

すでに六十五歳、立派な高齢年金受給資格者だが、正直なところ「喜び」というより複雑な感情が心を占めていた。

ところで夫は、六十歳と同時に受給しているが「お前も、早く貰つておかないと、あわて者やから、死んだら損やでエ」と、年金受給先輩は助言するのだが、「あと五年据え置きにするわ」と手続きを延ばした。内心、受給することで老齢になったことを認めるよう、ちよつとした抵抗でもあった。

当初、年金に対して無関心だった夫が、近頃は、二か月ごとに振り込まれる年金の存在を突然思い出したように「あの金で、あんたに誕生日のプレゼントを買

ってあげる」と言ったり、車庫入りやバックのたび愛車（？）に増える凸凹を手でなでながら「うーん。ボクの年金引き出して車ビシッと修理しようかなア」と殊勝な発言をしたりすると、私は、ひとり笑いをこらえてしまう。

遥かな昔、夫も私も二十代のころ、国民年金制度が施行された。当時、夫は「なんで当てもならん国民年金の保険料をエンエンと掛けたアカンねん。自分等の老後のことは僕が責任持つわい」と、まことに力強



い言葉を吐き、月額わずか二百円（と記憶するが……）の掛け金を「アホらしい！」と頑固に拒否し、何度も説明にやって来る年金係の人にもソッポを向き続けた。

だが、私は、こっそり保険料を納めることにした。三十数年後の自分達の姿を想像し、年金受給資格がなくては淋しかりうと、それに将来は内助の功（？）と夫から感謝されるかも知れない……と考えながら。もともと、この私の内緒ごとは、すぐ夫の知るところとなったが別段、問題なく過ぎた。そして、今では夫自身、スズメの涙の額であれ、それなりに喜々として受け取っているのだから、年齢とともに人の考え方も変化するものだと実感している。

しかし、国民年金の保険料を支払った三十数年の間とは一般的に人生の最も充実している時期ではなかったろうか。このたび、受給手続きに国民年金手帳を手にして、昭和三十五年十月一日資格取得と記されているのを見て、長男出産の年であったことに改めて過ぎ越し年月の重さを感じたのだ。

とくに、小さな商売を営む我が家などには当然、退職金も恩給もない。したがって、国民年金だけが精一杯に生きてきた証しであり老後への、ささやかな褒美なのだと思える。

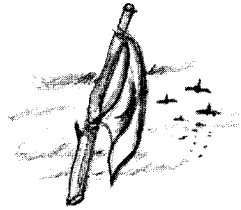
（え・カステラネンコ）

大佛次郎敗戦日記

大佛次郎著

草思社

定価二〇〇円



神奈川県藤沢市 本間美恵（52歳）

鞍馬天狗の作者、大佛次郎の敗戦日記を読んだ。昭和十九年九月から昭和二十年十月までの約一年間。

真珠湾攻撃から三年たち、第二次世界大戦が終わるまでの一年間が、著者の物価、と言っても主として聞値の変化をできるだけわしく書き留めてお

くという方針で書き記されている。

ウイスキー、一万円（昭和十九年九月十一日）タバコ敷島が一円から五円。金鶏一個買うのに朝三時に行列に立つ。砂糖一貫目三五〇円。光が一個五円から十円に。トマト一個二円五十銭。光一個が十五円から十八円。酒三十円から八十円、百円に近づく。（昭和二十年八月十二日）

手にいれることができなかった人も多かったと思うと、文士と庶民の差を感じ複雑な思いがある。

十九年十一月ごろから警報、警戒警報、夜間の空襲、焼夷弾投下と休みなく続く。

各月の扉裏の編集部作成の年表を見ると、沈没した輸送船の数、爆撃された場所、死者の数、都市の破壊具合、B29が何機などが明確にわかる。

昭和二十年五月、B29五百十機、東京中心部を空襲、十六万五千戸全焼。B29五百十機、白昼横浜を焼夷弾攻撃、全市が灰塵に。六月、B29五百三十機、大阪、神戸、尼崎を爆撃。八月十四日夜までに十四回にわたって五十の中小都市を焼夷弾攻撃、総計五万人が死亡。七月、米機動部隊、東京、関東各地、東北、北海道を攻撃。

八月、B29広島にウラニウム型原子爆弾を投下。長崎にプルトニウム型原子爆弾を投下。

こんなにも具体的な数字をあげられれば、ヒタヒタとその怖さがつたわってくる。

日記中には酉子夫人のこと、近隣の人たちとの交流が温かく書かれ、鎌倉文士たちの日常も垣間見ることができ、興味深く読み終えた。

リラの花 桜の花

浅野素女



上のギヨームはもうすぐ九歳になる。下の子トマは二歳になったところだ。少しずつ言葉が出てきて、目下、一番お得意の日本語は「おかえりー、パパ！」である。舌足らずな発音でそう叫びながら、ペンギンのように前つんのめりになって玄関に飛び出してゆくと、ギヨームも負けずに「おかえりー、パパ！」と、少し

べたべたした声を張り上げ、トマを追い越そうとする。ふたりの男の子に飛びつかれる瞬間は、夫にとって至福の瞬間だろう。

ギヨームの心の中には屈折したものがあるにちがいない。普段はジャンのことを「ジャン」と呼びながらも、「パパ」とは言っていないのだから、どう見ても無

理がある。あまりに芝居がかっている。ギョーム自身、そのことは承知でやっていると思われる。トマが自然と「パパ!」と大声で呼ぶ姿にどこかで対抗したい気持ちがあるのだろう。ギョームの成長とともに、この儀式にもそのうちケリがつくだろうと私たちは思っている。

今後、私たちのような「複合家族」はどんどん増えてゆくだろう。「複合家族」とは、私自身、拙著「フランス家族事情」の中で分析しているひとつの家族形態で、離婚、再婚、再々婚の増加とともにフランスで急増しているものだ。単に子連れ再婚の家庭を指すわけではなく、かつての夫婦中心の家族観から一歩進んで、視点を子どもにもってくる。すると、親が新しい伴侶と作った新しい家庭だけでなく、別れてしまったもう一方の親の家庭も子どもの行動範囲に入る。もしかしたらもう一方の親の新しい伴侶にも子どもがいて、その子のもうひとりの親も別の家庭を作っているかもしれない……と、こうした複数の家庭の輪が重なり合い、いくつもの家庭の輪の中を行き来する子どもが増えている。そうした輪の総体をとらえて「複合家族」と呼ぶのである。この場合、おとなどうしは別れても、子どもとそれぞれの親の関係はずっと続く。親も続かせるように努力する。

ちなみに現代のフランスでは、男性の一一%、女性

の三%が、配偶者の連れ子といっしょに生活しているという。親が離婚した子どもの六六%が、親のちがうきょうだいを持つているという統計結果もある。

私たちのケースは、ギョームの父親とうまくいっていないので決している例ではないが、「複合家族」の一形態と見なしていいだろう。二十一世紀の子どもたちには、錯綜する人間関係の中で生きてゆくための柔軟性が要求されるし、おとなの側には、争いを避けて適度な距離を取りながら、つき合いを続けてゆくための聡明さが求められる。私たちもまさにそうした動きの渦中に身を置いている。

ところで、八歳のギョームの頭の中には、まだよく整理されていない部分がたくさんあるようだ。何でもわかっているようでいて、こちらが「えっ」と驚くようなことも往々にしてある。まだ子どもなのだから、理路整然としていない部分があつて当然なのだから。

たとえば先日、学校新聞がきつかけでびっくりしたことがある。私たち一家は、パリの中でも外国移民の多い地区に住んでいるので、ギョームが通う小学校もまさに人種の坩堝である。そこで学校新聞の取材班は、生徒たちがどれくらいさまざまな言語を話すものなのかアンケート調査を実施し、その結果を発表した。ドイツ語からヘブライ語、セーシエル語、バンバラ語

という耳に馴染みのない言語まで、何と二十三にもおよぶ言語が挙げられている。言語能力の程度は、「片言」「簡単な会話が交わせる」「流暢に話せる」と、三段階に分けられていた。

表によると、中にブルトン語を話す子が一名いる。何だこれは。ブルトン語といえば、フランス西部、イギリスに向かって突き出た大半島、ブルターニュ地方に古くから伝わる言語である。聞けば、ギヨームがこの張本人らしい。

ジャンの母親がブルターニュ地方の出身なのだ。それも家系図を中世の昔までたどれるという古い家で、家の紋章の彫り込まれた先祖の騎士の墓が史跡として残されていたりする。夏休みにブルターニュ地方に出かけたついでに、その墓地跡を家族で訪れたことがある。歴史の大好きなギヨームに、これは強烈な印象を残したようだ。そこでギヨームは自分がブルターニュ人の血を受け継いでいると勝手に解釈し、アンケート調査の時、「日本語・流暢」に加えて、「ブルターニュ語・片言」と自己申告したと見える。あれだけ裁判などで繰り返して父親との関係をはっきり話したはずなのに、これである。どこまでが意識的で、どこまでが彼の夢の部分なのかはよくわからない。わからないから、私たちがむやみに急がず、とりあえず放ってある。夢見ることは子どもの特権でもある。中世の騎士はギヨ

ームの本当の先祖ではないのだよ、と言うのはたやすいが、ギヨームがジャンの家族から除け者にされたような思いを抱くことなく、自分の出生を正しく理解するためにどのように話をもつてゆくべきなのだろう。これが私たちの当面の課題である。

ともかくも、私とジャンの結婚によって、ギヨームはジャンの側の家族を得た。ギヨームが六歳になるとほぼ同時に、私たちは結婚した。血のつながりはないが、ジャンの両親、親戚はギヨームをあたたく迎え入れてくれた。ジャンには四人の姉と妹がいるので、ギヨームには十人ものいとこが一気にできたことになる。ギヨームは大喜びだった。

血のつながっている家族と、つながっていない家族と、どちらが勝っているとか劣っているとかではなく、問題は人と人の間に、いかに穏やかな信頼関係を築いてゆけるかということだろう。その基本はやはり個人である。ギヨームが個人として尊重されていれば——ということとは、ギヨームのある部分が否定されたりごまかされたりせずに、まるごと認められてさえいれば——血がつながっているようがいまいが、それは二次の問題となる。結婚して三年。その意味では、私たちはまだ冒険に乗り出したばかりだ。

さて、私はカトリックの結婚をした。この点は明白

で、キリスト教における結婚でなかったら、結婚しなかっただろうと思う。そのくらい、現代における結婚というのは意味を失っているように思われる。

私と夫は社交ダンス教室で知り合った。いままで暗い話ばかりしてきたので、印象がだいぶちがうかもしれないが、私たちは踊ったり歌ったりが大好きだ。踊りとは小さい時から縁があり、私はギョームを授かる前後に社交ダンスの先生と知り合ったことをきっかけに、気晴らしにダンスを習い始めていた。いまでも夫とは競技ダンスを続けている。

ジャンはフランス人の平均をはるかに上回るのっぽで、私は日本人の中でも小柄なほうだ。どう見てもお互いダンスのパートナーとしては不釣り合いで、ずいぶん長い間、顔見知り程度のつき合いだった。

ちがうのは背丈だけではなかった。彼は典型的な理科系、私は完璧に文化系。彼は揺るぎない伝統を受け継ぐ地方色豊かな家に育った。私はなんでもありの江戸っ子の末裔。おまけに私の父は青春時代の入口を戦争で無残に吹き飛ばされ、むしろ過去の思い出など忘れたいというような人。病気や不運から職業を転々とし、安定とは無縁の人だった。つまり私とジャンは、たまたまダンス教室で出会わなければ何の接点もないような異種の人間だった。

それがひょんなことから親しくなった。アダムと決

別してしばらく後のことで、私は自力で毘から這い出したばかりの傷ついた動物といった状態で、心身ともに疲れ果てていた。どうしたいという強い希望もなく、気軽につき合っていこうと思っていた。

ある時、次の週末の予定を聞いたところ、その日は法王がパリの北東のランス市までやってくるので、一目会いに行ってくるからパリにはいないと言う。「法王？」と、一瞬、目が点になった。法王の姿を拝みに行くような人などと、私はそれまでの人生でかわったことがなかった。聞けば、彼は日曜ごとにミサに行く熱心な信者なのだった。

私は火星人を見るような目で彼を見つめたにちがいない。いったい何をまちがってそんな信心深い人と近づきになってしまったのかと、私は我が耳、我が目を疑ったほどであった。

宗教にそれくらい縁がなかった。というより、時代がそういう時代だった。特にここ半世紀の日本では、信仰などくだらない、曖昧の極み、という切り捨てられ方ではなかったか。日本の場合、戦争と宗教が深く結びついていたという特殊性もあるだろう。カトリックの国フランスでは、なお七五%の人が自分はカトリック信者だと名乗ってはいるが、教会で結婚式を挙げるのは、今日、わずか二組に一組のカップルである。日曜ごとにミサに通う熱心な信者は一割もないだろ

う。

その時から私の「神探し」は始まった。一体どうしてこの人は神を信じているなんぞと断言できるのか。心底、不思議で仕方なかった。袖摺り合うも他生の縁と言うが、そうやって縁あつて触れ合つた人間が、神を信じている。もともと好奇心旺盛な私は、この目の前の人間を理解したいと思わずにはいられなかった。

一方で、アダムの姿を通して、私は人間の理性や知性がいかに脆いものであるかを目の当たりにしていた。

アダムは本当に頭のいい人だった。ユダヤ人であり、左翼のインテリであり、もちろん無宗教であり、創造的な仕事に就き、現代の知性の最先端を行くがごとくであった。

だが、頭がいい悪いなどということはまったく、本当にまったく意味をなさない、ということを私は思い知った。知識や知性は、外見を整え、身を守るために人間が自ら身にまとい、または、時代や環境によってまとうことを余儀なくされるお仕着せの服にすぎない。見せかけの装いは肌べっとり張りついているから、本人も回りも、それがその人の本当の肌だと思ひ込んでしまっているだけだ。追い詰められた時にこそ人間は本性をさらけ出す。

アダムは心のあたたかい人間でもあった。少なくともそう思えた。しかし、そのあたたかさも、あくまで

自分の都合しだいのものであった。

こうして私が相手に投げつける言葉はすべて、容赦なく私自身にも向けられるものである。愛した人への批判は、その人を愛した自分自身に直接跳ね返ってくるから、いつそう耐えがたいものとなる。だから、私はジャンに出会つた時、自己嫌悪の暗い淵の奥底に沈み込んでいた。

しかし、私は人間に絶望して理性や知性とはかけ離れた宗教に引かれたわけではない。信仰は、理性や知性をばかにしたりしない。はつきりしているのは、私の中で、理性や知性だけを頼りとする人間観が粉々に崩れたということ。人間は素晴らしい。しかし、人間には限界がある。自分の知覚や才覚など、本当にたかが知れたものなのだ。その限界に気づかない人間絶対主義、というより自己絶対主義は傲慢でしかない。

信仰があるというのは、そういう環境で育つた人間にとつては、日本語を話しますとか、フランス語を話しますというのと同じでなんら特別なことではない。ジャンは、信仰を空気のように自然に吸って育つた人だった。信仰がある人だから、いい加減に私とつき合つてゆくことは自分に許せなかった。とりあえずいうことで、同棲するのもしやなのだった。

そんな人だから、親しくなつてすぐにも、結婚とい

う二文字が問題になった。私のほうは、結婚なんて一生しないだろうと考えてきた無節操さなので、ジャンが真剣に悩み出すとこれまたびっくりしてしまった。だいたいお互いちがすぎる、という点で、私と彼の不安の源は一致していた。

ただ、どうしてかよくわからないまま、私はジャンを愛し始めていた。アダムとのことで自分に対する自信を完璧に打ち碎かれた直後のことだから、あらゆることに自信が持てなかった。だからいつそう、何度も自分に問いかけた。単に「溺れる者、藁をも掴む」の心境になっているのではないかと。

ジャンのほうはかなり前から私を気にしていたらしい。しかし近づいてみたら、母子がとんでもなく複雑な事情のまっただ中にいる。その現実にはぶつかって、さぞやたじたじとなったことだろう。

私たちの逡巡は一年以上続いた。

結婚するって何なのか。三十五歳を過ぎて、いままら結婚するってどういうことなのか。お互いもう、「勢いで結婚しました」「若気の至りでした」、などと言えりような年齢ではないのだ。もちろん、世の中にはさまざまな夫婦、さまざまな家庭があつていい。ただ、一般論でなく私自身の問題となった時、具体的に答え



を迫られる問題がいくつもあった。仕事をどうするか。ジャンとの間に子どもは作るのか。人生、すべてを手に入れることなどできない。では、何を優先するのか。独身時代が長ければ長いほど、習慣を変えるのは勇気がある。ジャンは三十五年間、独身で通ってきた人だったからなおさらだ。

ジャンにとっては、ギヨームを自分の子どもとして育てていけるかという点が大問題であつたと思う。ギヨームはアダムに認知されていたから、父親はあくまでアダムであり、どんなにジャンが養父として日常の世話を焼き、経済的にめんどろを見、勉強を教えたり叱ったり慈しんだとしても、親としての法的な権利は一切ないのである。これほど損な役回りがあるうか。養父の権利というのは、いま急増中の「複合家族」の抱える最大の矛盾点であり、今後、法的な面で解決すべき問題が集中しているところだ。実際、改革の動きがすでにある。

そんな迷いの中、私もジャンも互いに口には出さないが、心に思い浮かべていたのがヨセフという人の生き方である。

ヨセフはマリアの婚約者だった。ところがマリアは神の子を宿してしまふ。聖書で名高い処女懐胎の話だ。いまやシングル・マザーと聞いて、びっくりする人は

少ないかもしれないが、これが二千年の昔の話である。当時、結婚していない女性が父親のわからない子を身ごもるということが、どれほどの恥さらしを意味したか、想像してみるのにはそれほど難しいことではないだろう。

しかし、マリアは天使のお告げを信じて、宿した子どもを引き受ける。ヨセフもその子どもを引き受ける。そして、自分の子どもとして、幼いイエスを育てるのだ。

ヨセフは貧しい大工だった。年もかなりいつていた。ヨセフがこつこつと働く姿を見、その傍らに寄り添って、イエスは育つ。しかし、聖書にヨセフについての



表記はごくわずかしかない。彼がイエスにこう言ったとか、こうしてやったとか、そうした具体的な表現は見当たらない。後世、聖人という冠を戴くことになり、人々から崇められてはいても、ひとりの人間としてヨセフがどう生きたのかという点になると、齒がゆくなるほど知る手だてがない。

ヨセフは徹底して陰の存在であった。子を宿したマリヤを守り、厩での出産に立ち合い、黙々と働き、イエスを育て上げ、キリスト受難のクライマックスではマリヤには大きなスポットライトが当てられるが、ヨセフの姿はない。すでにこの世を去っていたと見られる。私にとって、このヨセフという人物は実に神秘的である。ある意味では、キリストよりも神秘に溢れていると言ってもよい。彼の姿は父とは何かという問題を、静かに私たちに問いかけている。いつかこの人物像を深く掘り下げたいと思っている。

ジャンは、私との結婚を迷いながら何度ヨセフを思ったことだろう。ヨセフのように生きられるだろうか、何度自分に問いかけたことだろう。

マリヤという人物もおもしろい。聖母マリヤというと、ピエタ像（悲しみの聖母、十字架から降ろされたキリストを抱くマリヤ像）に代表される母性の象徴のように思われているが、どうしてどうして。この母性の実情はなかなか凄まじい。

なお幼さを頼のあたりに留めていた名もなき乙女マリヤは、どこから降って湧いたものかもわからぬ命をまるごと引き受ける。しかも、その子が神の子だという事実も引き受けた。神の子だということは、受難を引き受けるということである。子どもが全世界から罵倒され、石を投げられ、唾を吐きかけられ、裁かれ、最後には磔という残酷の極みの刑に処せられることを受け入れることである。親にとって、子どもに死なれること、ましてや殺されること以上に苦しいことがあるだろうか。それらすべてをマリヤは引き受けるのである。

——行きなさい。あなたは神を父とする子です。どこへなりとも神の声の命ずるままに行きなさい。

マリヤがどう言ったかは知らないが、彼女の態度はこうしたものだ。彼女が若く、無知、無学な女だったから、運命にもてあそばされて何の抵抗も見せなかった、ということとは別の次元の話であるようだ。

彼女の生き方が示す母性、または「母なるもの」としてのあり方は、一般に私たちが抱くほんわりとあたたかい母のイメージからは最も遠くにあるものだ。子どもを早い時点で手放し、みすみす敵の手に渡し、最終的には神の手に委ねる。イエスの使命を理解し、あえてそうするのである。生半可なことではない。

私はアダムとの争いの中で、マリヤの生き方に教え



マテウスのマリアと
ヤコブ

られるものがたくさんあった。裁判の間も、自分の姿を不当に裁かれるイエス・キリストの姿に重ねてみたりもした。キリストの愛は、とても生身の人間には到達できないような遠さだった。それでも、一生を通して、愛とは何かを私たちに示してくれた人が実際にいたということに、私は支えられた。

こうした聖書の話始めてしまつて戸惑うのは、信仰のある者となし者との間に横たわる深い溝に気づくからだ。私自身、信仰のない者であつたから、信仰のない人たちが聖書の話など聞いて、どのように反発を感じるか、どのようにその荒唐無稽を笑うかを、私は自分のこととして知っている。信仰を語るのは実に難しい。

ジャンが私に改宗を迫つたことは一度もない。結婚を考えるにあたつて、彼がそれを問題にしたことはなかった。「神探し」はあくまで私個人の問題だった。

聖書の物語に思索のきっかけを見つけ、その奥深さにそれまでの自分の価値体系を根本から揺るがされ、私は自分の問題と引き比べ、引き比べして、信仰への扉を少しずつ開いていった。キリスト信仰の源はあくまで聖書である。聖書にすべてがある。聖書を少しずつ発見しながら、私は目から鱗、世の中にこれほど壮大でこれほど奥の深い物語があつたのかと、天地がひ

つくり返るほど仰天した。実際、私の天地はひっくり返ったのである。改宗とはそういうことだ。

人間は常に新しい価値観を求め、発見し、表現してゆくことに生き甲斐を見出す存在であるから、もう語られ、語り尽くされた物語には見向きもしない。聖書の堅苦しい言葉をいまの時代に生きた言葉としてとらえ直すことは難しい。とても努力がいる。しかも科学万能の世紀以降、人間は不可知なるものを迷妄の世界に押しやって切り捨ててきた。しかし、それはひとつの怠慢ではなかったかと思う。神が存在することを誰も証明できないと言うが、存在しないことも証明されていない。

聖書には、神の存在が証明されている。ここで神学論争をしようというのではないから、この点に關してはこれ以上先へは進まないが、信仰を持っていなかった私にとって、聖書は証言というより何より、まず「物語」として立ち現れた。いまも私はこのアプローチでいいのだと思っている。

人間は物語る存在である。物語なしに生きることなどできない。物語は平板な日常とは別の次元の拡がりを、まったく意表を突く角度から私たちに示してくれる。しかし人は、いつのころからか、この別の次元の拡がりを覗いてみようと思えなくなった。欲や都合や利害関係の入れ子でしかない現実の地平、そこで生

きて死ぬのだからそれだけ見えていればいい、という風潮。加えて自由万能思想と快感至上主義の蔓延、すべてが楽なほうへ楽なほうへと流れてゆく。

自分は自由。これが好きであれが嫌い。価値基準はそれだけ。好きな人となら何をしてもいい。快感を得られるのなら、それでいい。自分でいよう。自分を大切にしよう。自分の自由には誰にも手を出させない。自分が気持ちよければいい。自分が不快なことはいや——自由万能思想および快感至上主義が生んだものは、おそろしく閉鎖的で排他的で、消費にしか喜びを見い出さない歪んだ社会ではなかったか。

もちろん、信仰を持ちさえすれば素晴らしい人間になれるというのだったら、世の中これほど簡単なことはない。信仰がある人が特別心映えが美しい人だというわけでもない。ジャンも長所より欠点が目立つような、ごく普通の人である。むしろ、私がジャンといっしょになることにしたのは、その彼の欠点ゆえだったと思う。

結婚する時、一番考えたのは、この人の欠点と一生つき合っていくことができるだろうか、という点だった。以前の私なら、この人はここが素晴らしいとか、ここが優れているという風に考えただろう。もちろん、ジャンの素晴らしいところはいくらでも挙げられるけ

れど、この人と生涯を終える覚悟があるかどうかを考える時、素晴らしい点など挙げつらって何になろう。明日にでも事故に遭って半身不随になるかもしれない。素晴らしい点など、運次第であつという間にかき消えるものである。

カトリックの結婚にあつては、伴侶は自分で選んだものというより、神が選んで引き合わせてくださったものと考ええる。こうした言い方が時代錯誤にしか映らない恋愛至上主義の時代に私は生まれ、育つた。

恋愛がインスタントラーマのように消費され、それでいいとされる世の中、ほしいものは何でも即座に手に入れようとする世の中にあつて、キリスト教の時間の流れはまさに時代錯誤かもしれない。おとなになつてから洗礼を受けるためには二年、結婚には半年以上の準備期間が必要である。準備期間の時間があればこそ、私は遅々とした歩みであつたが、瞑想や祈りの大切さ、奥深さを知るようになった。

決してひとりで行ってきたことではなかった。ジャンはもちろん、私の洗礼準備期間中、伴走者として付き添ってくれた人たち、結婚の準備期間中、対話の相手を引き受けてくれたヴェトナム出身の神父様など、さまざまな人たちがいてこそ、私は信仰の在り処を探り当てることができた。

神は愛するがゆえに、私たち人間をまったく自由な

存在として作つた。だから何も強制しない。判断するのは私たちだ。だが、私たちが判断する時には、何らかの基準がいる。愛にもお手本が必要なのだ。それがカトリックの場合、キリストが人間に示した愛であり、聖母マリアの愛なのである。「曾根崎心中」に代表されるような情念の世界を至高の世界とする日本人の情緒に、キリストの愛はいかになじみにくい。

私にはその下地があつた、とも言える。だから時が来て、すんなりと受け入れることができたのだろう。たまたま通つていた保育園がプロテスタントの保育園で、毎日のようにお祈りの言葉を唱えていた。聖書はしっかりと読んだことはないが、ばらばらとページをめくるのが好きだつた。幼少のころ、わけのわからない詩篇の語句を暗唱して勝手に想像の羽をはばたかせていた。大学はカトリック系の大学で、神父様たちが先生だつた。宗教学や倫理学というのもあつた。こうしたひとつひとつの要素が、私とキリストとの出会いの布石になつていたのだと思う。

宗教というのも教育である。人から人へ伝えられるものである。私が育つた限定つきの日本という国や時代や環境、そうしたすべては私がキリスト者になることを阻んでいたけれど、私はジャンと出会つて、思いがけず神の家の扉を押し、キリストを知る機会を得た。いまでは、心から「神の御心のままに」と唱えること

ができる。

神の御心のままに——自分の身を何かに委ねてしまふなんて、自立とか自由とかが最大の価値を持ち、だれもが「自分が自分」と叫ぶような時代に最もそぐわない行き方だろう。一種の自己放棄または思考停止としか受けとめられない。

私も信仰と無縁の時期は、なんて無責任な言葉だろうと思っていた。しかし委ねる相手を持たない人間はさびしいし、貧しい。身も心も委ねることができない相手があるというのは、絶対的な信頼感を心のうちに持っているということである。

私たちの結婚もそうした神への信頼感に支えられている。ふたりで向き合うばかりでなく、ジャンも私も独立して神との間に対話があるから、私たちは死の瞬間までイエスが示してくれた愛に一步でも近づこうと努力するだろう。

私はジャンという、欠点だらけの人間と結婚した。毎日何度、彼にうんざりしたり、カチンときたりするだろう。それは相手も同じこと。異質な人間にぶつかることで、私は愛するということの意味をいつそう深く理解してゆく。そうした意味では、アダムとの争いもまた、愛に近づき一步に大きく貢献してくれたと言える。

私が洗礼を受けたのは、二年前の復活祭だった。腕の中には生まれたばかりの赤ん坊、トマがいた。一週間後、パリのノートルダム寺院に、その年洗礼を受けたパリ地方の成人が一同に会し、リユスティジェ大司教のミサに与かった。満席の人であった。

その春洗礼を受けたばかりの者たちはみな白い長衣に身を包み、家族とは別に、中央の席にまどまって座らされた。私は乳児を抱えていたから、子どもの同席を許可された。ギヨームもどさくさに紛れてついて来た。案の定、ミサの間にトマがお腹を空かせて泣き出し、その泣き声は何ら臆することなくノートルダム寺院の荘厳な静寂の空間を震わせた。私は群衆のただ中で白い長衣を脱いで授乳しなくてはならなかった。

聖体拝受のため、壇上へ進んだ時、私はトマを両腕に抱きかかえ、脇にはギヨームが私の服の裾をしっかりつかんでついて来ていた。その時の写真はない。だが、私の目にはその時の光景がくっきりと焼きついてある。夫も、群衆の中から私たち三人の姿を目に焼きつけたことだろう。大司教はトマとギヨームの頭にも手を置き、祝福を授けられた。

神に愛を誓って神父や修道女になる人もいる。私は神に愛を誓って、この家族とやっていくことを決めた。洗礼も結婚と同様、決してゴールではなく、出発点だった。

(え・荒田ゆり子)

主婦が始めた レストラン

——主婦からの「脱皮」が決め手——

インタビュー・田中喜美子

「お料理の好きな主婦」というところから発足したレストラン「すみれ家」の田村さん。二十数年前取材したそのお店を再び訪れた。経験を積み、体験に鍛えられた田村さんは、厳しい熟年女性に変貌していた。

田中 食べ物に関するお仕事について、仕入とか、メニューとか、どういう心構えが必要かとか、今日はいろいろ教えていただきたいと思います。

まず発足部分からお話しいただけますか。

お始めになったのはいつでしたっけ。

田村 昭和五十二年からです。

田中 田村さんほど成功した方は他にありませんね、この道では、

田村 成功かどうかわかりませんが、とりあえず続いています。

田中 成功、成功。支店もお出しになって。

田村 支店は結果的には横浜女性フォーラムだけなんです。希望者にコンサルタントとしてオープンさせてあげるといことはしたのですけれど。

田中 それがすごいですね。

田村 最初は子どもが幼稚園や学校に入り、お母さんたちの井戸端会議から。毎日ただしゃべっているのではもったいないと。そのうち共同購入を始めました。

まだ生協のない頃で、北海道十勝平野の牛乳を関東に持ってこようという第一歩だ

ったんです。毎週一回集まって共同購入したものを分けるとき、またおしゃべりするのですけれど、ちょうど高崎山の猿が奇形になったという話があった頃でしてね、牛乳の次には鶏とかお肉とか無添加のものを、まとめて取ることから始まったんです。

近くの公民館で「子どもの食べ物は大丈夫か」というテーマの話聞いたのが一番大きなきっかけです。学校給食をよくしたいということで給食の問題に取り組んだのです。子どもは六年間で卒業しちゃいますし、行政はそんなに簡単に動かないし、二一世紀の子どもたちにきちんとした食べ物を残す母親としてのひとつの仕事かなと。

田中 なるほど。

田村 でも、おしゃべりから発進して、何も知らない人たちの集まりからスタートです。すぐトラブルが起きました。経済効果を生まないので、一緒に始めた人が降りるとか、その分の借金を私がしよって夫に肩代わりしてもらって返していくとか、さまざまな問題がありましたね。

田中 最初は共同購入できちんとした材料をということでお始めになったんですね。

お店を持とうとお思いになったのはいつ頃ですか。

「趣味から本業へ」のむずかしさ

田村 趣味の段階が二年間くらいあったんです。子どものおやつを実費を分担してみんなで作って売るといふ形もあつたんですけども、自分たちだけ食べててもしょうがないということがひとつと、やめるにはもったいないということでも本業になつてしまつたということがひとつですね。

本業がどんなに恐いものかを知らないでなつてしまつたんです。知っていたらやらないかもしれない。

田中 最初にお店を確保なさつたのは？

田村 まず自宅の一部を作業場にして、仕出しだけを予約制で始めました。六年ほどたつた頃、実家の父がボケまして、通常ですと主婦が仕事をやめて看るのが当たり前ですが、やめるとおしまいになつてしまうので、実家の二階を改造して、自宅で作つたお弁当を持つて行つて食べさせるといふ貸し席スタイルにしたんですね。

そのとき儲かつたんです。食べ物屋とセツトというのは儲かるんだと直感的に思つたのと、東京都の婦人の会の方たちがよく使つてくださった、女性のキャリアの人たちがとてもすてきだったので、働くことはいいなあと思つたのがきっかけになりました。それからずうつと自然体で。娘が二人いるんですけど、下の子が二十歳になるまでは子ども中心、それで徐々に仕事を伸ばしていって、子どもが二十歳になったとき、一〇〇パーセントになつたといふか。その子が今、三十二になります。

田中 お始めになつたとき、お子さんは何歳？

田村 六歳と四歳です。

田中 主婦として始めたものを本格的な仕事に切り換えるとき、関わっていた人がみんなそれぞれ考えていることが違つてから食い違いがでますよね。初めは無我夢中で方向性が違う人が一緒になつてやる。それがだんだんはつきりしてくるんですね。そういうところからスタートしたお一人として、後輩に参考になるようなお話をお願いします。



めたときに、お客様が今までと違ってきました。

親しい人たちは羨ましいなということと逆にこれまでと違う態度になる、そして営業的には、何だかよくわからないから、あんなところに頼むのはやめようとなる、そんなこともわからないまま始めたんです。

田村 仲間割れというか、最初の頃のトブルは結局売り上げが上がらなかったから。今までボランティア的にやっていたのが、さあスタートしますよといっても、周りの人が理解しないわけです。

主婦だから、子どもが大切だから、春休み夏休み冬休み取ります。その挙句、月水金しかしませんが。今まで頼まれたときにだけしていたから何曜日とか決まっていなかったんですけど、定款を決めてやり始

数字が上がらないと夫たちは、1たす1は2だという計算の上で仕事をしている人たちでしょう、そんなことならやめて、俺のワイシャツにアイロンかけろみたいなことになってしまふ。それでひとつの仲間割れです。

自分自身が成長してないのね。主婦の段階で。仕事というものが何なんだというのがわからないで、おいしく作ってお金もらって嬉しいわみたいな世界で。とりあえず

子どもがちゃんと育つまでは子どもが宝物、だから何かあったときにはやめてもいい、大きな投資をしないから大きな収入もないというところがずっとありましたね。

今までの、お茶を飲んでおしゃべりしていた時間がなくなつたのは寂しいなと当時は思いました。お茶を飲む時間も時給に計算されたらとんでもないことなので。でも当時は遊んでいましたね。遊んでいるものにお金を払っていたような気がします。

田中 なるほど。

田村 結論として、男性は男性同士、仕事をするのを長年培ってきていますが、女性には男性と仕事をするのは非常にしやすいんだけれども、女性と仕事をするときは、しにくいんですよ。女性同士がひとつのネックになって仕事には決してならなかった。必ずそれが邪魔になった。

ただ時期がよかった。まだあまり主婦が働いていなかったし、国際婦人年ということもあり、みんなが大事にしてくださった、育てようとしてくださったんですね。

これからやろうという人は、もしも「主婦が」ということを思っているとしたら、

主婦の中の仕事だけにしておいた方がいいです。

田中 本格的な仕事にしないで、ということですね。

「主婦の店」がダメになるわけ

田村 本格的な仕事と主婦の仕事とライフワークと、三つあると思うんです。そのどれもこれもというのじゃなくて、自分はこ

ういう仕事をしますということを決めた方がいい、それをきちんと伝えること、私の店はこのコンセプトでこうしたいと思っています。それを求める方に対してはウエルカムしますよというようにした方がいいです。普通のレストランとしてオープンしたら、みんなは今の常識の中で選ぶので、まず駄目になると思った方がいいです。

それに主婦というのはエラそうなんですよ。

田中 え、そうですか！

田村 「いらつしやいませ」というときも言葉だけで、その人からお金をもらうのに「ありがとう」っていいえ。未だに私もいいえ。相手にボロクソいわれども、その人がいい気分になるようにもてなすトレーニング

をしてないですよ。

主婦っていうのは、家の中でだいたいエバってますよ。ダンナよりエバってますよね。イヤなこといわれないで生きてきますから。サービス業というのは、相手を気持ちよくしてあげなきゃいけないので、自分は気持ちよくはなれないんです。それを意識しないといけないと思っています。未だに私は自分が頭(ず)が高いと思っています。

田中 でも自分でそう思いになるといのはすごいわよ。

田村 意識するんだけど頭が高いの、もう……ねえ、困っちゃいます。主婦の店が潰れるのはホスピタリティがないことも原因で潰れるんですよ。

田中 そうですか……。

田村 みんなエラそうですもの。私もいろいろ相談を受けたり、お付き合いしたりしています。そういう場にいると私も居心地いいんですよ。でも居心地いいごっこの人たちだけが集まってもダメ。そうじゃなくて、ちゃんとしたところにお店を構えたりすると、他の人も入ってこないし、「こ



田村匡世さん

「こ」じゃ儲からないですよ。

じゃあ、そのトレーニングはやっているうちにできるかという決してできないんですよ。何かしようと思つたら、若い時、せいぜい三十一、三歳くらいまでに、勉強したり体験したり、自分を変えたりする必要があると思います。

皆さんね、お料理ができたならそれでいいと思つてゐるんです。料理だけは毎日してるから上手になるんですよ。それ以外のものができないで駄目になっちゃう。

田中 それをアドバイスなさつても駄目？

田村 アドバイスしても間に合わない。子育てを終わつてからの人が多いから。ああ、またここでも潰れる人が始めてゐるのかなと思ふ。ご相談受ける度に。

田中 悲しいですね。

田村 悲しいですよ。自分が始めるんだから、できることと、したいことと、それに合わせて将来のことを考えたものをきつと作つて、誰かに見てもらつて、これでいけるじゃないかなればいいんですよ。料理も、みんな料理から入っちゃうのね。料理は一番あとでいいの。毎日やつてれば上手

になるんだから。本を見て、その通りにやつてればできるようになるものもあるし。

おいしくても今の飲食店は成り立たないんですよ。私たちが始めた頃は、ホカホカ亭もファミリーレストランもないときでしたけれど、今はいっぱいありますよね。私たちの年代の人がファミレスで、結構おいしいわと集まりしてるのよね。これじゃ食べに来てもらえないですよ。自分の家の延長のようでは駄目なんです。

だから私も思いきつてイメージチェンジのレストランを目ざして改装したんです。空間が大切なんですね。

田中 最初にお店をお持ちになったときはどういう形でした？

田村 さっき申しましたように、父が具合が悪くなつて、実家の二階で貸し席をしました。で、父が亡くなり、弟が転勤から戻つて来て、そこを明け渡すにあつて、台所の道具が余つたわけですよ。たかが二百万くらいだったんですけど、もったいなくてね。

倉庫会社に電話したら、毛皮は預かるけれど、台所道具は預かりませんって（笑）

いわれて、それでここを買うはめになったんです。

田中 でもいいときにお買いになったわよね。

田村 そうなんです。その後、土地の値段がグリーンと上がったので、ローンのときの担保にも活躍してくれましたのね。それも運がよかつたかなつて思つています。

賃貸にして払えなかつたらどうしようと思つて買つてしまつたんですけど、本当は賃貸の方がいいんです。払うためにがんばるから。そういうまちがいをたくさんしてきたので……。

田中 まちがいはいいえないと思うけど。

田村 遠回りもいっぱいしました。「やっぱり女は駄目ね」といわれたくないと思うことが支えになったことと、この仕事が大好きでした。

素人からの出発なので、プロの料理人が持つてない新分野の自然食料理を先駆け極めることを徹底したことが効をなして、シェフや板前さんに自然食料理を教えるに行くビジネスに繋がっていきました。

当初は自然食時代がもっと遠いと思つて

いたら、あれよあれよと有機栽培、オーガニック、無農薬栽培等が先行して、ソフトがあとから追いかける感じで、自然食を導入したい企業が出てきてコンサルタント業に発展しました。マーケティングもそのころから勉強しました。自然食に「運」がついたの

と実力をつけるのがとても面白いです。自然食の料理というとき、私が教えるに任たり、一緒に組んでフェアをしたりするんですけれど、やっぱり私と同じように料理の好きな料理人が今もかがやいていますね。ただ、かつこいいとか、金儲けしよう

とかいう料理人は、四十歳くらいになったら働く場所がなくなるようなそんな世界です。ちゃんと見つけて努力した人は、この道で生きていきます。

続く人はどんな人か

田中 いいものを皆さんに提供するのが好きだという、それがあるからずっと続けていける、そう思っているんですか。

田村 自分の作った料理に、食べる人が感動してお金を払ってくださるそのことに喜びのある人だと続きます。

何人もの人がうちで働いたのですが、主婦の場合、何はともあれ、一番のガンは夫。どの人も夫。

今、私の娘がまた夫ですよ。婿さん。今年一年、育児休暇させているんですけど。夫っていうのは家へ帰るといえるじゃないですか。他人だったらば、会わなければならない間、自分を保てますよね。コントロールできる。

でも毎日だと、夫のイヤな顔見るのもイヤだし、イヤなことわれるのもイヤだし。



やっぱり家の中を楽しく元気にしていても
らうためには、自分ができるからしちゃう、
しちゃうからできるだろうということにな
ってしまふ。うちの夫も含めてです。

本当に何か仕事をしようとするときには
は、自分のする仕事を、夫に限らず家族に
きちつと認めてもらう、でも、ここのこと
ろは自分がしますという棲み分けをしない
と、女性の場合は続かないと思います。そ
うでないとこつちやになつちやう。ご主人
が風邪をひいても休まなくちやならなくな
る。

子どもが病気で休むんならいいんです。
ご主人がというのは、もうおとななんだか
ら、ほつといてほしいと思うんです。

田中 要するに、主婦である自分をいつま
でも引きずっているんですね。

田村 主婦である自分を、主婦自身が結構
好きなんです。主婦であるときと、主婦
でないときとの分け方ができないと駄目で
すね。

仕事をしているときは仕事、主婦の延長
線上ではできません。私なんかも、夫は
「いいよ」といいながら、実は反対してい



るクソツタレダンナなんですよ。

田中 信じられないけど！

田村 昔からだから、まだいいんです。こ
れからの人はそんなんじゃないと通用しません。

田中 そうですよ。お宅でそれがなくな
ったのは、いつからですか。

田村 なくなりません。やつと今年からな
くしたんです。そういうことがあるんだつ
たら、私、いつでも別れますって。

田中 そう宣言したわけ？ 今年から？

田村 何回宣言しても駄目なんです。

田中 だれどお宅のダンナ様、とてもいい
方じゃない。

夫に書面で申し入れ

田村 いい人ですよ。いい人っていわれる
ダンナほど駄目かもしれない。

私なんかは専業主婦当たり前の時代に育
ってきたから、夫がそういうふうには、わか
つていても、頭の中ではわからないのはし
ようがないと思っているんです。だから夫
の定年までという線を引きました。去年が
ちようど定年だったんです。今ちよつと囁

託で行ってはいらるんですけれど。

定年後は彼の社会的面子もあまり関係ないので、そこでやらないともう一生やれないので、昨年、絶対しますって書面で。ハシコくささいって。

田中 そう?!

田村 それくらいやらないと。

料理の仕事というのは、料理の好きな家庭的なおさんが多いんですよ。料理は家庭の延長線上にあるじゃないですか。だから分けきりにくいんですよ。そんなに料理が上手なら両方できるだろう、俺のもできるだろうと思うわけですよ。ところが、感動を呼ぶ料理を作るためには、他のことを考えたらできないんです。

できないってことが実証されるまでに今までかかったんです。できるんじゃないかな、もしかしたらって、自分でもいろいろやりました。娘もやりました。でも娘もできないことがわかりました。仕事は「ついでに」ではできないんです。

だから仕事をしようと思ったら、コーヒーをいれるにしても、おいしくいれて少しでも高くお金をいただくということに絞る

のがいいし、もう一杯多くとって夫にあげるのではないということを目覚めて欲しいです。

地方での講演や料理講習をしているんですけど、仕事にしないといはあえていえないんです。本当にしたい人はするだろうし、その場合は力になります。

若い従業員を雇う時

田村 やっぱりの仕事は結婚とは両立しないかな。

田中 本当に?

田村 共働きで二人するんならいいですよ。そうじゃない若い夫婦の場合、週末彼が早く帰って来るので、女性の方も早く帰りがつたりとかね。そうすると仕事は雑になります。男性の方は、早く帰って来てほしいとは思ってないのかもしれないのに、女性が勝手に思い込んでるのかもしれない、ごはんを作ってあげたい、一緒に食べたいとかね。彼の方はもしかしたらちゃんと仕事をする方が先だよっててるのかもしれないのに。

専門の生命保険コンサルタントを派遣いたします。

(東京都内・近郊のみ)

お一人ではチョット心細い、
でも何人かいれば心強いあなた…
お友達・職場の仲間などなたでも結構です。
3、4人でも何人でも
あなたのお宅に、あなたの職場に、お集まりください。
生命保険の専門家が皆さんの疑問にお応えいたします。

くわしくは「わいふ」あて 電話で資料請求してください
わいふ指定代理店 東京海上火災保険株式会社 東京海上あんしん生命保険㈱

杉本保険事務所 杉本侑子 ☎03-3260-4771

田中 若い人でも未だにそうなんです
え。

田村 だから男性の従業員の方が、そう
いう意味で気をつかわないですんじやう。

最近、うちの店で働いているのは、四年
制の大学卒の人がほとんどです。調理師学
校卒は使いものにならないんです。

田中 本当？ こういつっちゃ失礼だけど、
頭がよくないから？

田村 調理師学校さえ出ればと思って、他
の勉強して来ないから。

田中 勉強がイヤで、調理師学校にでもと
いうような……。

田村 そういうのはもう、初めの電話だけ
で断わっちゃいます。調理師を目指して調
理師学校へ行ったという人しか採りませ
ん。それでも使いものになりません。

さらに新しい事業も

田村 新宿御苑に事務所がありまして、そ
こではコンサルティングをしています。初
めはレストランの方の比率が多くて、コン
サルティングの方の比率が少なかったので

ですが、最近はそちらの方の比率が多くて、
レストランの方が多少それにおんぶしてい
ます。

今は郵政省の仕事がほとんどで、調査研
究をしています。六年くらいになります。

郵政省のあるさと小包便の調査研究を頼
まれたのが最初なんです。地方の郵便局長
さんは、その地方のおいしい食べ物を抱え
ているんです。それをきちんと生産者に作
ってもらわないと、いいものがなくなつて
いつちゃうんですね。それを残したいとい
うことがあります。食材をなくしてほし
くないレストランの願いです。

田中 おもしろかったですよ。

田村 おもしろかったですよ。JRのレ
ストランの立ち上げもしました。そのとき
は二年間ここを閉めて、みんなを出向させ
て、その間にここをリニューアルしたんで
す。そんなふうになつてゐるかを充分学ばせ
てもらいました。

アメリカにCIAという料理大学、シェ
フになる大学があるんですが、その大学の
アメリカ人の女性シェフのイヴと親しくお

つきあいをしていて、泊まりあったり、レ
ジビを交換したりもしています。

今世紀は、世界を舞台にしたい夢へ向か
うことにして、昨年はいろいろ整理をしま
した。

田中 すごくですね。

田村 それは娘が継いだというか、娘もこ
の仕事に入つたからかもしれません。

皆さんもやりだしたら、ぜひ二代目のこ
とも考えてやってほしいと思います。皆さ
ん、二代目がいらないから、やめちゃつてい
るんです。次の世代の人が喜ぶようにもつ
ていかないと。あるいは喜ばなくてもいい
から足が抜けないようにしておくとか……
(笑)。足が抜けないからって娘にいわれま
すけどね。孫が女の子なので、もしかした
らなんて、あの子にだけおいしいものを食
べさせたりするんですけどね。

食べ物屋を始めるなら

田中 すみれ家さん独特の歩みですから、
普通のレストランをお作りになつた方と経
過が全然違いますね。その意味で「わい

ふ」の読者に役に立つと思いますが、一般論として、食べ物屋を始めるときに、何が必要か、場所もあるし、どういふものをどういふふうに使わせるのかとか、どれだけ仕入れたらいいとか、いわゆる基本的なノウハウを、最後にお願います。

田村 最初は、自分がいくら収入がほしいのかです。この商売は二日で家賃分の売り上げがなきゃいけないんです。どんなに大

変でも三日で上がらなきゃいけないんです。頭金もあれば礼金もあつて、それを月々で割つてみて成り立つことが一番大事。成り立つためには、自分の腕で一体いくらの料理を出せるかを考えて場所を捜さなければなりません。

立地のいいところで、しかも安い家賃で、改装費もかからないようなところを捜さなければならぬ。



改装費は貸してもらえただけで、三年で返せなきゃいけない。この地域はオフイス街か住宅街か、それに合わせた価格設定と好みを調査しなければなりません。いっぱい食べ歩いてね。

競争するにも、その地域にないものを選ぶ必要があります。

次に仕入れです。冷凍のものもあればチルドのものもあれば、添加物のないものもあれば添加物のあるものもあり、ありとあらゆるものがあるので心配いりません。ただ、騙されないように業者とつきあうことがとても大事です。

田中 騙されるっていうのはどんな？

田村 余つたものを安くするといわれて使ったとき。それがお客さんに喜ばれるとは限らないわけです。食材を見る目がないといけないんです。

いくつかの業者を決めて取り引きし、いつでも責任をとってもらえるようにしておくことが必要です。少しでも安いものを買って、あちこちのスーパーで買ったりしていると、何かのときに中毒を起こしたりするので、食べ物屋としては決まったところ

ろから買うのが比較的安心です。

田中 どれくらいの方が食べに来てくれるかというのは、いろいろ調査してオープンしたとしても、見込みがつきませんか。

田村 つきません。だから自分のファン作りをするんです。他のことで名前を売っておくとかね。まあ、三年辛抱する気があるんだったら、それなりに日々のお客さんのクチコミで増えていきます。

人の嫌がること、たとえば一個からでも配達しますというようなことをやるのはいいのだけれど、今度は人件費に食われちゃうから意味がない。競争は激しいから、これだけで食べていくのは厳しいですね。

田中 オープンしたとき、自分を売り込んでおくっておっしゃったけど、田村さんの場合、地域に根を張っていらつしやったから、いろんなお友だちもあつたと思えますが、普通はないですよ。

田村 私もあるとはいえないですよ。友だちはただで食べさせてもらえるとと思っているから、あんまり歓迎してはいけないのね。ごっこになっちゃう。他人の方がいい。

新しく始める主婦の人にいうんです。た

とえば隣の人に煮物を多く作ったからどうぞってあげなさい、そうして今度一緒に作ってって頼まれたときに、今度はお金をもらいなさいって。自分が作ったものはおいしいんだよというのを伝える、そのために自分の家でお料理教室をしながらファン作りをしていくとかね。そういうことをしたあとにオープンした方がいい。

大がかりにプロジェクト組んでするんだつたら、立地のいいところで資本をかけてやればいいんだけど、千五百万以下でするとしたら至難の業だから覚悟した方がいい。

でもお金をかけても続くとは限りません。

田中 私の知り合いの方が今度、自然食……じゃなくて養生食の店を出すんだってらしたけど。

田村 養生食は特殊なものだから、そういう人を対象に絞られるので、また別ですよ。それに技術と知識がなければなりません。

田中 いい目のつけどころされたなと思いましたがね。糖尿病の予備軍みたいな人がサ

ラリーマンにはいっぱいいるから、オフィス街するのはちよつといいかね。

田村 うちなんかもそれをやってるんですけど、食べる側は、男性の場合だと氣遣われるのが嫌で、そういうふうには表向きに出したときには来ないんです。おばあさんとおじいさんばかりになっちゃう。

でも私は心臓内科のお医者さんと組んで、今度「食べ物と医療」という講演をするんですけれど、そのセットを二一世紀にはしますよと決めているんです。

だからメニューも今月は「血液サラサラ」とか組んでいるんです。お客様はあまり嬉しくないの。うちの長いお客様でも嫌だなと思っている人もいます。でも私はしずつて宣言してるんです。

田中 そうですか。よく市場調査なさっているんですね。

田村 ええ、それはやっています。

田中 いろいろきちんとやっていらして危なげがないですね。充実したお話をありがとうございます。

(え・渡辺美咲)

秘 事



河野多恵子著
新潮社
本体1800円+税

オビに「夫婦というへかくも素晴らしき日々」とキャッチコピーがある。「愛」の物語として、売れている長編小説だそう。

しかし河野多恵子ともあろうものが、「愛」をただ単純に書くはずがない。一筋縄ではいかない作家なのだから。

ここに描かれたエリートサラリーマン夫妻の愛、その生き方、その精神はすべて「常識的」、「体制的」であるに尽き、映画のセットのように薄っぺらでチャチである。デイズニールンド式の人生というか。それには、現代日本の精神性の希薄さがそのまま投影されている。深く鋭く彼らの心の空虚さを描いて、成功した傑作である。(W)

脳死移植はどこへ行く



向井承子著
晶文社
本体1800円+税

生老病死の問題を、主として医療の分野から扱ってきた著者が「脳死体からの臓器移植」という大問題を、医療現場の動き、市民運動と政治・行政の対応、脳死移植が盛大に行われているアメリカでの取材などを積み重ねて、複眼的に論じている力作。

この一冊は、フリーランスライターとしてするどい感性と独特の深い視点をもつ著者が、丹念な取材に加えて、臓器移植をはじめ、科学技術万能の未来に何が待ち構えているのかを問いつける文明論としてのすごみがある。科学技術と人間の未来について真剣に考えている人には、見逃すことのできない必読の書としてすすめたい。(T)

お手伝いする子は心が育つ



坂本洲子著
PHP研究所
本体1200円+税

幼児期から塾がよいをさせられ、学齢期になれば「あんたは勉強していいのよ」とばかり言われている日本の子どもたち。家事自体少なくなっている生活のなかで「お手伝い」は見失われがちですが、子どもに家事のお手伝いをしこむことが、人間としての成長にとってどんなに大切であるか、しかも「楽しい」子育てにつながるかを、具体的に教えてくれる一冊です。ただお手伝いを好きにさせるコツはなかなか難しい。初めてお手伝いをさせるとき、してくれたとき、どんな言葉でねぎらうかなど、親にはなかなかわからないコツがこの本には満載されています。(K)

ブ

ツ

ク

情

報

あ
な
た
へ

ス
マ
ッ
シ
ュ

『十年越しの恋』の あなたへ贈る言葉

千葉県市川市 流縞さよ (46歳)

あなたの心をしめているモノは、
「怨念」とみました。Sさんからあな
たへの愛、あなたからSさんへの愛、
残念ながらみじんも感じられません。
Sさんを追うのは、もうやめたほう
がいい。

あなたが言う、「これ以上想える男
(女)はもう死ぬまで現れないだろう」

これくらいのことを言つてのける
男や女は、うじゃうじゃいます。あ
なただけが得た「幸せなコト」では
ありません。夫となった男以外との
一世一代の恋。私も経験者です。も
ちろん結婚前の話です。

あなたは、自分がこのまま「老い
さらばえていく」のがコワイのでし
よ? しくじった恋にしがみついて
さえば、『若いまま』でいられる。
……と思つているのですね、きつと。
たとえあなたが現在三十歳であらう
と四十歳であらうとも……。Sさん
を自分の人生から断ち切ることは、

自分の老いを認めることになる。：
…違いますか。

西館好子さんがエッセーの中で、
こんなことを言っています。昔の男
に再会したら、

「私のこと好きだった?」

そして彼が答えるより一瞬早く、

「私はアナタのこと、とても好きだ
った。じゃ、元気でね」

とサラリと言つてのけてみたいもの。

子宮をとる

千葉県市川市 犬伏裕子

子宮筋腫の摘出手術を受け、すつ
かり健康体になられた鈴木由美子さ
ん、よかったですね。私も六年前に
同様の体験をしましたので「身も心
も、軽くなったような爽快感」とい
うお気持ちに実に共感できます。

病状にもよるのでしょうが、子宮
を残せる手術は、子供をこれから生

もうと思っていたる女性を本当の意味で救うものですね。

私の場合は、むしろ望んで子宮を全摘出しました。その理由はただひとつ、月経から解放されたいがため。ひどい腹痛と大量の出血にはもううんざりでした。私にとって子宮摘出手術は「渡りに舟」だったかもしれせん。

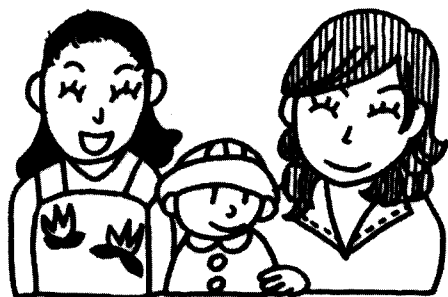
あれから六年、月経の存在を忘れていられることの、まさに爽快感を満喫しています。思い出すのは高校生の娘のためにナプキンを買う時ぐらい。本当にラッキー、と思っていた私でしたが、鈴木さんが「子宮は残せた、という嬉しさ、幸福感」と書いていらつしやるのを読み、あつ、と虚をつかれた感じがしました。

やはり女にとって子宮は永遠のもの？ 月経がなくなつて万歳！なんて言つてる私は変わり者？ というわけでこの文章を投稿しようと思ひ立つたのでした。

託児を満喫

東京都世田谷区 後藤 晶 (42歳)

二八八号に、公共施設での託児サービスと、母親の勉強会についての、新鮮な感動がつづられていた。私も、今十一歳の子どもの入園前には、いろいろなところに連れ歩いて預け、



母子ともに有意義な時間を過ごした。杜宅暮らしなので、同じような年ごろの友達はたくさんいるのだが、ただ公園で毎日世間話では、つまらなかつた。区の広報には、公開講座と無料の託児が、ずらつと並んでいる。片っ端から参加した。「現代国際政治」「子どもの絵本」「基本的人権」「女性の生き方」……、少しでも興味を引くテーマには応募して、一流の講師の方々のお話を聞いた。「わいふ」を購読するようになったのも、わいふ出身ライターの方に何度か講師としてお目にかかつたからだ。

もちろん子どもは最初不安そうだったし、会場にいても我が子の泣き声はつきり分かつたこともあつた。しかし、なぜか私は平穏な気持ちで、昔はあんなに眠気に襲われたのが不思議なほど、講義に集中できた。まわりには居眠りする定年後のおじさまが多かつたり、回を追うごとに欠席が増えるようなこともあつたが、私はせっせとバスを乗り継ぎ、雨の

日はおんぶして、人には「それが何の役に立つの」と言われることもある話を聞きに行った。

託児がうちの子一人だけということもあった。場所も遊具も用意されているし、保育の方に悪くて、ますます休めない。近くの児童館に連れて行って遊んでくれたり、会場が違っても同じ保育員にお世話になったりと、今でも街で会うとなつかしいし、子どももうっすら覚えていよう。

週に三日くらい、そんなお出かけをしていたこともあるが、子どもが幼稚園に入ると、なぜか熱意がなくなってしまった。身軽に動けるし、幼稚園や上の子の小学校の用事が増えてきたのだろう。

人にはそれぞれの嗜好があるので、託児してエステでも、託児して勉強会でも、公園でおしゃべりでも、何でもいいんじゃないかな。自分に無理しないで、他人にも無理に合わせないでいいと思う。

二八八号「経済的自立に迷う」の

井上曉子様へ

東京都三鷹市 林 夏子（46歳）

とにかく自分を変えてみたいという動機で、昨年四月から一年間、「いふ」に投稿することを自分に課してみた。二か月に一度とはいえ没が続くとめげそうな時もあった。この投稿でちょうど六回、一年である。

二八八号で私の書いたものへの反応の文章をみつけた。私の書いたものを読んで、なんらかの刺激を受け、本屋さんに走った方がいらしたことに感激すると同時に、書くことの責任も感じた。井上さんおよび読者の方に、私のアバウトな性格まるだしの情報（書名が「やわらかい脳の作り方」ではなく「やわらかな……」を与えてしまったことなど反省しきりだ。

さて、ご指摘の「家庭の中で、夫、

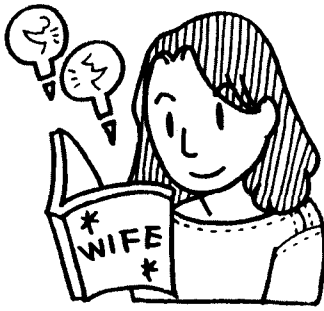
妻、子供全部が一度に輝くことは不可能だ。……」というところだが、これは吉成真由美さんの「遅咲きのすすめ カラフルライフ」（文化出版局）に知り合いの中国人の言葉として出てくる。

「家族の成功には三つの可能性があります。一つ目は夫の成功。二つ目は妻の成功。三つ目は子供の成功。このいずれかでも成し遂げられれば、その家族はとても順調にいったことになります。もし二つがうまくいけば、これは大成功。しかし三つうまくいくのは不可能です。」というものだ。

この文が、「やわらかな脳の……」に書かれているかのような誤解をうけたことや、吉成さんご自身のご意見として書かれているような表現をしてしまったことは、私のつたなさであり、深く反省している。

だれかが家族の「受け皿」になるということ、ふきこぼれを受け止めてくれる人がいなければ、家族は成

り立たないという、この中国人の大学教授夫人の言葉を、吉成さんは感慨深く受け止められたようだ。「因果はめぐるといふか……。専業主婦の子供は、母親の世話を一身に受けて立派に育つ。そうなると、今度は自立して、母親のような専業主婦にはならないぞと宣言する。そして子供を他人に預けながらフルタイムでバリバリ仕事をする。するとその子供は、いつもなんとなく寂しい思いをしているから、自分は家において温か



い家庭を築こうと思うようになる」

なんとなくこれはうまくてきてますねえという結びになるのだが……。

井上さんや、私など大勢の女性は、専業主婦であるか否かに拘わらず、子育てをすることで日々悩んだり、苦しんだりしているのだらう。この意見についてここで色々言うつもりはない。アメリカですら専業主婦の存在意義を認める人がいる事実は、男も女もフルタイムでバリバリ働いて、子育てもやるのが理想であり、そうでないと肩身が狭いような思いでいた私には妙に新鮮に映ったのだ。人には持つて生まれた力があって、それは個人差がある。ひとつの尺度では測れない。自分の価値観をしつかり持つて、自分らしい生き方を探していきたいと思います。

「わいふ」を通して、見ず知らずの方と意見を交換しあえたことは私にとって新しい体験だった。

(え・イシノフミ)

お友達に「わいふ」をおすすめください

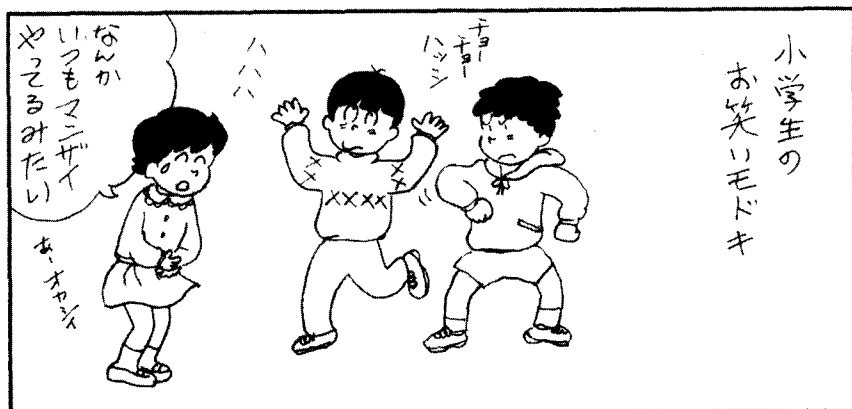
新しい定期購読者をご紹介くださった方には、次のように購読期間を延長させていただきます。

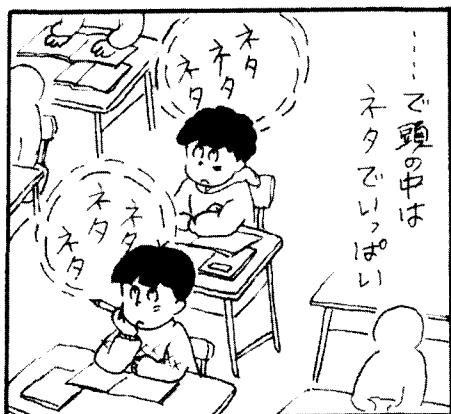
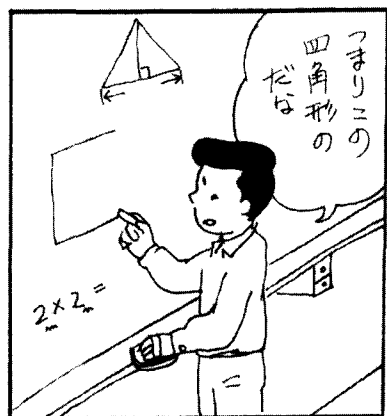
●定期購読者をお一人ご紹介くださるごとに誌代プラス送料とも一号延長。
「わいふ」年間分をプレゼントにお使いください

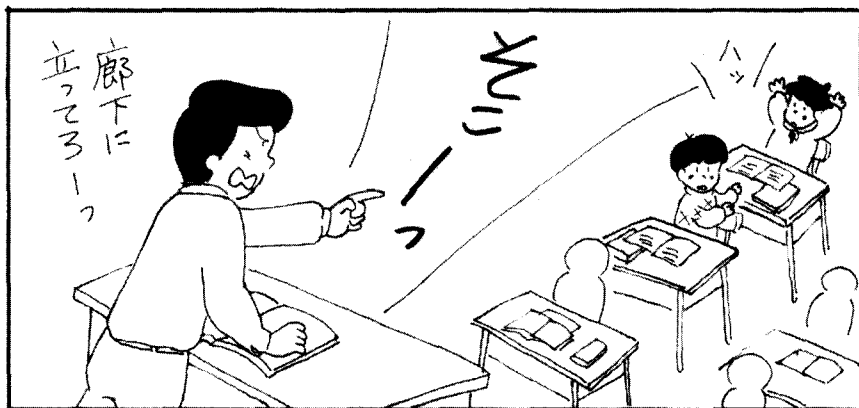
●御結婚、赤ちゃん誕生のお祝い、遠方のお友達とのコミュニケーションにどうぞ。お申し込みいただければ、新読者に、送り主のお名前とプレゼントのおしらせを同封の上、一年分、計六回送本いたします。

●その場合も定期購読者のご紹介の場合と同様に、お一人につき一号分延長させていただきます。

●また十冊以上ご購入くだされば割引がござります。









FREE TALK

フリートーク

不安だった日々

東京都武蔵村山市 大沢陽子

十二月四日、静的視野検査の結果を聞きに病院へ行った。「視野に欠けているところがある」と、視神経が圧迫されているので、これ以上悪くならないように眼圧を下げる薬をつけることにしましょう」と言われ、レスキュラという薬を処方された。緑内障なのだそう。

翌日からその目薬をつけた。薬が目にしみた。右目が赤くなった。頭も痛くなった。猛烈に肩も凝った。翌日は薬をつけなかった。次の日もつけなかった。でも、自分勝手につけたりつけなかったりするのはいくなくないと思ひ、またつけ始めた。一日に一回。本当は二回なんだけど、怖くて一回しかつけられない。

いつか見えなくなってしまうと思うと不安で仕方がない。することはいろいろあるのに手につかない。何をしていてもこんなことをしていいのかと思う。明け方はとくに不安がつつて、暗く淋しい気持ちになる。

父が白内障で入院したとき、隣のベッドの人が緑内障だった。痛い痛いと苦しんでいてとうとう目玉をくりぬくことになってしまった。それから五十年、緑内障は目が痛くなって、目が見えなくなる怖い病気と思ってきた。

友人の松岡さんが「ここかここがすごい病院だつていうから行ってみて。今行っているところは普通の病院よ。もっといい病院で見てもらったほうがいい。目は大事よ」と言う。どこも遠い。「一か月に一回でいいんだから、大丈夫、通える」と松岡さん言う。できれば病院を変わりたくないとか、遠いとか大変とか思つてふんざりがつかない。

十二月十三日、「環境を考える市民の会」の定例会があった。例会は一月に一回。七・八人が集まって、勉強したり、話し合つたりしている。

「目が赤い。両方とも真っ赤」私を見て、林さんが言った。鏡を見ると、ほんとうに赤かった。「薬をつけたせいな」とつぶやいたら、「すぐ医者に行ったほうがいい。薬害は怖い。Oさんに行けば」と藤沢さん。「あそこは行かない」「なんで。近いじゃない。近いが一番よ」「でも行かない」

前に目の中に血のすじが見えたとき、光凝固しようと言われた。近眼のひどい人が年をとるとよくこうなるらしい。そのとき、もっと大きな病院に行きたくて、「友人が眼医者をしているので」などと言って、他へ行ってしまった。それから、そこへは行っていない。

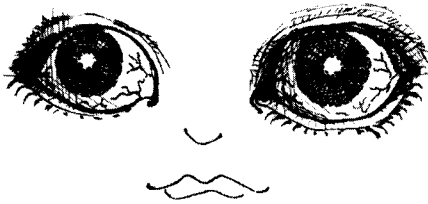
「大丈夫。そんなこと覚えていない。早く行ったほうがいい」と藤沢さん。

目がジリジリする。目の奥や頭の後ろがぎゅつとしばられているような感じがする。思い切って、かかっている病院に電話をした。

「今日の外来は終わったので、薬はやめて、翌日病院に来て下さい」と言

われた。

翌日病院に行った。いつもの先生ではなかった。左の目はもう赤くなかった。「右目が赤いのは、毛細血管が切れたために出血したんで、薬のせいではありません。……薬は必要なので、



つけて下さい。来週の水曜日に来て下さい」と言われた。水曜日は私の受け持ちの先生のいらつしやる日だ。この日は一回、翌日からは朝と晩、ちゃんと一日に二回目薬をつけるようにした。翌週の水曜日、また病院に行った。薬は変わらなかった。

不安だ。目薬をつけなかった時は、目のことを意識しなかった。今は絶えず気になる。目薬が合っていないのではないかと不安で仕方がない。

見ること、聞くこと、話すことの中で、一番失いたくないのは、見ることだ。目が見えれば読むことも書くこともできる。読みたいものはたくさんある。手紙、本、わいふ、ファミ・ポリテイク、同窓の友人が発行責任者の「ACT」、高尾山を守る会、三番瀬を守る会、地球の仲間たち、地球生物会議、自然に学ぶ会など、自然や動物を守る会の会報。読みたいものが読みたいた時に読めるって、ほんとうに幸せなことだ。

一月二日、目薬をさしたとたんに、

目が真っ赤になった。つけるたびに目にしみるし、やっぱりこの薬は合わない。

一時間くらいで行ける病院に「緑内障の専門の先生はいらっしゃいますか。初診の日はいつですか」というふうに聞きたいけど、どこの病院で聞けばいいのかわからない。

一月九日、近くの診療所に誕生月検診の結果を聞きに行った時、「緑内障の専門の先生に見ていただきたいんですけど」と聞いた。「保健所に聞いてみるといいですよ。いろいろ情報を持ってますから」と教えてくれた。保健所とは思いつかなかった。

さっそく電話をして聞いた。「千代田区のように眼科専門の病院があるそうですね」と井上眼科病院を教えてください。「緑内障は今難しい病気ではなくになりました。眼科ならどこでもたいてい大丈夫です」とも言った。ふっと心が軽くなった。

井上眼科病院は、松岡さんがすすめてくれた所だ。片道二時間、近くかかり

そうだけど、そこに行ってみようと決めた。翌日さっそく出かけた。

そこは眼科だけの大きな病院だった。第九診察室まであって、それぞれ専門の先生が受け持つ、というふうに決まっているようだ。

薬がキサラタンになった。これは目にしみないし一日に一回でいい。

心配な時は別の病院で見てもらうのはいいことだ。今、眼圧は十三。薬をつけていれば悪くなることはなさそう。不安が消え、気持ち落ち着いてきた。この病院へ行くようにと何度も背中を押してくれた松岡さんのお陰だ。持つべきものは友としみじみ思う。

母の戒名

川崎市中原区 島 初美（58歳）

二、三日前から意識不明だった母が、とうとう真夜中の二時近くに亡くなった。大きないびきが、ふと止まったと

思ったら、お医者さんや看護婦さんが、あわてて入って来て、母の死を告げられた。心電図や血圧などを知らせる機械類は、病室ではなく、センターに集中していたから、周りにいた家族たちは気が付かなかった。もともと血圧六十を記録したころから皆覚悟はしていたが。

数年前から胃の調子が悪いといつて、胃の検査ばかりしていたが、原因が胆石とわかった時には、少し手遅れのようだった。手術してみたら胆のうが悪化していて、その周囲の臓器に転移した後だったらしかった。夏の間は元気でいたのに、十月になると悪くなっていった。

悲しみに浸っている暇などなく、すぐ病院から、自宅に帰された。ちょうど前日、母の世話をしていた次弟が、近所の葬儀屋さんに相談していたばかりだったので、電話したら、すぐ来てくれた。

その日一日、私はなれない実家でおろおろと過ごした。しかし一方では、

てきばきと、祭壇が作られ、遺体が安置され花が飾られ、母の遺影もでき、葬儀も明日と決まった。

夕方葬儀屋さんが、一枚の紙を持ってきて来て、書いてくれと言う。何かと思ったら、母の戒名を考える参考にするからということで、生年月日と名前と趣味、好きだったもの、そして、母の人柄に当てはまる言葉全部に、丸をつけるというものだった。

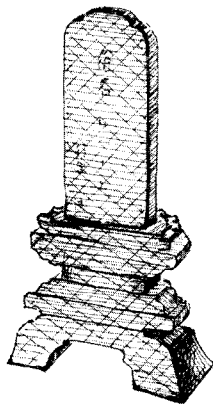
温厚、誠実、円満、心優しい、親切、清廉潔白、情け深い、つつしみ深い、竹を割ったような人、勤勉、仕事いぢず、努力家、家庭的、子煩悩、真面目、意志堅固、勝ち気、一本気、厳格、献身的、責任感、明瞭、清純、知性豊か、素直、寛容など。

第二人は、あちこち電話したり、打ち合わせ等に、飛び回っていて忙しうなので、手伝いに来ていた娘と私と、次弟の嫁さんと三人で、どれどれどれとのぞき込んだ。父のときにはなかったことなので、珍しがってあれこれと丸をつけた。そしてその結果に、はっ

としたのだった。

竹を割ったような人、努力家、意志堅固、勝ち気、責任感、厳格と、母の性格がそこに出現していたからだ。女らしい言葉は一つも選ばれず、私たちは悪いことをしたみたいで焦って、いくつか入れ替えたりしたが、どんな戒名が付くかと、とても気になった。

今でもこの時のことは、私たち三人の共通の思い出になっている。



父も母も昔風な人達で、子供に対する愛情を、大っぴらに表現するほうではなかった。

むしろ少し距離をおいて接していた。私は父や母に子供のころ、抱き上げてもらったり、手をつないで歩いたりというスキンシップ的な記憶はない。しかも二人とも頭がよく、人の心の中は察しがよいので、子供ながら、付き合いくかつた。そのせいか、親子関係は、淡々としていた。けれどもじいんとくる思い出はある。結婚式をあげ、新婚旅行に出かける私を駅ホームで見送るとき、汽車がガタンと動き出したとたん、母の顔がくしゃと歪んだのを、私は見てしまった。普段とは違う母の気持ちに気が付いて、私は戸惑った。

父が亡くなった後、旅行好きな母に誘われて、箱根や伊豆、熱海、京都と、それぞれ二回は行った。最初の手術をした後、とても元気になったので、下の弟と三人でイタリアまでも行って来た。七十六歳のときだった。

とても喜んでいたが、それが無理だったのか、その後体調を崩し、そして入院と手術を繰り返し、七十九歳で亡くなった。

心配していた母の戒名には、寶という字が付いた。さすがお寺だ、母にふさわしい立派な名前だと感心し、ほっとした。

私は母に似ているようだ。私にはどんな戒名が付くのだろうか。

犬の幸福、猫の不幸

長崎県長崎市 中田慶子

昨年の五月、私たち夫婦は東京から長崎に引越した。その時点では、東京の家に娘二人と犬猫が残る予定だったので、特に問題はないはずだった。しかし娘たちが治安上の理由から駅近くのアパートへ引越すことになって、はて困ったのが五歳の柴犬ヒメ、八歳の茶トラ猫マロの行き先である。

私たちが長崎で借りているマンションはペット絶対禁止の張り紙が大きく貼ってあり、職務熱心な管理人さんの厳しい目が常時光っている。結局長崎郊外に住む夫の弟夫婦に泣きついて、ヒメを引き取ってもらうことにした。猫のマロは私の実家に頼み込んでしおしお置いてもらえることになった（父の介護が私たちの引越しの理由の一つだから母も折れた）。

九月はじめ、まず犬の引越しのために上京。檻に入れ電車とバスを乗り継いで羽田空港へ運ぶ。空港のカウンターで計量してもらい、檻の重さと犬の体重を足してキロ当たり五五〇円を支払う。檻を借りる場合は別料金がかかる。ヒメの場合は合計十二キロで六六〇〇円を支払った。過保護に育てすぎたせいか、羽田行きのバスに乗っている間もクウン、クウンとなきつづけ、檻が荷物のベルトコンベヤーで運ばれていった時はこっちまで不安になった。一時間四〇分後、長崎空港で無事檻を受け取ってほっとしたが、貨物室

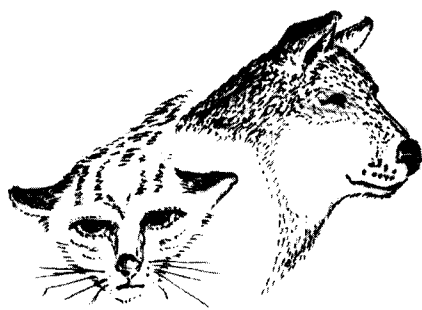
の中でエンジンの轟音におびえたのか、おしとやかなヒメは、見事に脱糞あそばして、空港の身体障害者用トイレを借りて（広いので）檻の掃除などするハメになった。

弟の家へ着いて、さぞ別れをつらがるだろうと思いきや、首をかしげて見送っただけで、けろっと新しい家族（第一家は夫婦と子供三人）になじんだ。東京の家では、留守がちの家族にあまり構ってもらえなかった上、庭に放し飼いで一人ぼっちの時間が長かったが、こちらでは茶の間に専用座布団をもらって、一日中誰かと一緒だし、食事のときは大に甘い弟からチーズや牛肉の切れ端をもらうという待遇のよさ。毎日の散歩も山道を存分に一時間ほど歩き回っている。「おいしいものと散歩があれば、私はハッピーなのよ」といわんばかりに悩みのないヒメだ。「なんと単純なやつ！ 恩知らずめ」と少々心外だが、いつまでも私たちに恋々とされては、弟たちに気の毒で、ほっとする気持ちもある。そういうわ

けで犬とはなんと単純かつハッピーな生き物かと思う。

猫のマロの場合はそう単純ではなかった。猫のために九月末二回目の上京をし、猫入りバスケット、使い慣れたトイレ、トイレにしくオムツシート、水入れと餌入れ、食べなれた餌も一袋と、山のような荷物を引きずって羽田へ向かう。またも航空会社のカウンタ―で今回は五五〇〇円を払って預けたあとは、気難しいマロのことゆえ脱糞どころかオシッコびしょびしょかもと覚悟した。長崎空港で受けとると、意外や意外、目をらんらんと光らせてじつと籠の中でうずくまっているだけである。ほっとしたのもつかの間で、実家へ到着して籠から出しても、餌も食べず、水も飲まず、じつとうずくまって動かない。押し入れの隅にもぐりこんで、ひたすら固まったままだ。まる二日間、飲まず食わずで排泄もせず。猫とはなんと頑固で変化を受け入れない動物なのかとあきれる。私が実家に泊まりこんで世話をし、ようやく慣れ

て餌を食べ、トイレを覚え、実家の家の中を恐る恐る探検するようになるのに一週間かかった。母に餌もねだるようになり、出窓の見晴らしのよいコー



日の夜中からいないのよ。きつと夜中のヘルパーさん（巡回で父のトイレ介助にきている）が来た時に、ドアから出て行つたみたい。きつと、あんたに捨てられたと思つて探しにいったのよ」

なんということ。きつとマロは、外に出て少し探しさえしたら、あの東京の家があると思つたのではないだろうか。何食わぬ顔で脱出のチャンスを狙つていたのか、単に、外へ出たら方角が分からなくなつたのか。

ともかく、十月一日のその日から搜索を開始した。実家は繁華街で、周囲はビルばかり。今回初めて気がついたが、ビルとビルの間には数十センチの隙間がたくさんあって、ビルの裏はまるで迷路のようにつながっている。これではどこまでいったかわからない。近所を何日も名前を呼びながら歩き回り、ポスターを作つて貼り回り、地方新聞にも広告を出した（一行千円、五行で五千円だった）が反応なし。掻き消えたように消息がない。近所のビザ

シヨップのお兄さんが、「崇福寺で夜中に猫の会議をとるよ」と教えてくれて、夜中に夫と懷中電灯片手に出かけたもした（残念ながら猫の会議には出会えなかった）。

そんなこんなで、毎日猫の搜索をして歩いて一週間たった日、近所にいた私を夫が焦って呼びに来た。「マロみたいな猫を見つけた。部屋に閉じ込めておいたから見てくれ」という。すつとんで実家に帰ると、父の介護用ベッドの下に、確かに大型でしっぽの長い茶トラの猫がうずくまっている。しかし、ぎょろりとこちらを見た顔はマロとは似ても似つかない。「ちがうよ、これマロじゃないよ!」。聞けばかなり遠くの高台で、犬小屋の座布団に寝ていた猫だそうである。首輪もしている（マロはピンクの首輪だったが、この猫は青である）。「マロが他人の犬小屋で寝るわけじゃないの」。しかし、突然昼寝の最中を誘拐・拉致された猫は、怒り狂って部屋の中をムササビのように飛び回り、花瓶や、電気ス

タンドを蹴倒し、オシッコをふりまき、すさまじい勢いで暴れまわる。二人がかりでバスタオルをかぶせて押さえつけてようやく保護し、籠に押し込んで、そうつともとの犬小屋に返しに行くまでに、夫も私もへとへとになった。夫はさんざん両手を引っかかれ、オシッコをかけられ、帰るなりシャワー室に直行。私は父の介護部屋を片付け掃除し、「なんで八年飼ってた猫の顔がわからないの!」と夫にどなったが、「だって、放浪してやつれたら顔つきも変わるんじゃないかと思って」とは夫の言い分。翌日、心配になってくだんの犬小屋をのぞきにいったら青い首輪の猫はゆうゆうと体を舐めていた。「よかった。突然拉致されたトラウマはなさそうね」とほっとする私に、夫はいばって宣言したものである。「僕のマロ搜索の責任はこれで果たした。少なくとも、似た猫を一匹発見してきたのだから」（どういう理屈だ?）

かくして、猫騒動は一段落し、想像以上のペットロスで落ち込んだ私は、

空き地や横丁の暗がりを見てはマロがいそうで視く癖がつき、茶色の猫を見かけると走り出す条件反射。なんと世の中に野良猫の多いことだろう、ビルの隙間の多いことだろうと、新たな発見にため息をついて日を過ごした。

さらに三か月以上たった。年が明け、一月十七日に父が入院した。実家から歩いて十五分ほどの病院である。入院の翌日の夕方、私は父に付き添って四階の病室にいた。不思議なことに締め切ったアルミサッシの窓の外から、やけに猫のなき声がうるさい。近所の猫が屋根に上って降りられなくなったのかと窓を開けて四階から下を覗いた。その瞬間、窓の真下の道路をなきながら横切っていく猫が目に入った。その間二秒ほど。マロそっくりの茶トラだ。あれれと思ったとき、父が「オシッコ」と呼ぶ。尿器で父の尿を取ったあととも何か気になる。「ちよつとお父さん待っててね」と言い置いて、エレベーターで階下へ降り外へ出てみる。病院の隣は広いガレージで入り口に汚れた白

猫が座っている。白猫の視線の先、ガレージ奥の車の下に茶色の猫がうずくまっている。よく見えない。近づいて「マロ、マロ」と呼んでみた。なんと、車の下から、茶色のしっぽの長い猫がよろよろ出てきて私の足に体をこすりつけてきた。瘦せこけ、汚れ果てて、しっぽの半分と後ろ足がほとんど脱毛しているが、まぎれもなくマロだ。「マロ、マロ」と抱き上げて思わず涙声になった。マロはおとなしく抱かれている。しかし、この汚れきつた猫を抱いて清潔な病院へ戻るわけにはいかない。途方に暮れたが、ここでマロを放すと二度と会えないかも知れない。目の前の倉庫にダンボールが積んであるのが目に入った。しめた！。マロを両手で抱えガラス戸を足で蹴った。「すみません、ダンボール下さい！猫を入れたいです！」。びっくりした事務員さんがダンボールを組み立ててくれた。「すみません、ついでに電話も貸してください！」。実家に電話して義姉に父の看病をいつとき替わっ

てくれるよう頼みこみ、猫の入ったダンボールをとりあえず実家まで抱えて運ぶ。それから深夜そつと私のマンションにタクシードで運びこんだ。なにせペット厳禁のマンションだ。

濡れタオルでゴシゴシ拭いてやる。やっぱりマロだ。三か月半、どこでどうしていたのやら。好き嫌いの多い気難し屋のマロが何を食べていたのやら。父の入院がなかったら、あの時刻に病室にいなかったら、あの一瞬に窓の下を覗かなければ、再び出会うことはなかったかも。マロは狂ったように餌を食べ、ひざの上ですっかり安心して寝入ってしまった。

この日からマロは、マンションで隠れキリシタンのように匿われている。いつ長崎奉行所の役人ならぬ管理人さんがドアをノックするのか、はらはらものだ。父がその後、大腿骨折をして手術、その後肺炎も起こすなど、とても猫を実家に連れてゆける状態ではないので、当分この状態が続くだろうし、出入り自由な実家の構造ではまた

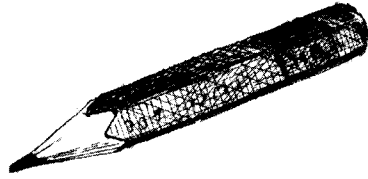
脱走事件が起こりそうだ。毎日の病院通いに「おとなしく留守番するのよ」と言い聞かせる。夜中に突然、にやあにやあ叫び、部屋中を走り回るマロにどきどきしながら、一か月が過ぎた。シャンプーですつかりきれいになり、禿げていた毛も生えそろう、あきれるほど食べて元通りに太ったマロが、今も私のひざで寝ている。今後のことを考えると頭が痛いだけだ。

教室の一年

東京都世田谷区 匿名（42歳）

小学五年生の娘の担任は、四十歳くらいの男の先生。われわれ親と同じ世代で、ご自身にも小中学生のお子さんたちがいるらしい。物分りもよさそうで、活動的なきちんとした印象の方だ。

ところが、新学年が始まっていくらもたたないうちから、子どもは担任へ



の不満を口にし始めた。家庭では、「先生が怒っていやだった」と、また友達どうしでは「去年の先生がいいよね」と。担任はたいいてい二年間の持ち上がりになるので、「来年は絶対代わってほしい」とも早くからはっきりと言っていた。

きちんとした印象イコール、かなり細かいことまで徹底的に指導するということだった。しかしそういう先生の要求に、こたえられる子とそうでない

子がいる。娘は前にもまして持ち物や宿題の点検に気をつけるようになったが、うっかり忘れることを異常に恐れた。もともと注意散漫な子がクラスには何人かいるものだが、忘れ物などが続くと教室で悲惨な状態になるらしい。

全員の前で、持ち物や学習が満足でない特定の数人を、ひどい言葉で叱るのだという。それが一時限じゅうだったり、帰りの会が長くなったりで、とにかく娘は怖いしやだという。時には先生は冗談（といっても怒られている児童を軽蔑するような内容）交じりで、クラス中が笑ったこともあるが、娘はとても笑えなかったし、笑った人たちが信じられないと怒っていた。そんな叱り方でその子の忘れ物が減るわけないと、十歳の娘にはわかっていてる。

「どうすればいいのかな」と聞くと、「隣の席なら助けてあげられるのに」と言う。級友の長所も窮状もつぶさに見ていて、家庭の事情がありそうなことにも気づいている。誰も好き好んで

忘れ物をして、先生に毎日怒られようと望んではないのに、教室の権力者たる先生が思いやつてくれないことに、娘は憤慨している。

なぜ、大勢の前で面罵するような、人格軽視の叱り方をするのだろうか。私が子どものころも、そういう場面はあった。怒られ役はたいいてい決まっていた、当時では家庭的に恵まれず学力が低い子たちだった。ぼんやりしていた私は、怒られ役の子にあまり同情もせず、大人になってから思い出して、とても恥ずかしい。だから、娘が学級の状態に義憤を感じているのが健全で誇らしいことだと思う。

意を決して、二学期始めの個人面談で、娘の心中を伝えた。先生は当然、忘れ物が多くては授業に支障をきたすこと、個人差があり指導に苦勞すること、などと説明された。隣の席になって友の手助けをしたい、と言う娘の思いは、いまだにかなわない。

学校では、忘れた物を人に借りることを禁止している。甘え癖やトラブル

を心配してのことらしい。また、班編成をして協力や責任感を体験させてはいるが、学習や生活習慣に關しての助け合いをいっさいさせないのはなぜだろう。帰り際にちよつと友達と明日の持ち物を確認しあつたり、朝学校で宿題を見せあひつこしたり、そんな交流がもつとあれば、と思うのは現場を知らないからだろうか。

人のことよりまず自分のことだけちゃんとしてなさい、と言う声がしそうな教育現場。忘れ物や計算を間違う人を、教師に促されて笑うような教室にぞつとする。

そんな場所です毎日を通す娘は、「あと何日」と学年の修了式までの日数を数えて、辛抱している。担任も「こんなクラスは来年は絶対受け持ちたくない、あと何日だ」と繰り返して言うらしい。

ところが最近、去年の卒業生がわざわざ小学校に来て、先生と楽しそうに話していたので娘はびっくりしたと言う。たまたま今年のクラスが先生と相

性が悪いのかな、とも言うのがけなげである。

ただし、「参観日とか保護者会では、先生ふだんと全然違うよ」これは娘にとっては疑いのない事実である。いっぽうクラスの誰も、先生といつしよになつて特定の子につらくあたつたり、不登校になつたりはしていない。娘が相談する信頼できる子も何人かいる。だけど、毎日のように叱られている子は、いったいどんな気持ちで学校に通っているのだろう。胸がふさがる。教師には絶望したが、子どもからは希望を抱かせられた一年だった。

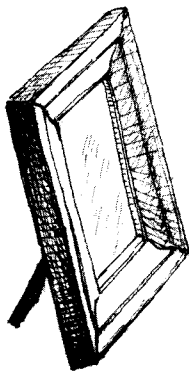
命日より誕生日を

横浜市泉区 原 昭宏

先妻真智子が帰らぬ旅に出てから四年をすぎた。昨年までは、毎年いわゆる命日の九月十六日に子供たちを呼んで彼女を偲ぶ宴を催してきた。今年も

例年通りにするつもりでいたのだが、ここで「さてよ」と考えた。命日というのは印象がどうも陰気で湿っぽい。どうかすると涙の日となる。たまたま今年の十二月一日は彼女が生きていれば六十五歳の誕生日に当たる。そこで当日、真智子生誕六十五周年を盛大に祝うというのはどうだろう。子供たちに話してみると、彼らもこの案には大乗り気である。今年の十二月一日は金曜日だったので、翌二日の土曜日の夜、大パーティーを催すことにした。

当日は名古屋から長男（結婚しているが、当日彼の妻はどうしても仕事か



キャンセルできなくて欠席」と次男夫婦、私と現在の妻綾子、それに主賓の眞智子（ただし事情があつて止むを得ず欠席のため写真が代理）の六人が集まった。宴は華やかにシャンパンの乾杯で始まり、銘柄のワインと私自慢の料理で深夜まで楽しく盛り上がった。

結果としてこの試みは大成功であつた。だいたい、死ぬことよりも生まれることのほうが楽しいに決まつている。全員が満足し、来年以降もこの手でいこうと言ひ合ひ、子供たちは二日酔いの頭を抱えながら帰つていったのだつた。

三十代の高校生活 進学出来ない悲しさ

横浜市緑区 二田サキ（65歳）

私は家庭の事情で高校への進学は出来なかつた。中学を卒業と同時に家庭の廻配達が私の仕事となつた。毎朝自

転車で配達の途中、近所の友達が五人のグループで楽しそうにお喋りをしながら通学する姿に出会う。私はその度に悔しさでいっぱい、今に私も何とかして高校に行くぞつと心に誓ひ夢を持ち続けた。そして十八年間の執念でついに夢が現実のものとなつた。

入学そして学園生活

昭和四十四年希望に輝く三十二歳の春、ついに念願の夜間高校に入学することが出来た。そしていよいよ学園生活の始まり、私の級は一年A組である。担任は春川先生、その先生の案内で各教室や図書室等の設備を見てまわつた。学級委員等の選出も終わり、授業が始まるまでに一週間の日時が過ぎた。そしていよいよの手初めは私の好きな国語の学習から始まつた。春川先生の講義はとても解りやすかつた。そして私は一番前の席を占領してたものだから、先生の質問は私の所にどしどし飛んでくる。逆に私も「はい」と手をあげてどしどし先生に向かって質問する。他の生徒は皆さん、おとなしく

何も言わないものだから、私はつい調子に乗つてこの授業は私の貸切りみたになつてしまつた。以来国語の時間は大いに楽しいことばかりだつた。一方数学と英語は全く駄目で、放課後数学の先生が特訓して下さつたので何とか進級出来た状態である。

それでも私は級委員に選任された関係上、職員室へ出入りする機会が増えた。そんなある日出席簿を取りに行つて職員室を出ようとした時、校長席に座られていた校長先生が「鶴我（旧姓）ちよつとこっちへ来い」と言つて手招きをされた。私は言われるままに先生の側まで行くと「お前はどこの出身だ？」と聞かれるので「福岡です」と言つと「そうか遠い所からよく来たのう、しっかり勉強しろよ、頑張れよ」と父親のようなぬくもりのあるお言葉で励まして下さつた。私は嬉しくて思わず涙ぐんでしまつた。

校長先生のこのお言葉や、私の進級があやぶまれていた時に数学の先生が特訓して下さいた好意等、いろいろ合

わけて人情の厚い校内で、夜間高校って、いいもんだなあと思うようになった。でも楽しいばかりでは決してなかった。

そんな時代、会社は景気がよくなたいへん忙しい時だった。毎日が残業で学校を休むことが多くなった。そんななか久しぶりで学校に行ってみると、数学の先生に「単位がとれなく進級が出来なくなるので出席して下さい」と注意されたので私は途方にくれた。会社



に行けば「この製品は明朝が納期だから今日も残業して下さい」と言われてしまう。さて学校が仕事かの板ばさみで苦しんだが、結局は生きるための仕事のほうを選んだ。でも何とか進級と卒業にはこぎつけることが、かなえられた。

答 辞

こうして苦しくても楽しかった学園生活も終わりに近づいたある日、春川先生に呼ばれ「卒業式で君が答辞を読むことになった。原稿を書いて来て下さい」と言われた。私は驚いて辞退したが「もう職員会議で決まったことだからやりなさい」と言われて読むことにした。

楽しかった学園生活、また苦しかった成績の悪さ、仕事か学業かの板ばさみの苦しさ等々他の生徒の思いも含めて、書いた文を切々と読みあげて行く内、感極まって涙がぼたりぼたりと落ち、答辞を読んでいるその声がとうとう泣き声になってしまった。そして何とか読み終えたその瞬間、場内いっせ

いに割れるような拍手がわきおこった。その時の喜びは今でも忘れない。三十七歳で卒業したのが珍しかったのか、そのことが卒業後に毎日新聞に報じられた。

マイ・オールド・ センター街

川崎市多摩区 鈴木貴子

渋谷センター街といえば女子高生……というように両者は切っても切れない関係にある。今日もセンター街には茶髪か金髪にヤマンバメイク（最近減ったかな）の彼女たちがじゃらじゃらしたケータイにかじりつき、目にもとまらぬ速さでメールを打っていたりする。しかし、センター街に女子高生たちがぞろぞろ「生息」するようになってしたのはここ近年の話ではない。なにをかくそう私も、彼女達が生まれるか生まれないかのころにかつてセンター街

をうろうろしていた女子高生の一人だったのである。

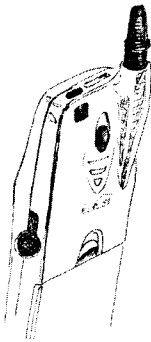
当時私は町田の高校生であったのもかわらず、小田急線を乗り継いで一時間近くかけて渋谷までほぼ毎日のように「遠征」していた。そのエネルギーを学業に注いでいればまた違った人生になったことだろう。とはいえ、カラオケボックスもケータイもない当時の女子高生の行動範囲はきわめて限られていた。まず、109やバルコでウィンドーショッピング。その後ファーストフードに寄るか、「スエゼンズ」でチョコパフェを食べて帰るというのがだいたい行動パターンであった。たまに「じゃがいも館」でコンパをしたり「キャンディキャンディ」などのデイスコ（死語ですね）に行ったりすることもあったが、そのときは大抵路上で配られている割引券を利用した。

当時の女子高生はお金がないのが普通だった。そんなわけで私もセンター街のマクドナルドでバイトに励んだりしていた。今の子どもたちが当たり前のよ

うにブランドもののバッグを買ったり、携帯の使用料を払ったり、毎日のようにカラオケに行ったりというお金はいいたいどこからくるのか不思議でならない。

当時の私達が思っていたことは「大学に入ればもっと楽しい」ということだった。おりしも深夜番組「オールナイトフジ」が大ヒットし、女子大生ブームといわれていたころだ。

そんな時代だったからこそ私も高三年になるときっぱりと渋谷通いを止め、以後一年間は予備校にせつせと通い無事大学に入ることができた。



今の女子高生を見ると高校生活があまりにたのしくてやりたいことはなんでもできるので、ずっと「女子高生」でいたい大人になりたくないというようになってしまふのだろう。

平均寿命が延びている最近としては、十代でやりたいことがやりつくせてしまふというのはかえってつまらないような気もするのだが。とまあそんなことを思うのもおばさんのひがみかもしれないが、今でもセンター街を通ると当時あった「森永ラブ」の二階や「ビルボード」で友達とたわいもないことで笑ったり悩んだりしていたことを思い出す。今の女子高生達も私くらいの年齢になったら同じような感傷にひたることだろう。彼女達には毎日のように撮っている写真や、プリクラという膨大な「データ」があるのだから当時の気持ちにもどるのは簡単なことだろう。

私にはセンター街で撮った写真など一枚もない！

（え・橋本美智子）

カンボジア・村の子どもと開発僧 住民参加による学校再建報告

清水和樹著

社会評論社

一三〇〇円＋税
一九九七・八・三〇出版

アメリカリトルロック市 伊藤琴子

著者清水和樹は昭和三十四年生まれ。早稲田の政経を出た後、朝日新聞記者になり、英国にて修士号を取得。

この本は、彼がカンボジアでNGO活動をしていた時の「報告書」である。報告書であるから、政府のお役人の書いたような味けないものだろう、私はそう思ったが見事にはずれた。

確かに日本男児特有の文のかたさはところどころ見られるものの、ヘタな小説よりもうんとおもしろい。

読んでいくうちにどんどんひきつけられて、次はどうなるのだらうという思いにかきたてられる。

また、著者清水君の率直に書かれたカンボジア人に対する温かいまなざしと思いやりが、彼の住民参加による学校建設というプロジェクトの過程でひしひしと伝わってくる。

歴史も文化も日本とは異なる国へ行き、他の国際NGOの人たちと共に人々の生活を向上させようという思いで旅立った清水君。エリートで、政治や経済を専門に勉強した彼にいろいろなものがたちはだかり、プロジェクトがなかなか進まない。

外国人に優しく、対人関係に柔らかく、設計図があるのにかなりアバウトな建築法で基礎工事をしてしまふ土地の人たち。雨季になると道が

ぬかるむ程度ならよいが、道がなくなってしまうたりする。乾季になると水の心配が反対にでてくる。主食である米が収穫以前に底をついたり、勿論電気がない所が多い。発電器でテレビを見たり、電灯をつける。私たちが当たり前としていた日常生活の便利さがそこにはない。しかし、脱工業社会に生きる現代人が失ってしまった大らかさ、人の温かさ、のどかな農村風景がカンボジアにはある。

清水君が現地の人や僧侶と協力し学校を建てていくうちに、成功や失敗を通じて、人間として一まわりも二まわりも成長しているのがわかる。カンボジアの歴史、教育の現状、社会、文化等も、著者の直接の体験から知ることができる本である。

嫌疑

野村治子

手紙

務は、千代子に手紙を書いた。

『あなたは、すべて知っていたようだし、金のこともすべてまかされていたようです。僕は、長男として先祖はまつろうとは思いますが、この人の位牌だけは、どうしてもみる気がしない。そちらでみてもらいたい』

務も本気で言ったのではないだろう。あまりのやりきれなさを肉親の妹にぶつけたかったのだろう。治子だったら兄にそう思っただけで同情する。

実際のところ、務と治子はこの家を出て、どこかへ

行きたいとさえ思っていた。

他人の視線はあまりにもきついものだった。生産性の少ない土地では、満足できる収入を得ていない人も多い。年金で暮らす者への風当たりは、そうでなくても強い。

「さまあみろ」

「なんだ、親を殺しておいて」

「よく平気な顔をしているもんだ」

誰もがそう言っているような気がして、顔を上げては歩けなかった。私は人殺しをしたのだろうか。本気でそんな錯覚に捕らわれる。我に返って、もしほんとに殺人を犯している人の気持ちとはこんなものなのだ

ろうと思った。

そればかりではない。他人の不幸は蜜の味。

家の前を通るとき、塀越しに気味悪そうにじろじろと中をのぞきこんで行くのもある。

グループの集まりに行くと、知っているぞとばかりに、得意顔でしゃべるのがある。

「ちよっとちよっとみんな！ しっかりした姑さんほど、よく気を配ってやさしくしてあげないとだめよ。自殺という方法をとるからねえ。うちのおばあちゃんなんて、中風で倒れてから、わたしが十年間世話をしたもんねえ。最後にありがとう、ありがとうと言って死んだわ」

自殺という言葉聞いて、座は一瞬しんと静まり返る。そしてそれとなく治子の様子を窺う。治子は氷の上に座っているような気がした。世の中の完全な敗残者であった。

忌明けの法要以後、千代子は顔もみせない。百か日にも来ない。一人では、どうしても駄目らしい。山辺を同行したいが、山辺も後ずさりする。

山辺は強がってはいるが、実は気味わるくてたまらない。トメが高台の山辺の家に泊まった夜、座敷に座ってテレビをみていた姿が浮かぶ。その部屋を通って便所へ行くことさえできないと、山辺がばやいているのを、治子は耳にしている。

ましてや位牌など、思っただけでもおぞましいのだらう。

「うちにゃあ、うちの仏壇があるんじゃ、なんということをぬかしゃあ」

真赤になって、山辺は千代子をどなりつけた。山辺は治子に手紙を書いた。

治子様

工藤家の繁栄と、血族、親族の円満を願うため、二人で御会いし、お話をいたしたと思います。治子様のご都合好き日を、御連絡下さい。

務は、会う必要はないと返事するように言う。治子は返事をすぐ投函したが、読んでいないのか、すぐ追いかけて手紙がくる。

治子様

二人でお会いし話し合ってみませんか。ご返事がありませんので再度ご連絡申し上げます。

あの人はいいね、いい人はいいね、この人はいいね、あの人はいいねと言われるように私はいつも、心に思い努力いたしています。

血族の方がいろいろありますと、不幸と思います。

治子さんと私とで、少しでも理解ができるように努

力することが皆さんが幸福になるのではないでしょう
か。

価値はあると思ひます。

もし、また返事がなくてお話する必要がないと思わ
れるのでしたら、私も一般人のもつ、常識としての決
意をいたします。社会に向かつて決意をいたします。

治子様に圧力をかける思いはありませんけれど。

念のため。

務が一回だけ、山辺が何を言うか聞いてきてくれと
いう。

それで治子は、しかたなく時間をとって、喫茶店で
山辺と会うことにした。

治子は、気が重かった。



ハンドバッグの中に、録音テープをセットして出掛
けた。

思いがけないことだったが、ここで山辺に会ったこ
とによる収獲は大きかった。務と治子が今まで知り得
なかった事実、疑問のほとんどをこのとき知ることが
出来た。

治子に与えるショックが大きければ大きいほど、山
辺は、勝ち誇ったように何もかもぶちまけてしまった。
務が同席していれば、とても言えない自分たち夫婦
の所行を語り尽くした。

トメの書置きを、千代子が隠したことも、得意げに
治子に話した。それも便箋の裏表に、びっしり三枚書
き込まれていたとつけ加えた。治子は笑いたくなつた。
トメがそんなに書けるはずもなく、二行ほど書いてあ

つたと務が千代子から直接聞いていた。

山辺はまず、治子に務から来た手紙をみせた。夫婦だから知らないはずはなかうと言うが、治子は、全く知らない。それならば、ここで読めという。読んで詫びろと鼻先に突き付けた。

治子は、務がそんな失礼なことを言っているのなら、お詫びするけれども、人の手紙を読む趣味はないのと断った。

話の内容は、血族の円満ではなかった。つまり務に言いたくて言えないことを、治子に言っているだけのことだった。

他に山辺はこんなことも言った。

「わしゃあ、あの時市役所で長いことかかったでえ、半日かかった。いんせい、えしと診断書に書いてあるんじゃけんなあ」

治子はなんのことか判らない。あと判って吹き出したくなった。えんせいいし（厭世、縊死）のことだった。市役所がその診断書ではいけないとでもいったのだらうか。長い時間をかけて文句をいつたのだらうか。そんなことはありえない。

とにかく、トメはしっかりしたい人だった。お前たちとは、人間の出来が違っていた。お前たちの心掛けが悪いから、こんなことになったのだと山辺はきめつける。

「あんた、この間、老人をいたわる物語を書いて賞をもうたいうて写真入りで新聞にのつとったろう。うちじゃあ、みんなで馬鹿にして笑うてやったんじゃ。よう嘘ばあ書けるもんじゃ言うて」

老人をいたわる物語など書いてはいない。治子は動物をいたわる物語を書いたのだ。

嫉妬

あの時、玄関は花で埋まり、祝いの電話が鳴りつめた。

トメは押し黙ったまま、忌々しさを顕わにした。祝電を届けにきた郵便局員を睨みつけるので、彼は驚いたように、慌てて帰っていった。千代子からは、当然ながら一言の祝いもなかった。

ラジオのインタビューで尋ねられた。

「ご家族それぞれの、お祝いの様子をお聞きしたいのですが」

「夫は、よかったねと言ってくれました。姑ははは……」

治子は口ごもってしまった。

かろうじて、鯛を……と言ったら、アナウンサーがとつさに、ああ、お頭付きですわと言ってくれた。

治子の兄は、『二門の名誉です。工藤さんのお身内もお喜びでしょう』と書いた手紙と一緒に、大きなバラ



の花束を送ってきてくれた。しかし、それらは、逆に、治子への妬みを煽ることではなかった。

治子は山辺に以前言われた言葉を思い出した。

「お嬢さん、あんたにあつてわしにないものが一つだけある。大学出の肩書きじゃ」

コーヒーを入れて出したカップでさえ、『まあ、うちのよりいいのを持っている』

と千代子は、露骨に言った。すべて比較の対象であったのかもしれない。

そう言えば、この前差出人のない妙な手紙が来た。子ども用の封筒に黒の金封をくしゃくしゃにおしこんで三千円入れてあった。

「わたしは、トメさんの友だちです。毎晩毎晩トメさんが夢枕に立たれて、つらいつらいと話をされます。きのうの晩も夜中に起きて、座り込んで話しました。聞きますれば、お嬢さんは、老人をいたわる物語を書かれましたそうですが、ようまあほんにうそばあ書けると思います。この金で盆に線香でも立ててください」

まるまっこの字は、いくら崩れてあつても、一目で千代子のものと知れた。務はすぐそれをごみ箱へ捨てた。

治子はこの人たちの執念を感じた。

治子の得たわずかな栄誉に対するいらだちは、木の

芽の立つ気候と共に、トメの症状を悪化させる一つのきっかけとなったのかも知れない。トメの死は、それから僅か一か月後のことだった。

夜になると無言電話がかかる。

ベルが鳴るので受話器をとる。

「はい、モシモシ」

相手は黙っている。

「モシモシ、工藤ですが、モシモシ」

なんの応答もなく、息遣いだけがする。

「モシモシ」

三度ほど繰り返すと、向こうがすーっと電話を切る。

こんなことが度々ある。

喫茶店での話は、結局、山辺の言いたい放題を聞かされただけだった。外では夏の日ざしがギラギラと照りつけていた。

この話の中で、山辺は治子に、最も重大なことをしやべった。蛙の前で舌なめずりする蛇のような目付きで言った。

「葬式のとき、健はもう知つとつたんじゃけえなあ。わしや言わんけど女いうもんはしょうがないもんじゃ、千代子がすぐ言うた」

ついこの間、山辺は治子の前で、務にこう言つたばかりだ。

「わしや、何が嬉しいいうて、健と香が事実を知らず

に済んだことほど嬉しいことはない」

治子は務とふたりで二三泊の旅行をするようになった。暗く落ち込む日常を、ひととき忘れさせてくれるものは、それしかなかった。施錠して留守番電話に出る。

帰宅して巻き戻して聞いてみると、必ず入っている電話がある。

二十一時十四分です。切れるとすぐ入る。二十一時十五分です。続いて二十一時十六分です。数回繰り返す。翌朝になる。また入っている。六時三十八分です。切れてすぐ、六時三十九分です。四十分です……。

どこへ旅行したときにも、これが入っている。戸締まりをして、カーテンをひいていくから、いつもと違って留守にしていることが判るのだろう。とすると、いつも様子を窺っているのだろうか。

留守番電話

治子は屋外へ出て、長時間を過ごしてから、家に向かう。

家とは、務と二人で作った安息の場所だった。世界中で最も寛げるところであった。だが、今は違う。近くにつれ、身体がぞくぞくと拒否反応を起こす。

「帰りたくない」

務が外出して、治子一人で家にいることに耐えられない。

紫色の、冷やりとした金属片が、ぞぞぞっと全身を逆撫でするような感覚に襲われて、外に飛び出す。

務にもしものことがあって、一人になったらどうしようかと、治子はいつも怯えていた。務が無事に帰って来ると、ほっとする。務以外に誰一人、頼る人はいない。この気持ちを語れる人はいない。

ただ気味悪く、恐ろしかった。

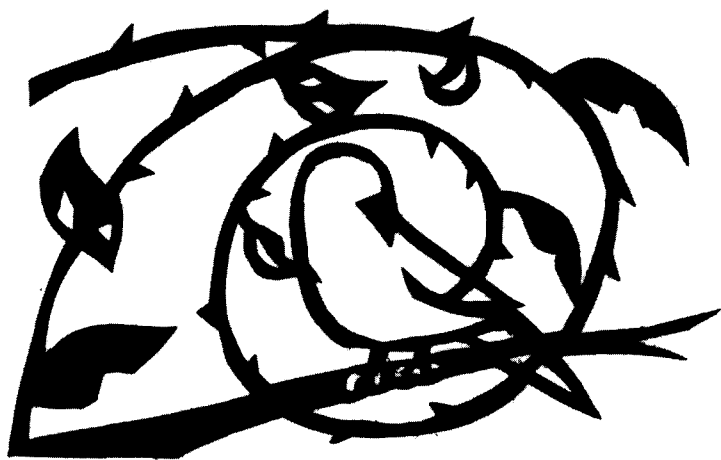
なぜ、自分だけがこんな目に遭うのか、どうしても納得できなかった。

ただ必死で生きてきた。苦あれば楽あり、今辛抱すれば、きっと報えられる。そんな期待もあったかも知れない。嫁として後指さされることのないように張りつめて生きてきた。

それがなぜ、こんな恐ろしい目に遭わねばならないのか。

あまりにも不公平ではないか。考え始めると、とてもなく落ち込んで果てしがない。

ある日、友人からの時候見舞いに、返事を書くとう、机の引き出しを開けた。横野は一番下になっている。取り出して、表紙をめくったとき、治子は意外なもの



を見つけた。

務の字で、遺言書と書かれている。未だ下書きらしく、修正箇所をそのままにしてあるようだ。なにげなく、読みながら治子は涙を流した。

遺言書

男、女の平均寿命の違いもあるし、妻（治子）より年齢も高い。従って、私（務）のほうが早くこの世を去ることは確実だ。

そのため遺言として、この書を書き残す。もし、治子が私より早く、世を去るようなことがあれば、務を治子、治子を務と読み直すものとする。

一、私の死後、どうやって独り治子が生きていくのかがかりで、死んでも死に切れない。残ったものを、自由に使って余生を送って欲しい。

二、治子名義のものは、当然、治子のものであるが、務の名義になっている不動産（土地、建物）と動産（預金、有価証券など）はすべて治子に与える。

三、葬儀は密葬とし、斎場でひそかにすること。本来は、葬儀は望まないが、弟の範雄、妹の厚代、健、香のみに知らせること。香典、献花など一切受けとらないこと。

四、墓標は墓地に務、治子二人のものを建てておくの

で、葬儀後、直ちに納骨し、以後如何なる法要、供養も営まないこと。これは遺言である。

五、千代子及びその係累には、一切知らせないこと。もし何かで知っても、葬儀には列席させないこと。そして俺たちの墓標の前に立つことと一輪の供花、一本の線香を立てることも拒否する。

六、二人の死後、もし仮に不動産（土地、建物）が残った場合は健に贈与する。預金、有価証券、生命保険など動産は、健、香の話し合いで、六対四の割合で贈与する。

七、千代子の娘の町子とは何の関係もないのに、町子の屋敷は、千代子が騙しとったものである。従って返還させ、それは範雄、厚代に贈与する。その結果を墓前に報告すること。範雄、厚代が権利放棄することは許さない。権利放棄するなら、他に寄付すること。

八、どちらが最後になろうとも、最後に残った者の後始末は、範雄、厚代に頼みたい。家具など必要なものがあれば、健、香の了解のもとで、範雄、厚代に与える。なお後始末に必要な経費として、範雄に三百万円也、厚代に二百万円也を与える。

町子に与えた土地のことなど、務は口に出したこともないのに、こんなことを考えていたのか。

墓地は務が買って、すでに先祖代々の墓を建てている。自分たち二人のものは別にと言う。

一と書かれた部分で、治子は激しく胸をつかれた。

一人になる怖さと共に、もしも治子が先にいなくなつたとき、務がひとり、どうやって生きていくだろうかと思うと不安だった。

それを務は治子に対して語っている。

どんなことがあっても、務より長く生きねばならない。務をこころゆくまでみとらねばならない。

この家に一人残る気味悪さも、消えてしまった。

暗闇、明かり、怒り、望みの混じり合った奇妙な感情に襲われる。

そうだ。生き方を変えてしまおう。萎縮しないで、はつきり頭を上げよう。

このままで済ませてしまうのは、あまりにも自分に対して残酷だ。

びくびくと周りを見回して、心を捕らえられることを止めよう。

姑を自殺に追い込んだ恐るべき嫁と言う者は言え。嫁に来て以来四十年、自分のしてきた行動に恥じることは何一つない。

務と二人だけの人生を堪能しよう。

いつの日か、終わりを迎える時、『これでよし！』と言える最後の人生を作り上げるのだ。

治子の心は沈まり、落ち着いてきた。

一周忌の法要に、厚代、範男夫婦、他に身寄りの者数人が来た。山辺夫婦は、務が呼ばなかった。

千代子は頭にきたのだろう。二、三日たって、留守番電話に山辺の声が入っていた。

「お嬢さん、話があるので、ぜひ会いたいけえ。うちに電話をかけてくれんさい」

務がすぐ電話をかけた。

治子は務の持った親子電話の片方を耳にあててみた。山辺が出て、とばけた風に聞いている。

「なんの用でしょうか」

「そちらから、会いたいという電話が入っていたので」

「お嬢さんに会いたいと言うといたんじゃが」

「家内に会いたいのなら、うちに来てください」

「二人だけで会いたいんじゃない」

「人の妻と二人で会って、なんの話をするのですか」

「つもる話をしたいんです。世間話をするだけですがな」

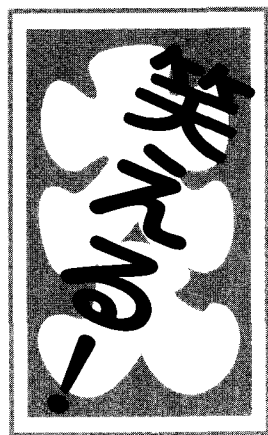
「世間話なら、うちへ来い。言いたいことがあるなら、俺に言え。すべて俺と千代子の間の問題だ。治子にはなんの関係もない」

務がどなりつけた。

山辺は黙っていた。

しばらくしてそのまま電話がきれた。

(え・小林正子) (完)



猿の計算力

奈良県奈良市 田中慶子（55歳）

狙公という人が、手飼の猿に『とちのみ』を与えるのに、朝に三つ、暮に四つを与えようとしたら大いに怒り、朝に四つ、暮に三つにしたら大いに喜んでという話がある。

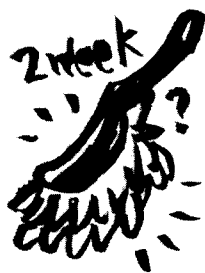
ところで、私はレンタルモップを使っている。前は四週間レンタルで四百円だった。手軽さが気に入って使っていたが、ほとんど使わないうちに四週間経つことが度々あり、もったいない気がしていた。そのうち、ホームセン

ターでレンタルモップと同じ機能のモップが並び始めた。レンタルをやめて私はそのモップを買ったのだが、回収期限がないのでものぐさな私は前に使わなくなった。

私の性格ではやはりレンタルモップは合っていたのかしら、と思い始めたのを見計らったように勧誘員が来た。

四週間は短すぎると私が言うのと、八週間七五〇円にすると言うのだ。八週間もあれば必ず使うだろうと私は思い、七五〇円と聞いても、それがほぼ倍額であることに気がつかず、また使うことにした。

そしてある日やっと気がついたので



ある。期間も値段も倍になったということは前と同じ条件で、安くはならないということに。「これでは朝三暮四の猿と同じではないか」モップを使う度に私は猿並みの自分のばかさに吹き出しそうになった。ところがこの時でも私はまだわかっていなかったのである。

期間と値段がどちらも倍になったのだから結局は前と同じ条件だと思っていたがそうではないことに最近気がついたのだ。期間と値段が倍になったのなら、モップも倍、つまり二つ借りないと前と同じ条件にはならない。実質的な値上げを、客にすぐには気づかせないレンタル会社の巧妙さに感心し、私の計算能力は猿以下であることを思い知った次第である。

それでも、期限が来ないと掃除のできないぐうたらな私はレンタルモップをやめることもできず、回収日が近づくにあわてて玄関扉や網戸を拭いている。

（え・イシノフミ）

ズバリ一言

やらせはあるのか

熊本県天草郡 松本とみよ（44歳）

先日、某テレビ局の下請け制作会社と名乗る男性から家族をテーマにした一時間番組に出てもらえないかとの打診があった。

私が失敗談をテーマに家族新聞を作っていることから来た話であった。番組はこちらのほうでは放送していない。どんな内容が聞くと、はつきりと

は言わないのだが、察するに、家族の一人の問題行動のために他の家族が困っているというテーマのようなのだ。

しかし、私は家族に迷惑をかけているとは全然思っていない。そりゃあ、自分の失敗が新聞に書かれたりしては、ちよつと恥ずかしくもなろう。だがその結果、夫は「面白い」と人気者になった。メリツトのほうが大である。テーマには、あてはまらない。

「ご主人をシチャカチャばかにしたりするんですって？ ご主人困っているでしょうねえ」

「それが、不思議なことに読むと愛されているという気がしてならないっというんです」

新聞のテーマは、愛すべき失敗で読んだ人を楽しくさせるのがネライなのだがおあいにく様。

姑がいると聞くと「けんかしたりするんじゃないですか？」と言う。確かに仲がよいとは言えないが、公共の電波を使って内情をさらす気なんて全然ない。あきらめきれない彼は、うちに

何か問題点はないかとさぐってくる。

「新聞で姑さんをこきおろしたりもするそうですが、本人はそれを見てどう言ってます？」

「見せたことありません」。あたり前だろう、冗談の通じる相手じゃないのだ。

相手はなんとかして自分のテーマに私をあてはめられないかと一生懸命である。

「それじゃあ、松本さんがどこか面白いお宅へ取材に行くというのはどうです？」

しかし、記事はいつも勝手にころがりこんでくるので取材には行かないのである。それなのに子供にカメラを持たせて他家に取材に行くところを撮らせてほしいという。

事実と違うことをするのであれば、なんでそんな芝居をする必要があるのか、私の回りの人間に対して釈明する必要がでてくる。ただでさえテレビに偏見を持つ人もいる田舎なのに理解を超えている。説得するのもうんざりだ。

「いやあ、田舎の人ってそう言いつつも気のいい人達だから、いざカメラが回るとけっこうのつてくれたりするんですよ。そこは私にまかせて」とせまる。

「取材に行く先として面白い人は知りませんか？　すごいデブとかワニを飼つてるとかやり手の女性とか」

「やり手の女性なんていません。町会議員に女が立候補するなんてとんでもないという田舎ですよ。女がバリバリするわけじゃないじゃないですか」

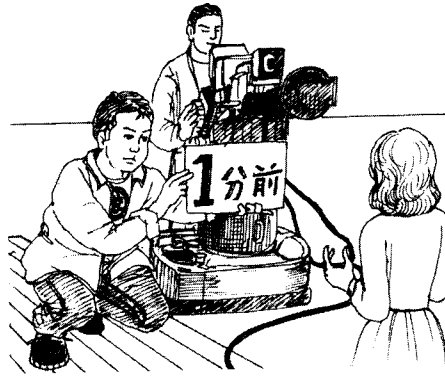
「すごく明るい人は？」

「それなら心あたりはありますが、承知するかどうか……」

「その方にはよくから話をしますから。放送は十日後、テーマは女性です。タイトルが週刊誌的で過激なんです……」と言いくそうにする。

ありがちだから驚きはしないが「暴走する妻達」というのがテーマだと言う。今まで何となくわかったつもりにさせられていたが、またわからなくなった。ほのぼの家族新聞をどう撮れば

「暴走」させられるのかと首をかしげざるをえない。それに熊本まで電話取材だけでやって来て、もしハズレの場合どうするんだろう？　十日後の放送とはすごいやつつけ仕事ではないか。



私の取材先選ばれた友人Y子は「私暴走してるつもりなんか無いし、あてはまらない。他にそんな人も思いつかないから断ったよ」

はたしてその夜、担当者から、ちょ

つと無理があるようだからまたお願いしますと断つて来た。初めからどだい無理なことははっきりしていたではないか、一体何なんだ。

その放送がどんなものになるのか興味津々だったので、名古屋の妹に見るようにたのんだ。するとテーマは「暴走する妻達」ではなく全く別のものになっていた。ちなみに「爆裂！　夫婦げんか」だと言う。「やらせくさいよこれ」と妹。Y子が承知して、あのまま取材が続行していたらどんな目にあっていたかしのれない。クワバラクワバラ。

人生から逃げる男たち

——健さんにだまされないで！

東京都練馬区 井上暁子（41歳）

映画を観て、とても後味の悪い思いをした。あの健さんの「鉄道員」である。劇場でヒットしていたころから、何となく胡散臭いものを感じていたの

だが、このお正月にテレビで放送したので、横目で見始めてみたら、思わず引き込まれてしまった。あまりのタチの悪さにある。私の勘は正しかった。ご覧になった方も多いとは思いますが、これは、幼い娘にも、妻にも先立たれた男が、その死に目にも会わず鉄道員一筋に生きた人生の物語である。

この映画は、全編ほとんどが美しい雪景色だ。青空の、吹雪の、夕焼けの、雪景色。その中を走る蒸気機関車。それを背景にした健さんは、レトロな制服のコート姿で、とてもとても、格好いい。

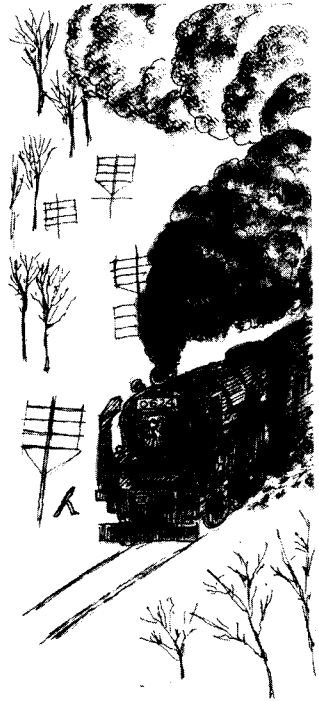
この、健さん演ずる乙松おとまつの決め台詞は、

「俺アぼつぽやだから——」

人生の大切な、重要な場面で、この男はいつも、必ず、

「したって俺アぼつぽやだから——」
とのたまう。

乙松の妻が、結婚以来十七年目で妊った時、あなたは、子ができないことで、ずっと私を責めていたでしょう、



と言うのだが、その妻の気持ちを正面から受けとめることもせず「俺アぼつぽやだから」

その、やつと生まれた娘が、まだほんの赤児のうちに死んでしまった時も、「俺アぼつぽやだから」

妻が難しい病気になった時も、一人で入院させ、その死に目に間に合わないくても、

「したって俺アぼつぽやだから」

私は原作を読んでいないので、本の中の乙松がどんな男なのかは知らないが、この健さん演ずる乙松は、鈍な男ではないのである。

十七年間の妻の苦しみにも気づいて

いたし、娘の死は辛いし、妻の病気にも労りの気持ちを見せるし、死んでしまえば涙も流す。でも、いつも、そうだったことと正面から向き合わない。俺が泣いていては、汽車は走らないという訳だ。そして、雪のホームに、あの格好いいコート姿できりつと立って、ピーッなんて笛を吹くのである。

たまんねー!! やつぱり男はこうでなくっちゃ。全国の健さんファンの男たちの声が聞こえてきそうだ。

乙松は間もなく定年を迎える。元同僚の親友が、定年後の仕事の話をもってくるが、乙松は、

「俺アぼつぽやだから」他のことは

何もできない、と言って、まったく取り合わない。彼は駅長で、駅に住んでいるから、退職すれば住む所もなくなってしまうのである。

そして彼がどうなったかというところ、何と、定年を目前にしたある日、雪のホームに倒れて死んでしまうのである！

乙松の棺を載せて、雪の中を走る蒸気機関車。長く長く響く警笛。荘重な音楽――。

健さん、さいこーだよー!! (涙、涙)

って、おいおい、ちょっと待てえ。こんな人生ってあり？

健さんほど格好よくなくても、乙松ほど仕事を愛していなくても、この映画の人物のように、人生に正面から向き合わず、仕事に逃げ込む男はとて多い。

何を言うんだ、逃げてなんかいない。妻のため、子供のために働いているんじゃないか、それが俺の人生なんだ、と彼らは言うだろう。

彼らがそう言うのは、そのほうが楽だからだ。妻が何かに悩み、苦しんでいたとしても、子育てに関われなかったとしても、

「仕事がある」「仕事が忙しい」と言えば、すべて許されると思っている。それは事実だろうし、確かに彼らは家族のために働いているのだろうが、それを大きな隠れ蓑にして、彼らは人生から逃げているのだ。そのほうが楽だから。

でも、そんなふうな人生に背を向けて仕事に逃げ込んで、その先には何があるの？ ほとんどの人は乙松みたいに、格好よく雪の中で死ねたりしない。そもそも、人生をあんなふうに関わりにしたいの？

私が、この映画で最もタチの悪さを感じたのは、赤ちゃんの時に死んだ娘が高校生に成長した幽霊になって出てきて、乙松の人生を肯定することだ。

乙松は娘に、赤児のうちに死なせてしまったこと、死に目にも会えなかったことを詫げる。すると娘は、

「したってお父さんはぼっばやだもの、仕方ないでしょ。ユキコ、なーんとも思っていないよ」と言うのだ。

多くの男たちは、人生から逃げていることに、後ろめたさを感じているのだろう。だからそれを、家族に認めて、許してもらいたいと心の中で願っているのだろう。

でもそれは駄目。あなたが家族のために働いてくれることには感謝しているけれど、だから仕事に逃げていい、ということにはならない。赤ん坊の時に死んだ娘が、お父さんの大好きなセーラー服姿の高校生になって現れて、「ありがとう、お父さん」なんて言っていて、そつと寄り添う、などという究極の「許し」は絶対にない。

男たちよ、人生から逃げないで。仕事も、家族との関わりも、退職後の数年、数十年も、そのすべてが、あなたの人生です。

健さんの格好よさにだまされないで。乙松は、人生に背を向けた、ただの愚かな男なのですから。

単位制高校の教師から

神奈川県藤沢市 木村澄子（52歳）

二八八号「ズバリ一言」に投稿がのつた。それはうれしかったけど、イラストにはがっかり。「ひどい教師、児童生徒、学校、保護者の話などは話題になるけど、いい話は事件性がないので話題にならないから、そこを書こうかな」として、いい話をひとつ書いたつもりだったけど、教師の話はだれひとり聞いていないイラスト！確かに教師の話を知っているとところなんか絵にならないし、第一に、と書いたのが学校がらみの問題発生状況について、だったからだろうけど。

いねむりする生徒がゼロとは言わない。全員が集中して聞いているとも言わない。だけど、こういうイラストはやっぱりつらい。生徒はどう思うか。傷つきはしないか。スクーリングで私語する生徒なんていないのに。話題に

した生徒に喜んで見せる、という気が失せてしまった。残念だった。

だから、もっと実像をいろいろ現場から発信する必要があるんだろうな、と思うけど、これだけ教師がたたかれているなかで、自分だけはちがうと言いつける教師は実は少ない。

ほんとは多少のことはあっても前向きな生徒が圧倒的で、楽しく充実して学校生活を送っている。だけどまともな教師なら、自分がどんなに誠意をもつてやってもうまくいかないことがあるのを知っている。一歩まちがえばこじれてどうしようもなくなることもあるのを知っている。少なくとも私は、自分がそうならずにすんで、無傷でここまで来ても今も信念を曲げずにいられるのは僥倖にすぎない、と知っている。人間関係って不思議なものだ。「この先生方は他の学校とはちがう」と保護者や生徒に言われるが、「そうじゃない。システムの差よ」と私は否定する。

私の勤める単位制の山吹高校では、

年度末に、受講指導と科目登録をする。今年を振り返り翌年をどう過ごすか、面談をして次年度に履修する科目を決めるいわば山場で、生徒の姿勢がよく出る。

骨折で長い入院のあと、去年は二十単位しか登録しなかったAさんが三十分単位登録した。気持ちにもゆとりが出たのだろうか、表情もおだやかだ。「約束の時間より早いですか」といつて来た生徒が三人もいた。夜勤明けで、寝ると起きられなくなるから、といって寝ずに来たBさん、Cくん。去年は自分では登録に来られず、電話も苦手と言っていたDくんは、「友達をたくさんつくるのが目標」と言って私のケータイ番号を聞いていった。メル友にもなってやらねば。Bさんは、配った予定表の他に、一年間の自分の時間割をきれいな表にしてもってきた。「気合入ってるわね」と言うと、「この計画だと前期でスクーリングがほとんど終わるから、レポートもがんばれます」と言う。居酒屋で五時から五時までの



十二時間労働していて「先生眠いです」と言いながら卒業までの計画を語るBさん。バイク便やトラックでの配送など転々としたCくんはインテリアの店に勤めて現場作業を始め、「やっ」と自分のやりたいことが見つかったから、大学で勉強したい」と言う。

「それはいいわね。シックハウスの問題解決にせめて室内の安全性を、安くできるよう考えてね。今は安全な内装材などは割高だけど、お金のない人でも安全に暮らせるように」など話す。卒業までもう少しのところで足踏みしていたが、設計・デザインも仕事もできるように、と語る彼は、今年こそ

卒業できるだろう。

こんなふうに自分で選択し自分の責任で学校と契約を結ぶというシステムは、厳しいが、やり甲斐があるといえるだろう。だれにでも合う、とは思わないが（費用の点でも簡単に拡大はできない。公立ならではの安さだが、さまざまな事情で通学して学ぶことの困難な条件を抱えた生徒に、学習を保障する通信制高校は全国に八十校を越え、在籍生徒数は定時制在籍生徒数を越えている）。

負担を軽く力をつけるというモットーが生徒に活かされている例をあげよう。季節には遅れてしまったが、

「先の身を思い浮かべて黙々と机に向かうクリスマス・イブ」

この生徒は無事志望大学に合格できた。溶接工として働いてきたあとで。

別な生徒のこの句には、単位制の、そして通信制の、新宿山吹高校が凝縮されている。

「山吹で自由と責任噛みしめる」

（元・弘法堂建二）

★わいふバックナンバー

（特集テーマ）

- 263号 わが家の親子ゲンカ
- 264号 ふるさとの伝統行事
- 265号 私の初体験
- 269号 再就職で得た仕事・得られなかった仕事
- 272号 カウンセリング体験
- 273号 子どもとテレビ
- 274号 引越越し騒動
- 275号 料理と私
- 277号 不妊治療・私の場合
- 278号 「おけいこ」との格闘
- 279号 あなたの夫は何番目の男？
- 281号 思い出の地・再訪
- 283号 私の読書歴
- 285号 美容と私
- 286号 私の健康法
- 288号 車と私

シリーズ最後の巻上し

お年寄りが安全に暮らすために

変わる主婦・変わらない主婦
一五〇〇円
一五〇〇円

お申し込みは ☎ 〇三三六〇四七七

子育てフォーラム

NMSのページ



子供たちに道徳観を

神奈川県中郡

石井しのぶ（42歳）

小六の息子は一月中旬、学校で友だちとけんかをし、相手の顔にけがをさせてしまった。理科の授業で使うロボットを作っている時、すでに作り終えた友だちが、まちがった作り方をしていた息子の側に来て、笑ってからかったのに腹を立て、いきなりけり倒してしまったのだという。

友だちは目の周りが赤くはれ、親に来てもらって病院に行ったということだ。息子は保健室で先生と保健の先生

と校長先生に囲まれ厳重注意を受けた。

しかしその時、以前からその友だちから本気でけられることが多く不満がたまっていたということもわかった。

校長先生は「○○君はまだ子供っぽいのでから石井君がそういう時は我慢しなければ……」と言ったらしい。

息子はなぜ自分だけ我慢しろと言うのかとおこっていた。しかし、とにかく手を出してけがをさせてしまった以上、こちらはあやまるしかない。

相手の親は「そんな乱暴な子が教室にいるのは危険だ」と思われたようので、後日、先生をまじえて親同士の話し合いの場をもった。結局その子も別の子

から毎日のようにけられていやな思いをしていたことがわかった。それぞれの不満が、変なかたちであらわれ起きた事件だったのかもしれない。子供同士はすぐ仲直りし、相手の親も「うちの子は全く悪くないとは言わない」と言ってくれ、ありがたいことに息子の心の状態も心配してくれた。

幸いけがも軽くすみ、すべて解決したかのように思えたが、息子から、それ以降も友だちをけっていたという子は相変わらず誰かをけっていると聞いて、元の原因が何も解決されていないのが気になった。

確かに、息子はかっとしやすいくところがある。特にばかにされると敏感に

反応しておこる。でも普段は決して乱暴ではなくユーモアがあつて明るく友だちづき合いいいほうである。それに、体が小さくて顔もこわくないので、何をしても反撃しそうもなく見えるのか、小さいころは逆に周りの子から乱暴なことをされてばかりで、心配していたくらいだ。

それがまさか反対に手を出すようになると思ひもよらなかつた。いつから何も抵抗しないとやられてばかりだと思つたのか、夫が以前「がつんと強いところを見せればやられなくなる」といった言葉を実行したのか……ある時からやられたらやり返し、時には激しいけんかをしてくるようになっていた。それを許していた私に甘さがあつたのかもしれない。でも、もし何も抵抗できないままだつたらいじめられっ子になっていた可能性もある。一体どちらがよかったのか、私は考え込んでしまった。

とにかく相手をけがさせたのはやりすぎだ。それ以来毎日息子は、先生や

校長先生に呼ばれ、おこられ続け、だんだんゆううつになつてしまつたようだ。私も懇談会で話題にされたり、電話であれこれ聞かれたりしてかなりめいつてしまつた。



手を出しけがをさせてしまつたことばかり大きく取り上げられ、その陰で、ばかにされたり、けられたりがいやだつたという気持ちはどうでもいいような扱いになつてしまつたのが、なんとなくおかしい気がしてきた。もともと

何もされていなければ起きなかつたことなので、まず教室で人のいやがることはお互いにやめようという指導が、あつてもよかつたのではないかと思つた。息子は自分で解決しようと親にも先生にも相談しなかつたようだが、言つても取りあつてくれないとあきらめていたところもあつたようだ。

最近の小学校はどこかおかしい。授業中もうるさいし、先生の言うこともきかない。子供もわがままになつてきているが、親や先生が甘く優しくなつてしまつたことに問題があるのかもしれない。

結局こわいものなしなので、規律がなくなつていふのだと思う。体罰はよくないと言うが、学校で立たせたり、正座させたりくらいのはして、してよい事と悪い事をしっかり教え込むことが必要な気がした。何かが起きてから問題にする前に暴力はいけないということも含めて、子供たちにきちんとした道徳観を育ててあげるべきだと思つた。

お魚死んじゃったの？

神奈川県藤沢市 久保埜慶子（31歳）

「お母さん、お魚、死んじゃったの？」

最近、我が家の食卓に魚がのぼると必ずといっていいほど出る質問である。五歳の幼稚園児、裕也と二歳の航大は魚が大好きだ。私も夫も魚は好きなほうで、エボダイの干物、カレイの唐揚げ、カジキマグロの煮付けといったところがこのごろよく食べる魚のおかずだ。特に航大は、エボダイやカレイなどの姿形そのままの魚を見ると、身を乗り出して前述の質問をこちらに浴びせる。すると裕也が、「そうそう、お魚はいっぱいのが一緒にあって、ぶつかり合って、跳ねて死んじゃうんだよ」と身振り手振りを交えながら訳知り顔で説明をする。恐らくテレビでみた、漁船の大きな網で大漁の魚を引き揚げているシーンを思い浮かべてい

るのだろう。

「お魚は、どうして死んじゃったの？」

とても興味があるらしく、私や夫が、裕也と航大の食べる分の魚の身をほぐして取り分ける作業で手を動かしているあいだ、それを見ながら航大は何度も聞いてくる。いきなりそう聞かれると何と答えればいいのかよく分からないのだが、あまりにもしつこいので何かをいわなければとても収まりがつかさうもない。

「人間はお水の中にずーっといたら、息が出来なくなって死んじゃうでしょ。お魚はその反対で、水の外の陸地の上に揚げられちゃうと、お水がなくなって苦しくなって死んでしまうんだよ」

苦し紛れだが何とか説明してみる。

「そしたら、『アアッ、死ムッ』って言って死んじゃったの？」

と、まるで時代劇のセリフのように感情をこめて航大が言うので、私も夫も思わず笑ってしまった。

その場はなんとか納得したようで、食べ始めたが、魚の観察には余念がない。

「これはおめめ？」

と指を差したりする。夫が「食べるか？」とからかって真顔で言うのと、「イラナイ」と真顔で恐れをなして首を横に振る。

そういえば私も小学生のとき、食事中に魚の目をじっと見ていたら食べられなくなってしまうことがあったっけ。子どもにとってはエボダイも普通の「鯛」くらいの大きさに見えるのかもしれない。自分とは形を異にする生物を目の前にした時の何とも言えない不思議な気持ち……。動物園で猿山をずーっと見ていると感じるようなアレを感じているのかな？ まあ、それは分からないけれど、食べるものから、それがかつて生きていたのかとか、死に至ることへの疑問とか、いつの間にか好奇心や興味の範囲が広がっていたんだなあとも母はしばし感心する。

今まではふたりをここまで育てなが

ら生活するのが精一杯だった。最近は一瞬だけどふっと軽くなってそこに微笑ましい風がサアとふいて通り過ぎる。ささやかなことなので、つい忘れ去りそうなのが多いけれど、書いて思い出に出来れば一石二鳥（?）。今までなかなか筆を持つ手が重たくて、書き進まなかったけど、これを機に私も少しずついい、出来るところから始めてみよう。

息子たちは「今度釣りしたい」と、オモチャの釣りゲームをしながら言っている。

私は経験がないけれど、夫は若い時によくやっていたと聞いているので、「お父さんに教えてもらえるよ。楽しみだね」と言っている。いまのところは図鑑や鮮魚売り場でお魚の名前でも覚えよう。水族館も近くにあるし。もう少したば潮干狩りや地引き網の季節がやってくる。私も今までは特別に興味がわかなかったけど今年は何だか楽しみになって来た。早く行ってみたい。

三番目の子どもが やってきた

横浜市戸塚区 杉田みほ

二番目の子ども、藍が生まれて始めた投稿も今回で十回目。藍は二歳になり、弟が誕生しました。

一月二十九日

朝から始まった陣痛が、昼食後急に強くなり、助産院のお風呂に入って二時間あまり。痛みに立ち向かうぞという気力も、いよいよ赤ちゃんに会えるという期待もないかわりに、三十八度のお湯の中で身体も心もリラックスし、傍らの夫と久しぶりにゆっくりとたわいもないおしゃべりを楽しんだ末に……「あ、来た、来た、来た！もう生まれる……」。忙しく動いていた先生もとんできて、夫の膝の上には三歳の野歩、その横に藍と夫の母。願い通り、みんなと一緒に赤ちゃんを迎えることができました。

「陣痛が来たら、あつという間に生まれそう」と言われていたので、この一か月、「夫も助産婦さんもないところまで生まれちゃったらどうしよう」とハラハラドキドキ。だからとにかくにも、よかった、よかった！

上の二人の時もそうだったけれど、この一日、夫はひたすらやさしくて、私が不満を言おうが、いきむときにかみつこうが終始にこにこ。「どうしてママのお腹、まだ少し大きいの？」と不思議がる野歩。「赤ちゃん、いい子いい子」と何度も何度も頭を撫でる藍。たまたま休みで駆けつけてくれた夫の母は「こんな楽なお産もあるのねえ」としきりに感心していました。

三十日

おっぱいを吸われるとお腹が痛くて痛くて、後陣痛は冷や汗もの。いっしょのベッドに寝ている赤ちゃんはおとなしい。

遊びに来た野歩が、赤ん坊の枕元を歩き回るのでヒヤヒヤ。でも赤ちゃん

にさわるうとはしない。藍は相変わらず「いい子いい子」。

夫と子どもたちが帰ってから、飲み残しの缶やおもちゃを片づけて寝たら、散らかり放題の部屋に帰った夢を見てうなされて目覚めました。正夢でないといけれど。

三十一日

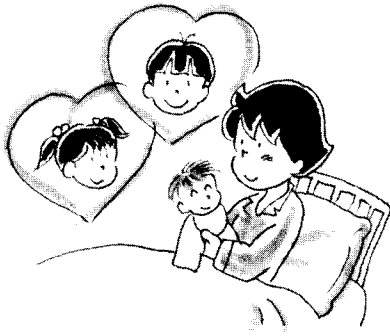
夫は仕事を休んでばかりもいられないので、上の子たちは昨夜から叔母の家へ。今日はいとこ夫婦と一緒に会いにきました。

階段の下から野歩の声が聞こえると、赤ちゃんはおっぱいを飲むのを休み、じっと耳を傾けている様子、お腹の中でいつも聞いていた声だからかな。

藍の「おっぱい飲んで」という言葉を、私が「赤ちゃんが飲んで」という意味にとり、泣き出した赤ちゃんに飲ませ始めたら、ひとしきり大騒ぎに。藍が私の上に乗ってきて赤ちゃんを押し退けようとする。止めようとしても

「ダメ!」とひかず、キーキーキヤーキヤー。私も「ダメ!」、藍も「ダメ!」。と、気づきました。そうか、「藍に飲ませて」って言いたかったんだ。

赤ちゃんを下ろし、藍を膝に乗せて抱きしめました。タオルを握り、オイオイと泣く藍がいとおいしい。パパにもママにも笑って「バイバイ」と手を振ってくれるけど、離れているときはそれなりに緊張して過ごしているらしい。会えば甘えなくなるのは当然のこ



と。時にはしっかりと抱きしめなくっちゃね。

野歩はケロッとしていたけれど、今朝は「ママの所に行くんじやなきや、ごはん食べない」と泣いたとか。本当に目の前のサンドイッチを食べようとしなかったの、いとも驚いたらしい。でも、ここから帰る時には約束通り、笑顔で「バイバイ」。ありがとうね、野歩。

うちに帰ったら何をしてあげられるかなあ。私の入院中、一番がんばっているのは、野歩と藍だものね。ありがたいの気持ちはどうやって伝えるのがよいでしょう。

二月一日

仕事が早く終わったから、と夫が子どもたちを連れて顔を出してくれました。

赤ちゃんが寝ついたところでちょうどよかったけれど、野歩も藍もやたらと泣くし、ちっとも言うことを聞いてくれない。感情的に怒りたくなるのを

抑えて、なんとか二人を膝に乗せたものの、ちよつとくたびれてしまった私。三人が帰って静かになり、ホッ。退院したらどうなることか。

二日

普通なら退院の日だけれど、夫の都合であと二泊することに。赤ちゃん二人で過ごす貴重な時間。三人目、たぶん最後の赤ちゃんだろうと思うと、ゆつくりゆつくりこの時が流れてほしい。

誰も訪ねてこないで、一日静かに過ごしました。

今日は夫の弟、明日は父が休みなので、野歩と藍は昨夜夫が実家へ連れていきました。日に一度は子どもと話そうと思って電話をかけたのですが、野歩はちよつと話しただけで「かわる？」。なんだか淋しくなってしまう。

三日

今日も静かな一日。白いカーテンを

通ったやわらかい陽の光、真つ赤なバラの花、赤ちゃんの寝息。心地よい部屋で、夫と二人で過ごしたころのこと、野歩や藍が生まれた日のことを一つ一つ思い出しながら、幸せをかしめました。

夜になって、夫の実家に電話をかけたみたけれど、野歩はまた「ごはんがー」と言っさつと消えてしまう。「明日みんなでおうちに帰ろうね、野歩と藍に会うの楽しみにしてるからね」って話しかかったのに。

受話器をおくと、何かがこみあげてきました。野歩も藍も私と離れて平然としていられるのは、周りのみんなが支えてくれているからで、それはとてもありがたいこと。こんなにすてきな助産院でゆつくり休ませてもらっているのは、とても幸せなこと。それなのに、どうしようもなく淋しいのです。

大事な子どもを夫の親に取られてしまうようで、抱え込みたくなってくる。どの子もいつまでも自分を必要としている赤ちゃんでいてほしい。ああ、な

んで自分勝手！ いつもは甘えられるとうるさがっていたくせに。

これは、マタニティ・ブルーの一種？ 産後のホルモンの影響で、子どもとくっついていたいというエネルギーが強くなってもいるのでしょうか。

とにかく今は、早くうちに帰りたい。私たち五人のうちへ。家族五人で寄り添って、安心したいのです。

四日

おはよう、赤ちゃん。もうすぐパパと野歩と藍が迎えに来るんだよ。

今日は立春。私たち家族も、新しい季節のスタート。五人の生活が始まります。

藍が生まれたとき、ばあばが買ってくれたオーガニックコットンの白いベビードレス。その下にはこの先生手作りの肌着。

さあ、もうすぐ私たちのお家に向かいます。

(え・栗田笑)

家族の スケッチ

母に誘われ一句

東京都新宿区 林 直美

お正月に帰省した際、私は夫の母から『句』の手ほどきを受けた。父はすでに他界していて、母は現在、夫のすぐ上の兄と二人暮らしをしている。

以前から、母は家事育児の合い間に短歌を作ったりして、地元新聞に掲載されたこともあったらしい。他人には言えない苦労話を、短歌や俳句に思いをこめてつづってきたようだ。母にとっては、一種のストレス発散方法だったのだろう。『不幸な時ほどいい歌が作れる』と、よく言っていた。十六年間透析を続けてきた父が亡くなり、精一杯尽くした満足感があったのか、未亡人となると青春を取り戻すかのようになり、生き生きとしてきた。そのころは、いい歌が作れなくなったと言っていたが、あれから八年、最近、地元の句会に席をおき、本格的に川柳と短歌の勉強

強を始めている。

母は感情豊かな人で、表情、声の調子が、その時の体調をそのまま語ってくれる。一時は糖尿病のコントロールがうまくいかず、落ちこんでいたが、句会へ通うようになってから、ずいぶん元気になった。

毎回、宿題があつて大変らしいのだが、そう言いつつ、目標ができたところ向きに取り組んでいる。見せてもらったノートには、思いついたままの句が、びっしりと書きつけられていた。数少ない言葉の中に、さまざまなおみや情景が伝わってくる。主語と述語がある（句に比べたら）長い文章ばかりを書いてきた私には、それがとても新鮮に見えた。

「ふるさとで 母に誘われ 一句詠む」

「とりあえず 字数合わせて ほらできた」

「来月の わいふ原稿 何書こか」

五、七、五というのは、リズム感があつて、基本的に一番作りやすい字数

なんだと思う。季語も何も考えなければ、それこそいくらでも出てくるのではないか。そこへ季語を入れて、季節や情感を出して、その句を表現する。これが難しいのだろう。私の感覚から言くと、決められた少ない言葉を聞いて、頭の中に広がる世界の大きさ、深さ、美しさ、そういったものが勝負の決め手になるというところだろうか。

最近、都会でも若い人たちの間で、俳句や短歌がはやっているらしい。うまくいかない思いを句に託すのだが、



要するに、それがストレスの発散になるわけだ。どういう事情でストレスがたまるとか、人それぞれだろうが、句を作るというのは、なかなか健康的ないいストレス解消法だと思う。

これから母への手紙には、必ず一句添えることにしよう。

試練の冬

東京都世田谷区 太田啓子（42歳）

はつきりいつてうるさい。いいかげんにしてほしい。私だつて疲れてきているのだ。

中三の息子の都立高校入試が、目前に迫ってきた。スベリ止めの私立は併願推薦という手段を取ったので、面接と作文のみで合格が決まってしまった。だから、ペーパー試験はこれが初めてということになる。

不安なのは当然である。合格するかどうか心配なのもよくわかる。しかし、朝のんびり起きてきた息子がつぶやく

のは、

「アー、いつまでたつても朝型にならない」

学校から帰ってくれば、

「アー、みんな勉強できてるのに俺はダメダー」

夜は夜で早く寝ればいいのに、ガラガラと過ごしたあけく、

「アー、こんなに時間無駄にしちゃったよ。どうしよう。不安だ。ネエ、合格するよね。大丈夫だよね」

と繰り返す。

こんな状態が、ここしばらく続いているのだ。だから私だつて、冒頭のような言葉を吐きたくってしまうのである。

息子に不安を与えている一因に、夫の存在がある。夫は、教育関係の仕事をしているので、ここ数か月、息子の受験指導をしてきた（その間の、親子の葛藤その他については、別の機会に書くことにする）。だから、夫のひと言が、息子に与える影響は絶大なのである。

この前の日曜日、息子がいつものように、「不安だ」「不安だ」と繰り返すので、夫は息子を励まそうと、

「大丈夫。絶対合格する。今まで俺が絶対合格するって言って、落ちた奴は一人もいないんだから」

と、力強く言った。その言葉には、私も勇気づけられた。いくら模試の合格判定で「A」と出ていても、実は心配だったのである。息子も安心した様子で、その日はゆったりした気分であつたのであつた。

ところが、そのあとがいけなかつた。夫の言葉を聞いて単純に安心してしまつた息子は、勉強に身を入れなくなつてしまつたのである。それを聞きつけた夫はとても怒つた。そして感情にまかせて息子に、

「合格するかしないかは、自分の責任だ」

と、前日の言葉を覆すように、突きはなしてしまつたのである。私には、

「本当に、どうしようもない奴だな。人が不安を取りのぞいてやろうと思つてああ言えば、すぐになまけて」と、不満をあらわにしながら言つた。その行為に、私は納得がいかなかった。「試験まであと一週間じゃない。もう勉強するしないは本人に任せて、こは二人でもり上げていこうよ。はげましていこうよ」

私は夫に言つた。すると、

「いや、俺はできない。やるならお前がやれよ。俺はもう何も言わない」

「それならそれでいいよ。私がいちばん上から。もし私立に行くことになつたつて、お金の用意もできてるしね!!」

ここにきて、私も腹をくくつた。

つくづく夫は、名コーチではないなと思う。高橋選手を育てたあの小出監督なら、どんな状況においても、選手をばげまし続けるだろう。特に息子のように、すぐに自信をなくすタイプには。もつとも、コーチする対象が「息子」というのは、夫にとつてもやりにくいと、同情する余地はあるけれど。

入試が終わるまで、息子はばやし続

けるのであろう。はげます言葉も底をついて、本当のところうんざりである。しかし、今、息子は持っていき場のない気持ち、私にぶつけるしかないのである。私を必要としているのである。こういう時こそが、私の出番なのであろう。ここはグツとこらえて、入試までの数日を温かく見守つていこう。

寒く厳しかったこの冬が終わりに近づくころ、我が家には、ひと足早い春が訪れていることを信じて。

かわいい子には 一人暮らしをさせよ

東京都日野市 十河温子（48歳）

長男に引き続き次男も親元を離れて一人暮らしをすることになった。大学までの通学に二時間以上かかるというのが理由だが、無理すれば通えない距離ではない。少しくたびれてきたサラリーマンでも通っている人はいっぱいいるのだから、ましてや若くて時間に

余裕のある大学生ならできないことはない。

しかし、次男にとってはうるさい親元を離れて自由気ままに暮らすことは夢だった。

「勝手なあいつには一人暮らしをさせるのが一番いい薬だ」

夫は積極的に下宿を探すアドバイスをした。私のほうは緊縮財政に突入することを恐れながらもこれでやっと、大きい図体をして半分ほどの体格の弟を、小学生の知能レベルでしつこくいじめる情けない息子を見なくても済むと内心ホッとした。

次男は十四歳も、十七歳も荒れることなく無事に通り抜けたのに、遅くやってきた反抗期に私たちは辟易していたのだ。

一人住まいをするためには、行ったことのない不動産屋に出入りし、めばしい物件を当たり、希望のところがみつかるまであちこち歩き回らなければならない。サッカーで鍛えた足だから訳もないこととはいえ、知らない世界

の人と対峙するのは気苦労なものだ。

気に入ったところが見つければ親の承諾を得なくてはならない。こしはらく私たち親に話しかけることがなかったのに、このときばかりはきちんと説明をし、積極的に話をするようになった。

「あの子、ちゃんとしゃべるやんか」親に正面向いて話をしたと、他人が聞いたら吹き出すようなことが夫との話の種になった。今までは聞き取れないほど小さい声で、面倒そうに単語の羅列でしか意志を伝えず、作文が苦手



なものも合点がいくというものだった。それがきちんとした文章で話したのだから、本当にびつくりした。

都心の一等地なのに木立に囲まれ、少し古びた和室の部屋が気に入って、予定より半月遅れで引っ越しを済ませた。夜中に我が家のワゴン車に荷物を積み込み、それはまるで夜逃げのようであった。

いよいよ念願の一人暮らしが始まった。二日たち、三日経っても何の連絡もない。きつと羽を伸ばしているのだろう。

二週間ほどして帰宅したとき、指先に絆創膏をまいていた。包丁で切ったという。先輩から冷蔵庫をもらい受けることができて、自炊を始めたが、上手いかないうた。どういう訳か強烈にまずいものしかできないという。

ある時珍しく電話をしてきて、
「煮物って何日持つ？」
変なことを聞いてくる。

「二十四時間ぐらいなら火を入れ直したら食べられるけれど、味が変なら

捨ててしまいいし」

「最初から変な味がするから分らない」

「じゃ、お箸でもって糸を引くようならあかんわ」

「片栗を入れてあるからとろみがあって分らない」

息子はあんかけ風の煮物が好きなのだ。

「そしたら、少しなめてみて酸っぱかったら諦めよし」

「作ったときから少し酸っぱかったから見分けがつかない」

車で走れば一時間のところにいるのに何とも歯がゆいことだ。

「家の冷蔵庫は腐った物があるから気をつけろよ！」

夫が子どもたちに向かって言う私への嫌みを聞きたくないため、隠れて捨ててしまっていた腐敗物を見せておけばよかった。この時はじめて後悔をした。黒い斑点も、カビなのか、黒ゴマなのか、黒こしょうなのか、あるいはバニラビーンズなのかは教えないとわ

からない。

料理なんて基本的には焼くか炒めるか、揚げるか煮るか、あるいは蒸すかなのだから、鮮度が悪くない限り、きちんと味付けをすれば食べられないものはできないはずだ。

普段、夜遅く帰宅しても次男は、さめた夕飯を温めようとする私をこう言うて制止する。

「自分は味の分かる人間でないから、それに光熱費がもつたいいない」

その味の分からない人間が食べるのに苦労する料理とは、一体どんなものか見てみたいものだ。かなり困っている様子だ。

その次の帰宅の折、何でもいいから料理の本をくれという。私はこみ上げてくる笑いで崩れていく顔をかくし、ゆるんだ口元からウツと声が出そうなのをこらえながら、簡単に作れそうな料理の本を探してやった。

それでもよほど自分の住まいが気に入ったのか、ある日夕飯を食べてから深夜に帰るといふ。荷物のあることだ

し車で駅まで送ってあげるといふと、

いつもは雨でも自転車で行くからいいとかたくなに私の申し出を断っていたのに、今回は珍しく素直に従う。その

上、駅に着いて降りるときには「ありがとうございます」を二回もいった。しかも大きな声ではっきりと。

あの子は一体どうなってしまったのだろう。あまりの変身はちよつと気味悪いものがある。

息子が帰ったあと、夫は自分でもいった種なのに、家族三人になつてしまったことを嘆く。

「さびしいなアー、さびしいなアー、わしらの老後がみえるようや」

ころころ変わる父子に私はいつまでも笑いが止まらなかった。

旦那の顔

京都府宇治市 匿名(40歳)

決して顔に惚れてつきあったわけでも、まして結婚したわけでもない。

初めて、新入社員とその上司という関係で会った時には、

「かっこよくはないけど優しそうな人でよかった!」

と思った。その一言につきた。

もしかっよかったら惚れっぽい自分の性格を考えてそれなりに注意もしただろうし、ふざけて、

「私には彼がいます。私に惚れるなよ」

とか言っていたかもしれない。かっこいいイコール悪い男かも知れないと考えて、警戒したかも知れない。そんなこと全く感じさせないほど普通の顔だった。

それが一緒にいればいるほど性格のいい人なのだ。ちょっと油断していると当時つきあっていた彼のことも忘れて、私のほうがかなり好きになっていた。と言いながらも旦那は私を見た瞬間、「オレはこいつと結婚する」

と思ったと言っているが……。

最近では段田安則という俳優に、一番似ていると思う。性格俳優でいい味は

出すが、キムタクみたい顔だけで視聴率が取れるわけではないでしょう。彼も京都府出身らしいから何代か前は親戚だったかも知れないなあと思う。



旦那の実家に行くと、しつかり者の義母がものすごく嬉しそうな顔をして何度も同じ話をする。

「雅裕は子供の時、そりゃあかわいらしい子供やった。目がぱっちりして、いてまっげが長くてカールしていて、

どこに連れていっても『なんてかわいいいぼんや!』と誉められたものや」

そこまでしゃべると義母の恥ずかしがり屋の性格が目覚ますのだろう。

「今はすっかり不細工になったけど」と謙遜する。

私の息子は生まれた時から誰が見ても旦那そっくりだが、赤ちゃんの時はよく太っていた。

十一歳の今は少年らしくなり、すっきりと痩せ、顔が面長になり、肉に埋もれて糸のように細かった目に、かろうじて二重の線らしきものが出現し始めた。義母の目で見ると、

「卓馬は生まれた時は肉まんみたいで不細工やったけど顔が変わったわ。最近はおかわいらしくなって雅裕そっくりになってきた。ほんま、ええ男や」だと。誰でも自分の子供が一番かわい

い。

独身の時、京都の名所と一緒に歩いていると、よく若い娘が旦那に寄ってきた。

「あの一、すいません」

よだれをたらしそうな顔で旦那が、「はい？」

「写真のシャッター押して下さい」

おそらくそれだけ人畜無害の顔なのだろう。誰も「郷ひろみ」にシャッターを押してもらおうとは思うまい。気安く声が掛けられて決して怒りそうにない顔なのだ。

一年ほど前、一緒に買い物に行った時なぜかふてくされている。

「どうしたん？」

「ちょっと聞いてくれ。ひどいねん。その漬物屋でオレ『大将(たいしやう)』って呼ばれたんやで！ オレはどう見ても『にいちゃん』やろ？ 大将なんておっさんくさい呼び方オレ嫌やわ」

思わず吹き出した。

女はいつまでも若く見られたほうが嬉しいから「奥さん」か「娘さん」か分かりにくい世代の人や、はつきり言って派手な格好の人は「おねえさん」とか呼ばれるが、男はそれなりのプライドがあるから呼び方が難しい。

一番無難な呼び方を考えて、漬物屋のおじさんも「大将」と呼んだのだから当時四十二歳の旦那には気に食わなかったらしい。

男でも結構色々こだわりがあるのだと初めて気が付いた。

さて一月ほど前のことだ。二人であるラーメン屋に入った。カウンターがいっぱいだったのでテーブル席についた。注文を取りに、六十は随分前に過ぎただろうお婆さんがやってきた。若かった時はさぞ綺麗だっただろう人だが、寄ってくる年には勝てない。それにも負けずこれでもかというくらいこつてりとお化粧をしたそのお婆さんが、なぜか旦那のそばを離れない。店が忙しそうなのにベタバタと近寄り、「指曲がつてんの。昔折ったんや」と見せたり、汚れてもいないテーブルを拭いたりしてからんでいる。

案外旦那は「年寄りキラー」で、年寄りには魅力的な顔なのかも知れないと思うとおかしくてたまらなかった。

(え・佐藤瑞江子)

子どもたちはあなたとの出会いを待っています！

数学教育研究会は、1969年に設立された学習塾です。

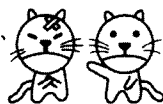
私たちは、設立以来「水道方式」と「量」の系統に基づいた算数・数学教育、科学的・体系的な国語・英語教育の研究を重ねてきました。

私たちの教材で子どもたちを教えてみませんか。

新しい先生の学習や教育の場を設けるとともに、相談の窓口も充実させ、安心して子どもたちを教えていただける体制を整えています。

数学教育研究会の教材で、ぜひ、子どもたちを教えて下さい。

子どもたちはあなたとの出会いを待っています。



0120-420-531

数学顧問：徳林浩(前数学教育協議会委員長・明治大学名誉教授)

国語顧問：鈴木康之(大東文化大学教授[言語学])

本部：〒160-0022東京都新宿区新宿4-1-23-7F

http://www.lektion.co.jp toiwase@lektion.co.jp

数学教育研究会

情報 コーナー

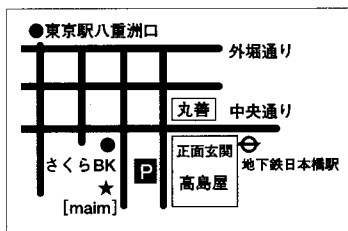
アイムパーソナルカレッジが
玄米ダイニング
を日本橋にオープン！
わいふ読者なら10%引き!!

「食べても太らないレストラン、
飲みながら健康になれるバー」
そんなキャッチフレーズで、
女性のためのビジネススクール、
アイムパーソナルカレッジが、
「グルメの自然食」をテーマに健
康とダイエットのためのダイニ
ングを二月にオープン。
昼間は「玄米ダイニング米夢
（マイム）」夜は「オーガニック
バーアイム」と、名前も雰囲気
もガラリと変わります。

自慢メニューは二段重ね三十
品目という充実の内容でなんと
四五〇Kカロリーという六角重
(二二〇円)。

ほかにも、野菜たっぷり、三
十種のスパイス入りベジカレー
四九四Kカロリー九五〇円や、
目玉焼きのセビンバラ并四九六
Kカロリー八八〇円、粒こんに
やく入りジャンバラヤ三六五K
カロリー八八〇円（いずれもセ
ット価格）など、玄米や黒米を
使ったうれしいメニューがいっ
ぱい。しかも野菜は80%以上が
無農薬。スパイスもオーガニッ
クというこだわりようです。
シェフは一流フレンチレスト
ランの出身ながら、山形からと
り寄せたこんにやく、岩手の山
から届くどんこなど、和の素材
を縦横に使いこなし、創作メニ
ューにチャレンジしてくれます。
日本橋高島屋から徒歩一分。
お買物ついでのランチにどうぞ。

中央区日本橋三十七ア
バンビル1F
TEL〇三―三五一六―〇一三八



月～金11:30～14:30/17:30～23:00
日祝休・土昼のみ

家庭に関する アンケート調査に ご協力を

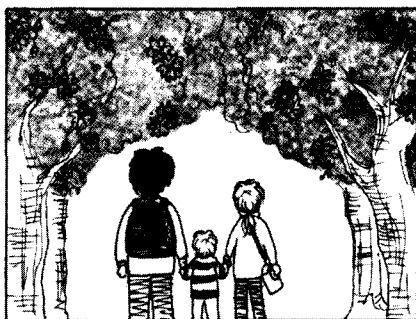
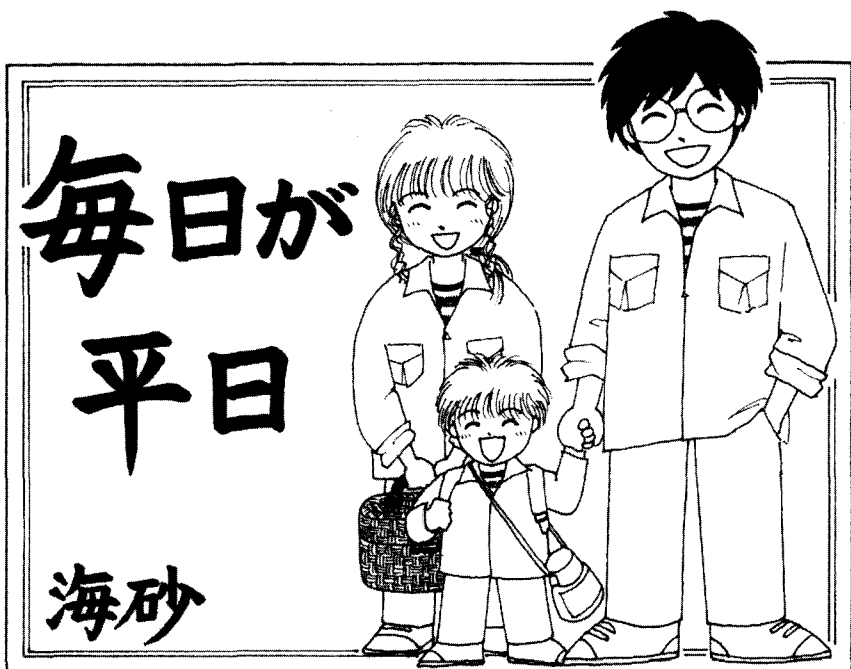
二十一世紀を迎えて、日本の
家庭をめぐる環境、特に家庭の
七割以上を占めるサラリーマン
世帯の生活は、企業のリストラ
とも関連して、大きく変わりつ
つあります。高度経済成長期に

多数派を占め、女性の生き方の
代表だった専業主婦の生活や考
え方も変化を見せています。

しかし、一方で変化しないの
が、主婦の役割（特に保育や育
児）や、家庭をめぐる地域や社
会制度です。変わる生活や意識
と変わらない社会的な環境や政
策などのギャップを、今の時点
で知りたいと思ひこの度アンケ
ートを計画しています。読者を
はじめ、その友人・知人の方々
で、この調査にご協力いただけ
る方は、ハガキ、FAXにてご
連絡いただければ、所定のアン
ケート用紙をお送り致します。
ご協力を期待しております。ま
た、調査結果については、必ず
お知らせ致します。

〒294 0001 逗子市久木八二〇―
四三 TEL/FAX 〇四六八七
三―五七二八

藤井治枝
(東京農大客員教授)





私も ひとこと

こんなことになるなんて

東京都小平市 鈴木紀美枝（39歳）

一年間の専門学校生活も残りわずか、且下就職活動中。勤め先が決まったら、同棲中の私たちは別居することになっている。理由はこの二年ぐらいいの間、私が不特定の男性たちとつき合ってきたから。「もう愛してないの？」私のセックスじゃ駄目なの？」という彼の言葉を背に、その日も外出した。性の不一致は決定的!? それにしても、なんてヒドイ人間なんだろう、と思う。

一生愛し合っていけると思っていたのに……。

まずは日本語!

愛知県瀬戸市 水野徳子

最近外国語学習にのめり込んでいるが、私は日本語が怪しい。友人との電話で「ほら、A社とB社がつるんでやってるのよ」と言ったら「提携でしょう?」と指摘された。以前小学校の校長室へ、野球部六年生の母親全員で行った時、緊張した私は、教頭先生に向かって「先生、今日は全員雁首そろえて、お願いにあがりました」と言ってしまった。誰に聞いても変という。必要なのは日本語講座か?

怒鳴りつけた後で……

東京都新宿区 辻浦知津代（69歳）

女子校生の一群が道に広がってだらだらと歩いている。仕方なく私も後について歩いたが、と前の一人が急に立ち止まり手鏡をのぞいて髪をいじり出した。危うく追突しかけたのでカチンときてその横をすり抜けざまに「きれいになりたかったらもつと膝を伸ばしてさっさと歩きなさいよつ」と一言放った。いくら胸がすつとしたが、でもこれって言葉の暴力だったかな? と今になって反省しきり。

試験

熊本県熊本市 渡辺憲子

昨年の十一月、ケア・マネジャーの試験を受けた。いざ試験に臨むと、上がつてしまい、「出来なかった」という気持ちだけが重くのしかかっていた。介護保険の利用者である母のためにも、中身を正しく理解し、また来年再挑戦!と気持ちを切り換えていた矢先に届いた「合格」通知。やった!。これからが始まり。福祉のこと、介護保険のことを、学べるチャンスに恵まれたのに感謝している。

鼻吸い

アメリカトルロックス市 伊藤琴子

暮れに帰った時、昔の教え子に久しぶりに会った。卒業後アメリカの大学院を出、国連でインターンをした彼女はカンボジアで働いている。その献身とエネルギーには脱帽。彼女には四か月の赤ん坊がいて、私が訪問中急にミルクが飲めず泣き続けた。教え子は「先生、これで治るんですよ」と言い、な、なんと鼻につまんだ鼻水を吸ったのである! ワオ! 究極的な母親の愛情をそこに見た。

こい……

新潟県長岡市 大原清子

和歌山からこの地に来て十八年。今年は久々の大雪。この地に住まないと、雪の怖さ、冷たさ、重さ、はわからない。

でもね、雪ってきれいな。木々や大地に、ゆっくり休んだようになってまるで大きな布団なの。春が近づくと、布団がどんどん小さくなって、何が生まれるか、わくわくしてしまふ。雪、雪、雪、ってあんまり大騒ぎするものだから、ちよつと雪の肩をもちたくなったの。

夢はまさ夢か!!

東京都中野区 山内志保

ある人が明け方夢に現れた。あーっと呼はうとしたら向こうをむいて行つてしまった。「おいおい怖い夢を見たのか?」と主人に体をゆすられて起こされた。「そう怖い夢だったの」と言った。「どんな夢だった?」私はだまっていた。そう!! あれは五十年前、楽しい楽しい思い出である。さつとあの時彼はなくなつたと私は信じている。一度会いたいという夢があつたけれど、もうあきらめた。

聞き役ベテラン

山形県山形市 加藤智恵子 (70歳)

私は昔から聞き役ベテランと自負していた。しかし皆な年老いて、こぞつておしゃべりになり私にちつとも話させない。私だつておしゃべりしたいよね。だから友人の電話にもつい構えてしまふ。火を消し、別室に移る。今日も「ア」「ウン」で終わり、夫にも蔑まれる。

まあいいか、これで胸のつかえが降ろせるなら。おしゃべりのはけ口が少なくなった相手に同情し聞き役に徹する私は善人なのです。

ご老人の悲しみ

東京都文京区 トト安田

知人に洋服を送つてあげたら、不満の返事が返つてきたと嘆かれるAさん。今来てもらつてるヘルパーさんの言葉がきついで、あなたに変わつて欲しいと涙ぐまれるBさん。どうしてもお嫁さんには頼りたくないの、病院へ一緒に行つて欲しいとお願ひされるCさん。今週は一回しか来てくれなかったとすねて、布団にもぐり込まれるDさん。一人一人の「思い」しつかり受け止めます。

二〇〇一年正月

千葉県松戸市 高橋安子

元旦の朝、BSテレビで写真家白川義貞さんの「世界百名山」を見た。

山に朝日が射し込む瞬間を写し撮る。黄金色に輝く山肌。荘厳で美しい名峰が目の前に現れる。思わずテレビの前に正座した。

山頂を真上から見下ろす空撮の視点を「神が見た地球」の姿だと、白川さんは言う。多くの困難を越えて、神の眼を具現してくれた。写真展「世界百名山」を、即見に行った。

おいしいおしやうゆ

東京都世田谷区 太田啓子 (42歳)

母が、K社の卓上用「特選しやうゆ」をくれた。容器がオシャレなので、中身を補充しながらずつと使っている。ある日、居間で食事をしていた夫が台所の息子に「ネエ、そのおいしいおしやうゆ取つてよ」と、頼んでいた。中身が違ふことに気づいていないのをおかしかったが、いつも言葉遣いの悪い夫が、おしやうゆなんて上品ぶっているのにも笑えた。「特選」という文字は、人を変えるのね。

二八八号の井上様

静岡県小笠郡 鴨川典子（46歳）

林さんの引用した本は「カラフルライフ」（文化出版局）だと思っています。ノーベル賞学者・利根川氏の奥さんで、才女の吉成さんはこの本の中で、子供の成長課程における「臨界期」の大切さ、EQ（感情指数）値が高い人……挫折回復能力・自分の感情をうまく飼いならす能力が高い人……が世の中で成功するらしいということも書いていて、私にはとてもおもしろかったです、おすすめします。

赤ちゃんを勝手に出すな！

東京都世田谷区 後藤 晶

読んでいないのに批判するのはいけないかもしれないが、柳美里さんの赤ちゃんとの写真広告『命』って恥ずかしい感じがする。だれでも命の誕生に際して、すごいドラマや感動があるものだ。芸術追求と出産と一線を引くわけにはいかないが、私生活の暴露と文学の区別つてないのかな。

プライバシー侵害裁判の言い分も、私には理解できない。ただ出たがりの人に見える。

おためし下さい

東京都新宿区 林 直美

PTAサークルでバドミントンをやっています。若くはないので、あちこち故障します。湿布など全く効果なかった「かかと」の痛みが、知人に教えてもらったチタンテープで、嘘のようになおりました。知人いわく、「世の中には、効く人もいるんだねえ」ちなみに彼は全く効かないそうです。（それで、捨てずにおためし用として私にくれた）何でも人それぞれ、個人差があるんですね。

心にも栄養を

横浜市港北区 尾崎美奈子（44歳）

カウンセリングの勉強を始めて八か月余り。不登校、心の病と色々なケースを耳にした。それぞれの居場所の大切さも学んだ。

調布のクッキングハウスは、心の病気をした人たちのホッとできる居場所、レストランだ。仲間と見学に行き、「身体同様、心にも栄養が必要で、それをもらいにここへ来る」とメンバーが話してくれたのが印象的だった。私の心に栄養はどれくらいあるかな。

期待はずれ

東京都大田区 田中順子

「暮らしの中でゴミ減らし」という講座を聞きに行った。少しでも環境に優しい生活ができればと期待していたのに、講師は地球規模の環境悪化を嘆き、小手先のリサイクルはやるだけ無駄だと断言する。三十年先の次世代の意識が変わらなければどうにもならないと結ばれ、「じゃあ、私は今どうやって生活すればいいのよ」と憤懣やるかたない。地球の未来は暗すぎる？

風呂釜故障の原因は！

東京都足立区 島村君子

先日、友人の家の風呂釜がこわれた。その原因は袖湯に入れた袖を子供がグジャグジャに崩し、それが風呂釜の中に詰まって、お湯が沸かなくなったという。

私は、五月は菖蒲湯もあるし、その他風呂での子供の遊び道具などが風呂釜に詰まらぬよう注意せねばと思った。ちなみに風呂釜の修理代は四万円だったとのことだった。（その家の風呂釜の構造がどうなっているのかは分からない）



既成の政党や組織に縛られず、
何からも自由に、
だからこそ、
一人の視点から始まる
疑問を大切に、
市民レベルの動きを
伝え続けてきています。

大きな 新聞には 書けない 大切なこと。

WOMEN'S DEMOCRATIC JOURNAL

女たちの情報紙

ふえみん
f e m i n

ふえみん婦人民主新聞

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前3-31-18

TEL 03 (3402) 3244、3238 FAX 03 (3401) 3453

Eメール femin@jca.apc.org URL <http://www.jca.apc.org/femin/>

◆大阪支局

〒530-0015 大阪市北区中崎西3-1-5 TEL&FAX 06 (6371) 2429

見本紙
送ります

プランケット版4ページ 毎月5日・15日・25日発行 購読料：年間9,000円・半年4,500円(送料共)

『母と子』4月号 (定価500円/送料68円)

〈今月の視点〉 社会教育の可能性

住民と 調整機能としての社会教育

太田政男
&平湯 紘一

—「まちづくり」に果たす役割は非常に大きい—

アメリカ便利 ある日本語学校の紛争解決 山本 由美

〔私は獣医師〕 動物ふれあい訪問活動 渡 真紀

子どもの権利条約を考える 山田 雅康&編集部

時代のキーワードを冷静に見る —根絶が社会の最高価値であったとき—

〔子どもと学校図書館〕 学校図書館はどこへ行く (5) 有吉 末充

『母と子』4月臨時増刊号 定価1050円(送料84円)

21世紀の母親と子育て

—「生きる力を育む」ための14章—

203-0054 東久留米市中央町5-4-8 電話0424-74-9125 母と子社

私もひとこと
わいふネット 質問
わいふネット 答え

(○で囲んでください)

タイトル・住所・氏名

本文

私もひとことは、投稿してみたいけど、長いのはチョットという方のためのコーナーです。わいふネットは相談や質問、掲載された質問への答えをお寄せいただくペー

ジです。あなたの声をお待ちしています。
投稿には、右の原稿用紙をご利用くださ
い。

●タイトル、住所、氏名は一行めに。もし、

二〇字を超える場合には横目にこたわらず、小さい字で、住所、氏名は他のコラムを参照してください。

●二行めから本文、全体で九行一八〇字。

[illegible]

庭

の餌台に今年も沢山の小鳥が来ています。ウグイスとカワラヒワが新しく仲間入りし、いちだんと賑やかになりました。それぞれの鳥たちの様子が面白く、いつまでも見ていて飽きません。しかし小鳥たちの自然の餌が多くなる春までには、だんだんと給餌の量を少なくし、最後は餌台を撤去します。ちよつと寂しくなる季節が近づいてきました。

(水落)

わ

いふで出している「ハイスクールレポート」担当だったためか、私は電車の中でも高校生に目がいく。

先日、今どき珍しい純朴な高校生の集団と出くわした。大きな白いビニール?の鞆を持っていた。英語で早稲田ジツギョウとあり、その下に本人の名前らしきもので記されている。

財

布に50円玉と10円玉一つずつしかないから電

話もかけられない」と母。ところが10円玉がごっそり入っている。「寒いから貸してと言ったきりあの人は返してこない」とベストがなくなつたと怒る。自分ももう着ないからと家に置いてきた。「大事な布団が捨てられた」と泣く。しまつてあるのに。

寄

こんなことのくり返し。(望月)

り道をして飲んで帰ることも、残業もなくなつた夫が「今晚、飯いらない」と言つた。「どうして」と聞く私に「いいじゃん」と答えるだけ。その晩遅く、玄関のチャイムが鳴り続く。お通夜だったのかとドアを開けたとたん塩を振りかけてしまった。「何するんだ」と言いながらも上機嫌で菓子箱を差し出した。しかし、どこで何

こんな鞆持っていたら、悪さも出来ないだろうな。(山本)

今

年のお正月、友人のところに、すでに亡くなられたご両親から年賀状が届いた。

一九八五年に開催された「つくば科学万博」を記念して出されたもので十六年ぶりのたよりである。「十六年後のあなたはきっと人生において一番充実感を味わえる年になっているでしょう」というご両親の言葉を目にして友人は感慨深げであつた。

ネ

(成井)

コ一匹とマンションに住む老夫妻宅を訪問。贅沢に暮らす人達だが、三斤もありそうな食パンの耳が目に入る。食べている私には何とも不思議。後日、ハトのエサだと知った。一センチ角に切つてあげるのも大変らしいが、喜ぶ姿がかわいいと言う。たくさんハトがJ R目黒駅から数百メートル高台の住宅街へ移動した話。(菊池)

ぬ

かみそを漬けている。昔亀戸大根という小型の大根があつて、ぬか漬け用であつた。今は全く見かけない。

夫は野菜を色々作るので、頼むと種がないと言ひ、代わりにと何か蒔いた。

倫

敦の家」を思いがけないほど多くの方からご

注文いただいて、びっくりしています。本当にありがとうございました。ようやく少し親孝行したような気分です。

それにしても、これまで一度も投稿のなかつた方のお名前を封筒の上に見て、「おつ、初投稿!」と胸をときめかすと、それが空振り。どうかご投稿のほうもよろしくね。(田中)

「ファミ・ポリテイク」より

●昭和五十年代に、サラ金地獄の話題がマスコミを騒がせたことがありました。取り立てのすさまじさが問題になり、マスコミでも法外な高利を貪るのは法律違反、という論調だったと記憶しています。

●ところがこの問題は高利貸のトクする解決を見ていたのです。政治家と官僚が一体になって、それまでの法律では年一八%までだった利率を骨抜きにする新法を作り、約四〇%の利息を認め、しかも付則で数年間、それ以上の高利率を（最初の三年は七三%！）認めることにしたのです。

●きわめつけが、このとき法律制定に力をつくした大蔵省の役人（次官だといわれています）がその後高利貸大手の「武富士」に社長として天下ったこと。詳細は「ファミ」を見ていただきたいと思いますが、それにつけてもこんなあさましい役人や政治家たちに、私たちの運命をいつまで任せておいてよいのでしょうか！

NMS研究会より

●この研究会を立ちあげてからまだ四年にしかありませんが、たつたそれだけの間に、子育ての状況が加速度的におかしくなっているのを感じています。ともかくにも、「子どもを育てる」ということの意味が、まったくのみこめていないお母さんの多いこと。昔の母親だって、同じようなものということも言えるでしょうが、それでも何となく、「人間が生きていくためにはこれだけ必要」ということが言わず語らずのうちにのみこめていた部分がありました。

●いま最大の問題は、現代の若いお母さん自身、感覚的にそれが感じとれていないことにあるのではないのでしょうか。

それでは彼女たちは、人生を何と感じているのか……。もしかすると、楽しむ場、遊びの場と感じているのではないかしら。違いますか？ 若いお母さんたち、どうか怒りの声を含め、反論を寄せてください。すべては対話から始まります。

老人ホーム情報センター便り

有料老人ホームの設備やサービスの実際と、ホームのガイドブック「輝」に掲載されている表示との乖離を調べるため、今年一月に有料老人ホーム協会が三チームの調査団を編成し、全国二十八ホームを手分けして訪問調査した。

私もその調査員の一人として、ひと月で十五ホームの訪問調査を終えた。ハードな日程ではあったが有料老人ホームの実際はよく見えた。

契約書・重要事項説明書・東京都条例などをつきあわせると、それぞれの書類の表示に違いがある上、実際とも乖離があり、注意を促したホームもあった。

消費者は何を信じて契約すればいいのか、不安になった。

●無料電話相談 毎週木曜日

●面接相談もお受けします。（有料）
電話でご予約ください。

TEL 〇三―三三三―二八五四

特集テーマ

二九一号の特集テーマ（八月一日発送）の特集テーマは「忘れ得ぬ友」です。

不思議なことに、これまで「わいふ」特集でしつかり友人の話が語られたことはなかったような気がします。

座談会 私も言いたい

二九一号のテーマは「泥棒体験を語る」です。

本当に物騒な世の中、世田谷の一家惨殺事件の犯人もなかなか捕まりません。郵便局の局長さんを知っていますが、毎日強盗が来はしないかとびくび

友人といってもいろいろな種類があ

って、ごく気楽な付き合いなのに、あとで考えるとあの友のおかげでこんなに救われていたのだなあ、ということもあれば、自他ともに許す深い仲の友人もあります。一人の友人との付き合いに、苦い思い出と楽しい思い出が同

くものだそうです。

読者の中にも泥棒……空き巣、すり、置き引き、深夜の電車内で眠っている人の財布を抜き取るものや、通りがかりの引ったくり、一番恐ろしい強盗など、さまざまな物盗りの被害に遭われた方があると思います。

居しているときもあるでしょう。

どんなかたちの付き合いでもいい、あなたの心のなかに大きな場を占めていた、あるいはいる友人について、どうか語ってください。

字数 四千字前後

締切 六月十日

その経験を語り合い、未経験の方々への警告とし、用心の参考にも供したいというのが今回の趣旨です。

ご参加をお待ちしています。

日時 五月十一日（金）午後二時～

場所 「わいふ」編集部

申込みは四月末日までに電話で。

私の意見・あなたの意見

二九〇号のテーマは「喫煙者に止めなさいと言うことの是非」です。

禁煙になっている場所で、スパスパやっている人があれば、「禁煙ですよ」と注意を促すのは全く問題ありません。

しかし禁煙の表示がなく、灰皿まで出ているというところで、それが公共の場所であったにしても、「止めてください」と、喫煙者を制するのは果たして是か非か？

タバコの煙がガン発病の原因の一つだといっても、自動車の排気ガスやさ

まざまの化学物質だって関係があるようです。どれをどこまで規制するか、現代社会の難しい選択でしょう。

タバコをのむ人のまない人、あなたは「止めなさい」に賛成ですか反対ですか？

字数 千字前後 締切 四月二十五日

定期購読を申し込まれている方はどなたも投稿できます。

投稿の前に以下を必ずお読みください。

◆「グランド」わが家の歴史写真

どこの御家庭にもある古い写真とその説明をお寄せください。「父・母を語る」「子育てのころ」などのテーマにそつてでも、ただ古い写真を並べても結構です。

お申し込みは電話で編集部まで。

◆特集

毎回テーマを設定しています。一四九ページをこらしてください。

「一六〇〇字のコラム」

(どのコラムも字数は目安で、多少長くても内容がよければ掲載します)

◆エッセイスト・クラブ

キマった文章、豊かな内容の随筆をお送りください。

◆スバリ一言

オピニオン、評論を。独自の意見で。

◆家族のスケッチ

同居、別居を問わず、あなたの家族のことをお書きください。

◆子育てフォーラム

おさない子、思春期の子、どんなときも親にとつて子どもの存在は気になるもの。あり

のままの関係を描いてみませんか。

◆ワーキングライフ

あなたは、どんな働き方をしていますか。さまざまな仕事の喜びや苦悶を語ろう。

◆ラブレター

人生八十年時代。趣味その他、仕事以外に生きがいを持つ方も多はず。あなたは何に夢中ですか。

◆フリートーク

どんなテーマでもどうぞ。どのコラムにも当てはまらないテーマの自由なコーナー。

「八〇〇字のコラム」

◆あなたへスマッシュ

本誌の投稿や記事についての感想、意見を載せます。何号のどの投稿に対するものかを明記して。

◆ことばでハッピー

言葉の使い方はとても難しいですね。時には人間関係をこわしたり。でも発想を変えて工夫することで、お互いの関係をよくすることも可能。失敗談も含めて面白い話題を。

◆パソコンワールド

急速に普及し始めたパソコン。楽しんでい

る人、振り回されている人、体験談を。

◆読んでよかった

読書感想文のコラム。どんなジャンルのものでも結構です。著者・出版社・出版年月日・定価を書くこと。本文は七六八字。

「四〇〇字のコラム」

◆笑える！

嫌な話題の多い世の中。思わず笑ってしまった楽しい話を。

◆私の意見・あなたの意見

賛成か、反対か。一四九ページにテーマを載せています。皆さんの率直な意見を求めます。

◆その他

◆私もひとこと (一四六ページ参照)

どんなことでも気軽に書きください。

◆わいふネット (一四六ページ参照)

教えて欲しい。聞きたい！ それに対するお答えも。読者参加のQ&A。

◆情報コーナー

お知らせ、募集など。要点を漏れなく整理してお寄せください。(見出し共で一四三・四行にまとめて)

投稿の

◆特別寄稿

字数自由。どのようなジャンルのものでも結構。本誌に適當と思われるものは掲載します。出版社に紹介することもあります。(ただし詩、短歌、俳句を除く)

◆コミック、イラスト、写真

一度作品をお送りください。本誌に合うものであれば依頼したいので。

注意

- 原稿はお返しできません。
- 投稿は一人一篇。ただし、「あなたへスマツシュ」「読んでよかった」「私もひとこと」「わいふネット」「情報コーナー」とはだぶつても可。
- 締め切りは原則として偶数月の二十五日。郵送で当日必着。(読みにくいので、ファクスではお送りにならないようお願いいたします)
- 他誌との二重投稿はお断りします。
- 写真や、イラストを用意できる方は原稿とあわせてお送りください。
- 誌上での匿名、ペンネーム使用可。ただし

いくつものペンネームを使い分けるのはご遠慮ください。

●掲載を希望しないお便りは「私信」と断り書きを。

●投稿は多少添削することがあります。

●原稿の最初に次のようにお書きください。

原稿用紙は必ず開いたまま右上一カ所を留める
ペンネーム・匿名希望の方は明記

<p>本文……</p>	<p>タイトル</p>	<p>コラム名</p>	<p>ペンネーム・匿名 住所 会員登録号 本名 電話番号 年齢</p>
-------------	-------------	-------------	---

(1)

ページを明記
(場所はどこでもよい)

匿名の方は住所を
載せるかどうか明記

なくても可

- 四〇〇字詰原稿用紙に縦書き。
- ワープロ打ちも二〇字×二〇行を一枚に。
へあて先〒162-0062 新宿区市ヶ谷加賀町二一五二六

わいふ編集部

編集集「だより」

◆特集「私の職業」は、ほんとうにたくさんすばらしいご投稿が集まりました。

二十年以上前に「主婦の再就職」という特集を組みましたが（二七四号）、その後女性の職業の幅はどんどん広がり、さまざまな体験が投稿されてきています。

今回もウェブプランナー・ライターという最新の職種や、アメリカの大学教授、ヒストロジック・テクニシャンなど、女性の社会進出のめざましさがよく分かりますね。

◆ペンネームによる連載「嫌疑」が終わりました。とても深刻な事件の体験記ですが、

ハガキか電話、ファクスでどうぞ。すぐに、本に郵便振替用紙を添えてお送りしますので、折り返しご送金ください。バックナンバーのご注文も同様です。限られた書店にしかおいてありませんので、直接お申し込みください。

購読申込は……

この中には高齢者の心の病、家庭と親族のあり方、女性と職業、夫婦の愛情、地域社会と個人の関係、それこそさまざまな現代社会の問題点が凝縮されています。

今の高齢者は終戦時の若者で、「お国のために死ぬ」などと言われて育ち、いきなりそれが敗戦で引っくり返り、以後物のゆたかさを求め、楽しい家庭づくりをめざして暮らして来たのです。でも物のゆたかさは心のゆたかさを育てないし、家庭は子供が成人すれば解体します。その過程で人生の価値を見失ってしまった高齢者は多いのではないのでしょうか。

◆「わいふ」のホームページはここしばらく更新していませんでしたが、近く新しい

購読中止は……

必ずお申し出ください。誌代が切れる際には、郵便振替用紙を同封してありますが、送金をお忘れになる方があるため、誌代が切れても、引き続き送本しています。ご連絡がないと、お送りしてしまいますので、ぜひハガキかお電話を。

形で再出発します。DTP編集になったのを受けて、工夫してみたいと思います。

◆「私の意見・あなたの意見」にご投稿が少なく、今号もありませんでした。テーマの立て方の問題とは思いますが……。

「こんなテーマを」というご提案でもけっこう、ハガキかFAXでお寄せください。にまめてくださる方を求めています。未経験の方でもけっこう。テーマ起しはしなくても、テーマを聞きながらまめてもよいのです。

少々ですが原稿料はもちろん出ます。ご希望の方は編集部にお電話をください。田中または和田がご説明しますので、月・水・金の午後にお願いします。

わいふ◆289 (隔月刊)
 ●発行日 2001年5月1日
 ●編集 編集部
 ●定価 620円(本体590円)
 ●年間購読料 4224円(送料共)
 ●印刷 平河工業社
 ●発行所 (株)グループわいふ
 〒162-0062
 東京都新宿区市谷加賀町
 2-5-26
 電話 (03) 3260-4771
 FAX (03) 3260-4773
 ●郵便振替 001503-110430
 加入者名 わいふ編集部



ew



othering



ystem

子どもに「生きる力」をつける子育てを！

密着育児——それが楽しいときもある。でもそのうちやってくる、やりきれない現実。核家族の日常の中で、子どもとの距離のとり方を学ぶのは難しい。NMSでそれを、ぜひ学んでください。

子育ては
NMS !!



▼二人の子どもに添い寝をしています。上の子を添い寝で育てたときはまだしも、次の子が生まれたら、上の子はますます私にくっつくようになって、私が下の子のほうを向くと、「こっち、向いて！」。

あーあ、これいつ終わるの？

▼機嫌のいいときに一緒に遊んであげましょう。なんて書いてある育児書がありますが、そんなことやってられつかと思います。

す！ 次男は一歳半ですが、すごく活発な子。家にいるときは、始終何かの上によじのぼっています。一人で何かして遊んでいるときは、親にとつてようやくほっとする一瞬なのに「一緒に遊んであげましょう」なんて言われるとうんざりです。子どもと遊んで楽しい人、いるの？

泣けば抱っこ、泣けばおっぱい——そんなふうに言われ始めたのはここ20年前から。それ以前の育児書を読むと、「えっこれナーニ」と目からウロコ。アメリカでも、まだまだ「厳しい育児」がふつうでした。

そしてあの時代、今のように我まな駄々っ子はいなかったのです。子どもを愛しても、なめられない親になりました！

資料請求は 〒162-0062 東京都新宿区市谷加賀町 2-5-26

NMS研究会へ。 ☎03-33260-5500 FAX 同 3260-9398

◎朝日新聞をはじめ、各紙にて紹介の書!

非情の庭

無実の学徒戦犯

樋口茂子著 戦争裁判の矛盾を自ら起こした死刑因助命嘆願運動を通して明らかにし、戦犯者のぬぐいがたい心の傷を痛切な思いで書き綴った戦争文学屈指の名著、待望の復刊。二四〇〇円



ひとりであるみんなと楽しむ シニア世代のための

心も体もすっきり指体操

みんな楽しんで シニア世代のための

心も体もすっきりゲーム

余暇問題研究所著／高橋和敏・山崎律子編 だれでも簡単にできる指体操とゲームを各六〇紹介。福祉施設職員の方やレク指導者にもおススメの二冊。各一八〇〇円

多様な心身症も本質を理解すれば恐くない

ストレスとうまく付き合うQ&A

福居顯二編著 現代にあふれるストレスを理解するための一〇一問。第一線臨床医による書き下ろし。二四〇〇円

家庭崩壊の危機から立ち直るために

不登校・家庭内暴力・病弱児のQ&A

中尾安次編著 多くの事例を随所に紹介。二〇〇〇円

各国企業の働く女性たち

柴山恵美子・藤井治枝・渡辺峻編著●取り巻く現状と未来展望 働く女性の異なる環境と共通の悩み。三〇〇〇円

日本企業の働く女性たち

藤井治枝・渡辺峻編著●取り巻く現状と未来展望 仕事とプライベートを両立させるためのメッセージ。二六〇〇円

男女共同参画と女性労働

赤岡功・筒井清子・長坂寛・山岡照子・渡辺峻著●新しい働き方の実現をめざして 労働環境整備の方途を探究。二六〇〇円

現代日本の女性労働とジェンダー

本木喜美子・深澤和子編著●新たな視角からの接近 女性とその労働世界を多面的に把握する。三五〇〇円

介護保険最前線

日独の介護現場の取材から斎藤義彦著 丹念な取材を通して介護保険の実像に迫る。『そく』が知りたい公的介護保険! 第二弾! 二二〇〇円

新・介護保険総点検

各制度はこう変わった川村匡由著 各立場からみた介護サービスの变化と課題。新情報を満載した待望の新版、好評発売中! 二四〇〇円

新・介護福祉学とは何か

一番ヶ瀬康子監修 日本介護福祉学会編 介護福祉をあらためて本質的に問うと同時に実践的に探究することをめざす。二二〇〇円



ミネルヴァ書房

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1番地 宅配可・価格は税別
TEL075-581-0296 FAX075-581-0589 <http://www.minervashobo.co.jp/>